

第四章 第120次調査A区の概要

1. 発掘調査の方法

第120次調査では、第102次調査・第107次調査とは異なり、矢板打ち込みから地中梁工事までが、事前に行われることになった。したがって、周囲の矢板打ち込み、現地表下130cmまでの表土掘削・搬出、地中梁工事などの終了を待って、平成11年10月28日、発掘調査に着手した。

第120次調査では、調査対象地が二地点に分かれた。発掘調査期間としては継続した調査であったため、調査次数・調査番号はひとつになっているが、調査内容は全く異なり、設定した遺構検出面の枚数も違う。したがって、本報告にあたっても、両者を分け、調査時の呼称であるA区・B区を用いて、別々に報告することにした。

発掘調査にあたっては、前二地点と同様、道路用地の一部分が通路として既に使用されていたため、矢板打ち込み範囲が著しく限定され、大量の未掘部分を生んだ。この調査対象からはずれた部分は、前二地点とは異なり、民家に接しておらず、残土置き場として使用することができた。

A区の発掘調査では、良好な整地面の累重がみられ、これら整地面を手がかりに遺構検出面を設定した。調査前の表土搬出直後の面は、標高4m程度で、灰色粘土の整地面を露呈していた。しかし、顕著な遺構はほとんどなく、遺構検出面としては有効ではなかった。実は、この標高は、調査区に隣



Ph.112 120次調査地点遠景（南より）

接した聖福寺塔頭護聖院の現地表と大差なく、近世頃の寺院の敷地内と思われた。そこで、さらに20~30cm下に確認できた、炭層直下の整地粘土層を第1面として、調査を開始した。

以下、長辺方向にトレントを設定、造構壁面に表れた土層の変化を参照しつつ造構検出面を設定し、第2面から第5面までの掘り下げ、精査を実施した。

2. 基本層序

第120次調査A区の基盤は、北西側では砂丘砂である。この砂丘上面は、調査区の丁度中程から急激に下降し、南東側では、汚染された砂の堆積となる。砂丘の傾斜は、浅い谷状地形の存在に起因すると思われるが、本調査地点での谷地形は、博多遺跡群のこれまでの地形復元からは、想定されていなかった。この地形環境の復元については、第6章で検討を加える。

調査区南東側に堆積した、汚染された砂の堆積の下層には、グライ化した泥土層が、水平方向に堆積しており、湿地状態であったことを示している。すなわち、砂丘が落ち込んだ谷状地形は湿地となり、おそらく人為的に埋め立てられ、生活域に取り込まれたと思われる。埋立によると思われる砂の直上から、第1面までの間には、分厚い整地層が堆積している。整地層には、造構の掘り込み面・焼土面・粘土面などから、数回の単位が認められ、たびたび整地と建て替えが行われた様子がうかがわれる。A区で調査した第1面から第3面までは、この整地層中に設定した造構面である。第4面は、埋立と考えられる砂層の上面から砂丘面にかけて、第5面は、埋立下部にあたる。



Ph.113 調査区南東端トレント（北西より）

3. 各遺構検出面の概要

第1面

標高3.6~3.8mで設定した遺構面である。灰色粘土による整地面で、直上を炭層が覆っていた。火災により廃絶した生活面であろう。

調査区南東端で、井戸の切り合いが検出された。上位にある041号遺構は15世紀末頃、下位の042号遺構は14世紀の井戸と思われる。

第1面の時期としては、14世紀前半から中頃と思われる。

第2面

標高3.2~3.5mである。黄灰色粘土面を指標に設定した。調査区の南東側で、薄く炭を被り、玉砂利が集中する部分が検出された（101号遺構、後述）。

14世紀前半を中心とする時期の遺構を検出した。

第3面

標高2.9~3.1mを測る。黄色粘土面で設定した。一部では薄い焼土を挟んで直下にも同様の粘土面があり、第3B面として部分的に設定している。

13世紀後半を主とする。

第4面

標高2.9~2.3mと、北西から南東に傾斜する。砂質土層の上面で設定した。

調査区中央で東西方向に土質の変化がみられたが、第5面の池状遺構（408号遺構）の埋土が露出したものである。

13世紀の遺構を検出した。

第5面

標高2.9~2.2mを測る。最下層の確認のために設定した遺構検出面である。砂丘谷部に営まれた溝（410号遺構、12世紀後半）が、最も遡る遺構となる。なお、砂丘状に営まれた土壤墓（376号遺構）は、11世紀代の可能性がある。



Ph.114 第1面全景（南東より）

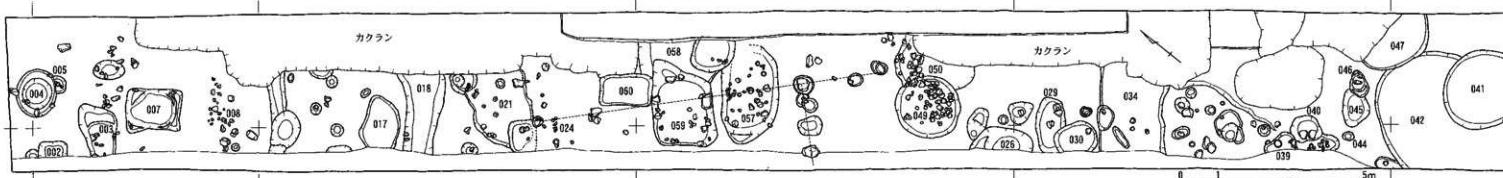


Fig. 135 第1面造構全体図 (1/100)

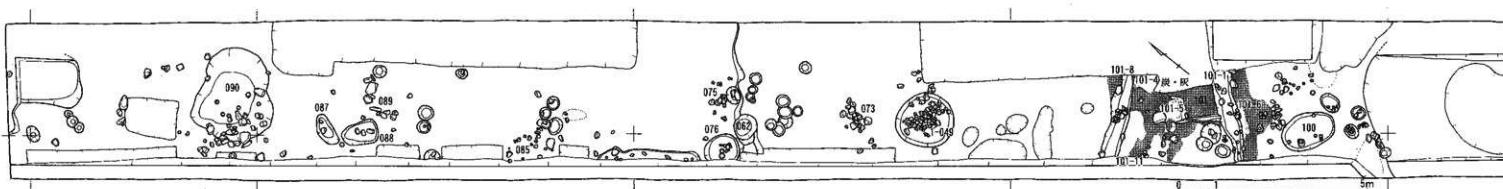


Fig. 136 第2面遺構全体図 (1/100)

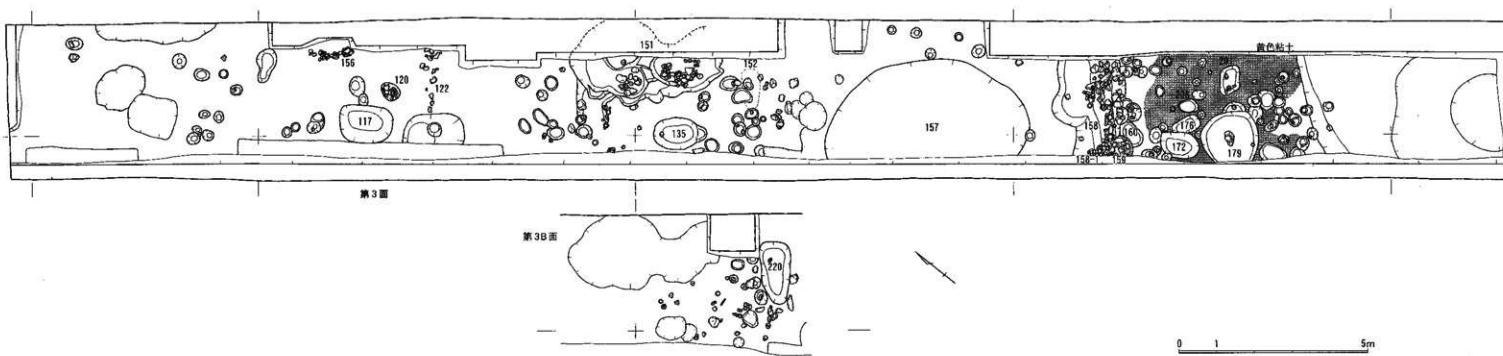


Fig. 137 第3面遺構全体図 (1/100)

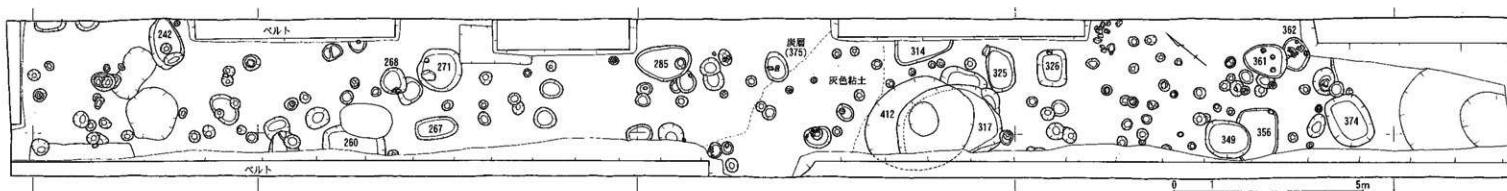


Fig. 138 第4面遺構全体図 (1/100)

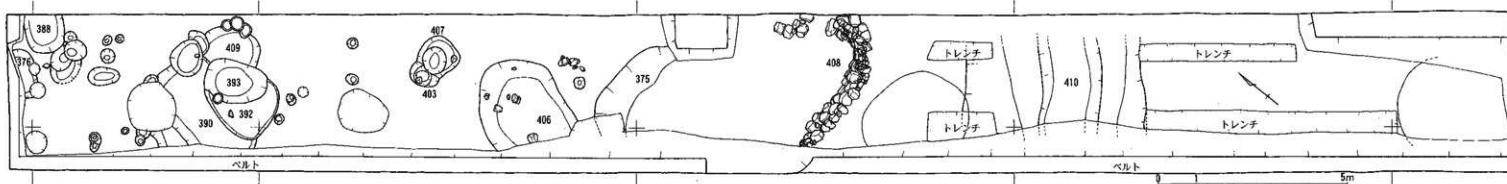


Fig. 139 第5面遺構全体図 (1/100)

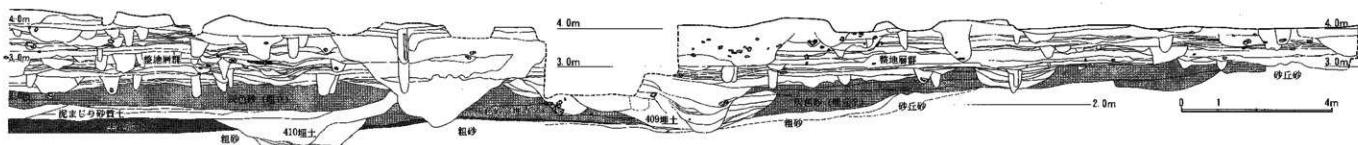


Fig. 140 120次A区南西壁土層実測図 (1/100)

4. 遺構と遺物

(1) 埋葬遺構

376号遺構

第5面の、北西辺において検出した土塚墓である。砂丘状に営まれている。過半が調査区外にでると思われ、全容は知り得ない。極めて遺存状態が悪く、取り上げられなかつたが、人間の下肢骨と思われる骨片が出土しており、土塚墓と考えて大過なかろう。

出土遺物は少なく、時期を決め難いが、底部鋸切りで丸底に作る土師器壺の小片が出土しており、11世紀代の遺構である可能性がある。



Ph.115 376号遺構人骨出土状況 (東より)

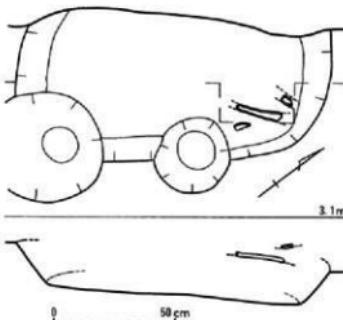


Fig.141 376号遺構実測図 (1/20)

(2) 土坑

007号遺構

第1面で検出した土坑である。長辺140cm、短辺100cmの長方形を呈し、深さは130cmを測る。

出土遺物を Fig.142 に図示する。1～7は、土師器である。1～5は皿で、体部中程で屈曲して丸みを持つ2・5と、直線的に短く立ち上がる1・3・4とが見られる。6・7は壺である。これらの皿・壺の底部は、回転糸切りされる。8は、褐釉陶器の茶入れである。胎土は極めて肌理が細かく、薄く作られている。9は、白磁の口禿皿である。10～12は、青磁である。10は碗で、口縁部は外反する。11は、皿である。疊付まで輪がかかり、高台内の丸く露胎とする。13～15は瓦質土器である。13は香炉で、口



Ph.116 007号遺構 (南東より)

縁下に丸く隆起した珠文と菊花の印花文とが並ぶ。脚が付いていたと思われるが、剥離している。14・15は、すり鉢である。16～22は、土師質土器である。16～20はすり鉢、21はこね鉢、22は土鍋である。

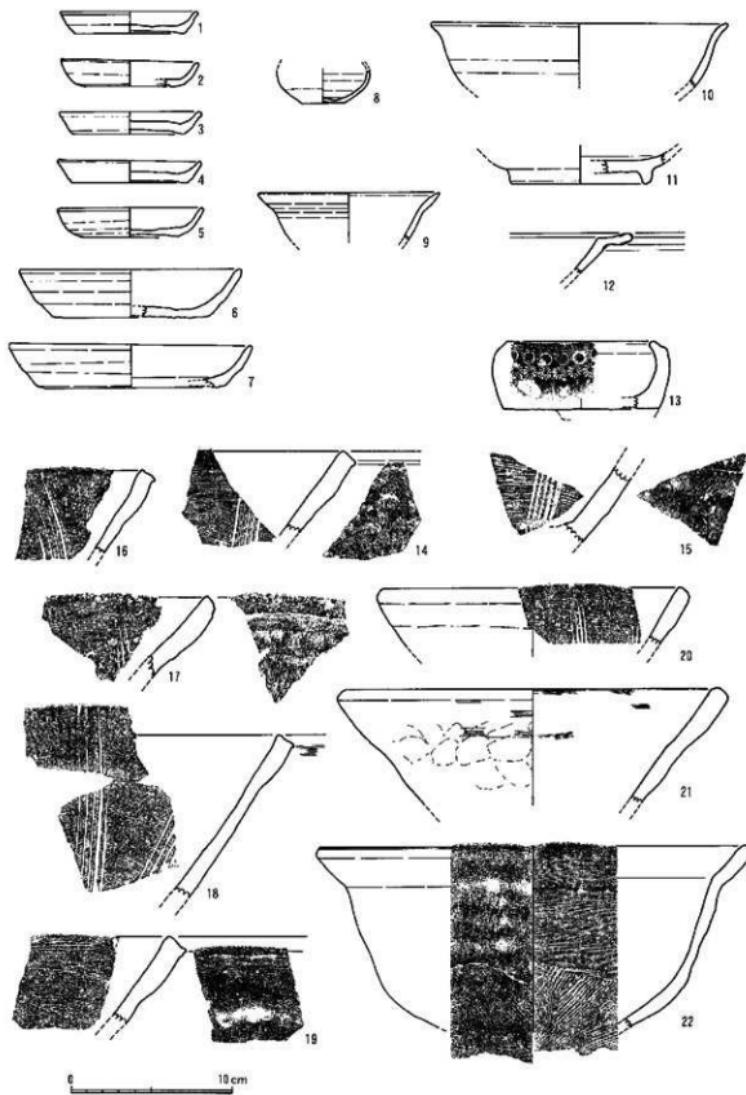


Fig.142 007号墓出土遺物実測図 (1/3)

22の外面には、厚く煤が付着している。この他、青磁・天目茶碗・鉄滓などが出土している。
14世紀後半に位置づけられよう。

008号遺構

第1面から検出した、遺物の集積遺構である。幅60cm、長さ170cmにわたって、土師器の皿・壺、瓦質土器のすり鉢・銅錢などが、散布していた。上層からの掘り下げに際して出土しており、精査したが明瞭な掘り方は確認できなかった。なお、遺物は、標高3.95~3.7mにかけて、北から南に緩やかに下降しつつ出土している。

出土遺物をFig.143に示す。1~13は、土師器である。1~9は皿で、3・4の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。10~13は壺である。10は、肉厚で、体部の立ち上がりが急で筒状を呈している。通常の壺とは明らかに一線を画しており、注意を要する。14は青磁の端反碗、15は天目茶碗である。16は土師質土器のすり鉢、17は瓦質土器のすり鉢である。内面は、使用のため擦れています目が消えている。18は、土師器の土鍋である。19は平瓦で、コビキ痕がみられる。20・21は、石製品である。20はぎっこう玉、21は砥石である。

14世紀後半の廃棄土坑であろう。

021号遺構

第1面で検出した土坑である。不整形の大形の土坑だが、掘り込みは浅い。

出土遺物をFig.144に示す。1~5は土師器である。1~3は皿である。1は小振りだが器高が高いタイプ、2は偏平なタイプ、3は体部が丸みを持つタイプで、底部は回転糸切りする。4・5は、壺である。5は大形の壺で、口径18.2cmを測る。回転糸切りである。6は、瓦質土器の香炉である。口縁下に浅い沈線を巡らし、菊花のスタンプを押す。7は、青白磁の腰折皿である。内面見込みには、鳳凰の羽と思われる印花文、体部に菊弁を彫る。8は、土鍋である。9~14は瓦質土器で、9~11は火鉢、12~14はすり鉢である。15は、平瓦である。小口の面取りなど、丁寧に調整されている。

14世紀後半~15世紀の廃棄土坑と考えられる。



Ph.117 085号遺構（北西より）

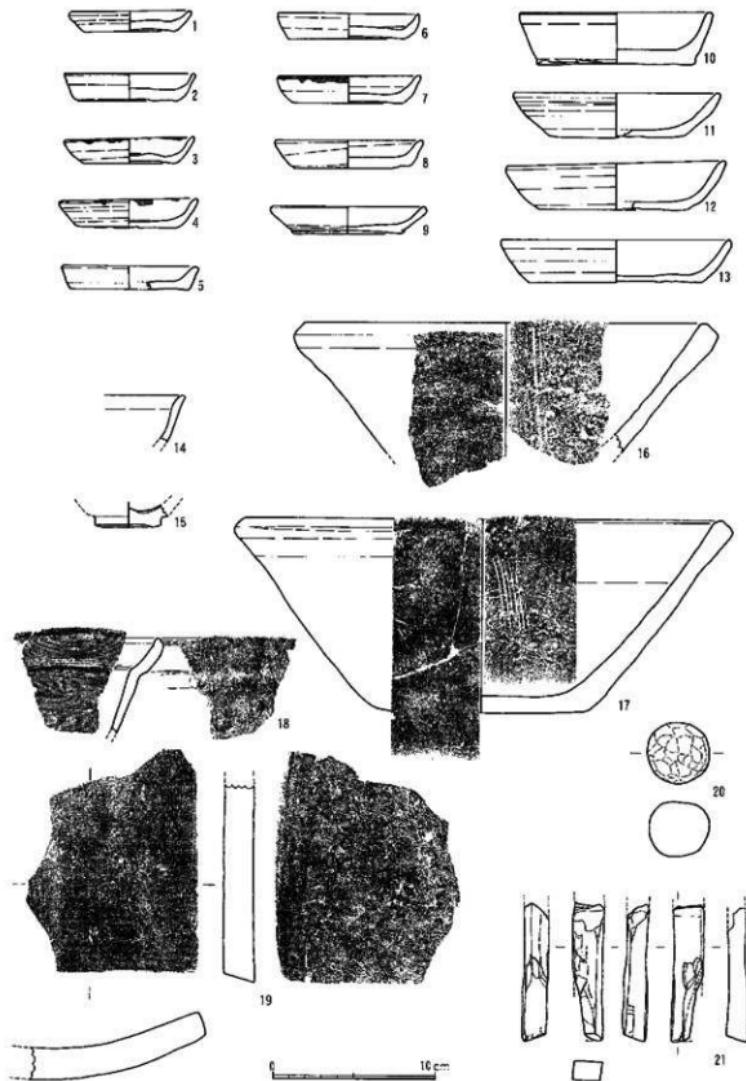


Fig. 143 008号遺構出土遺物実測図 (1/3)

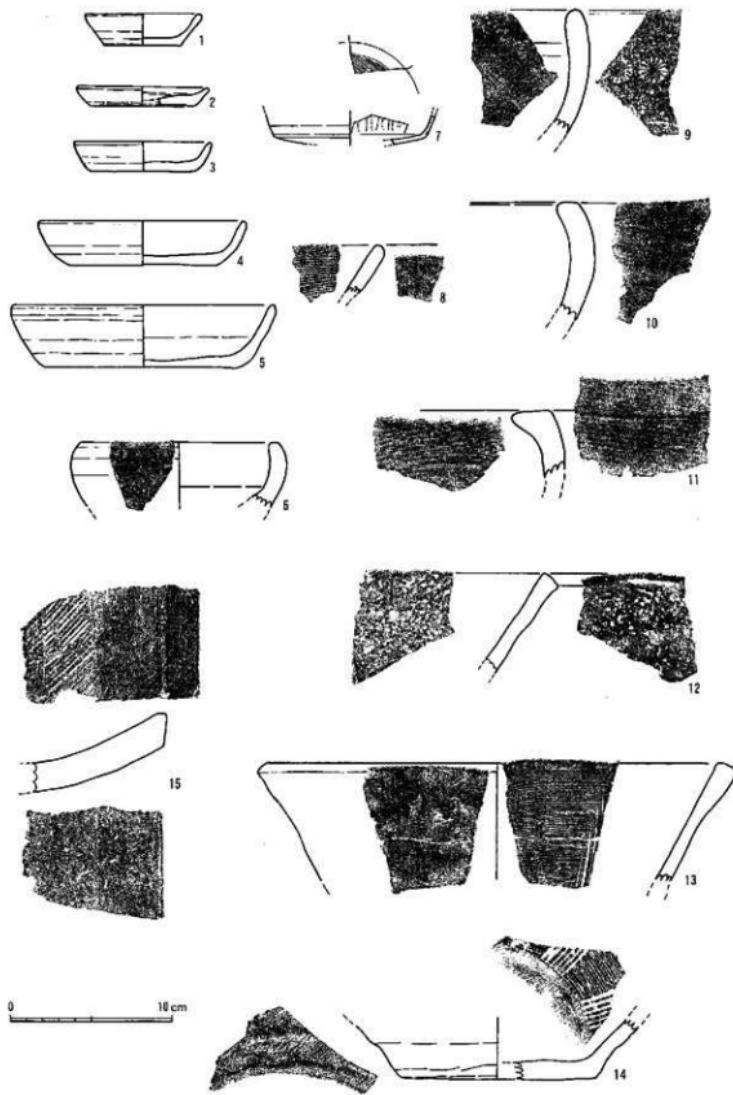


Fig. 144 021号遺構出土遺物実測図 (1/3)

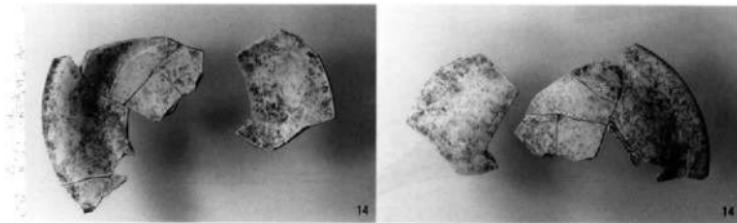
049号遺構

第1面より検出した土坑である。径170cm前後の円形を呈し、土坑内からは大量の礫がまとまって出土している。土坑の上面では、礫は土坑の北側に間断なく延びており、廃棄というよりも意図的におかれた可能性が高い。機能・性格は、明らかにし得なかった。

1~14は、土師器である。1~7は皿である。全体に器高の高めなものが多い。8~12は、壺である。以上は在地の土師器で、底部を回転糸切りする。13も壺であるが、口径に対して底径が著しく小さく、体部は大きく開く。器壁は薄く、強いクロ口がつく。胎土は精良で、灰白色を呈する。搬入土師器であろう。14は京都系土師器で、伊野分類のIa-1類である。内外面に赤色顔料で、紅葉の葉を散らす。15は、須恵器系陶器の卸皿である。口縁部直下には菊花のスタンプを巡らし、内底部には笠で御目を刻む。生産地は不明だが、特異な製品で、注文生産品であろう。16は青磁碗、17・18は白磁碗である。17の見込みは露胎で、白砂が輪状に巡り、赤茶色の胎土目が三ヶ所につく。19は、瓦質土器のこね鉢である。20は土師質土器のすり鉢、21は備前焼のすり鉢である。間壁編年IVa期に属する。22は、土師器の



Ph. 118 049号遺構（北東より）



Ph. 119 049号遺構出土遺物

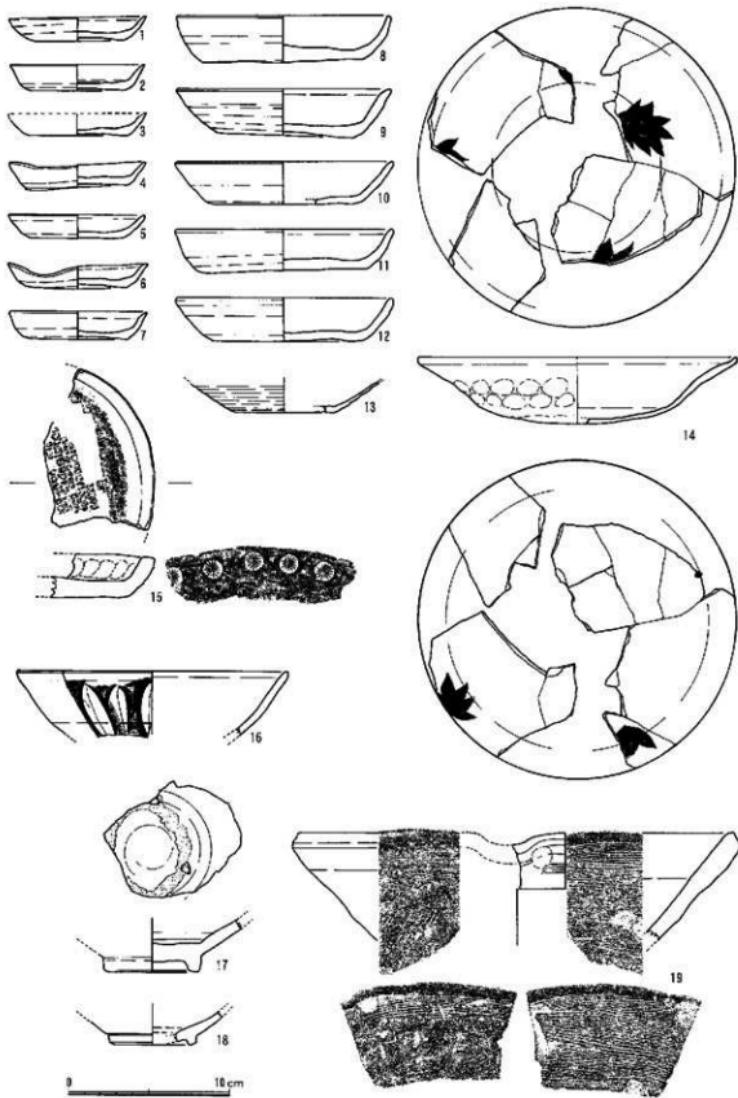


Fig. 145 049号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

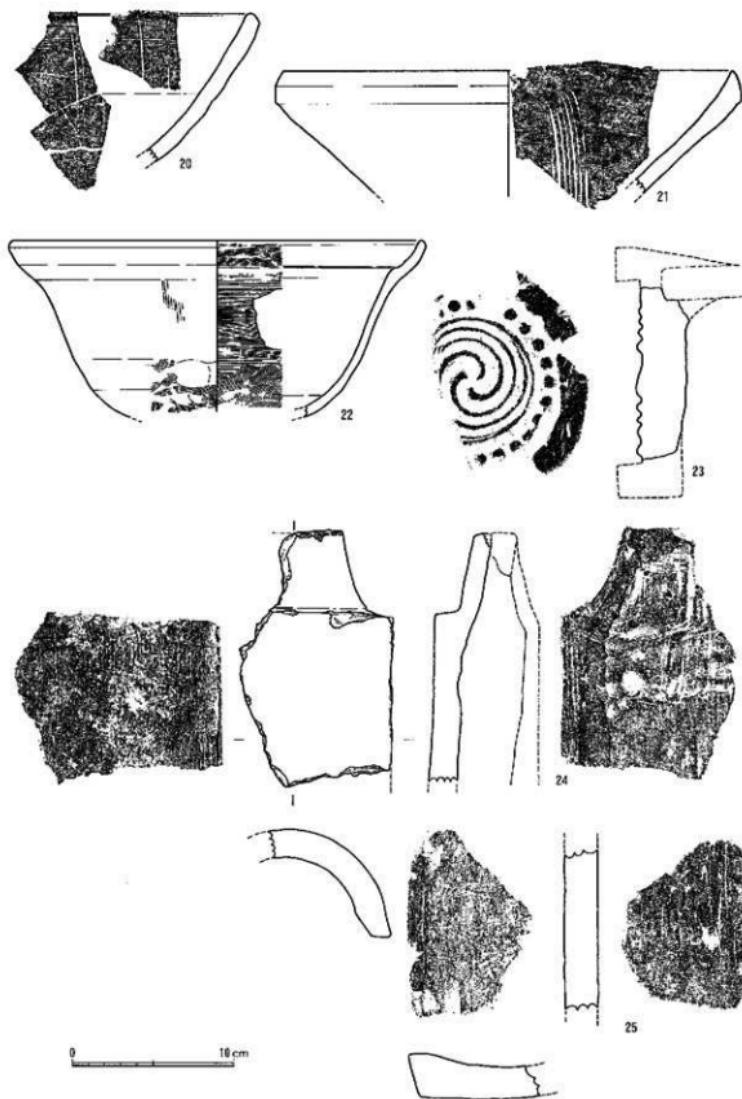
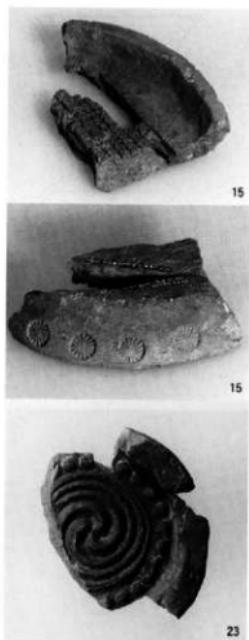


Fig. 146 049号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph. 120 049号遺構出土遺物

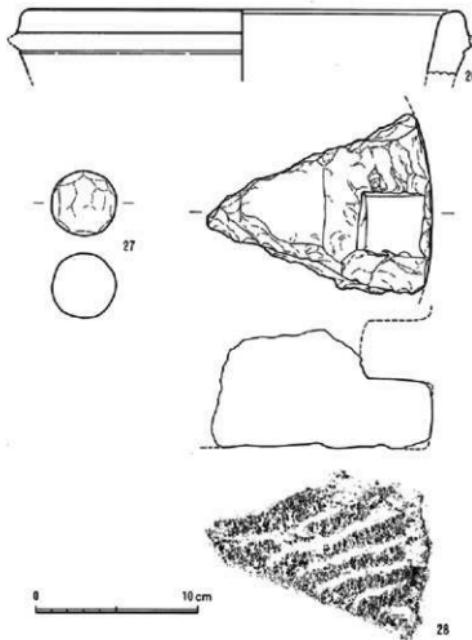


Fig. 147 049号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

土鍋である。23～25は、瓦である。24の丸瓦の外面には繩目痕、内面には布目根が残る。25は平瓦で、表面には離れ砂が付着している。26～28は、石製品である。26は土鍋、27はぎっこう球、28は石臼である。28は小片だが、直径50cm前後になると思われ、雑穀用の曳き臼であろう。

15世紀前半の土坑と思われる。

152号遺構

第3B面で検出した、かわらけ溜まりである。遺構検出面上に、土師器の皿・壺が集中しており、半剖して精査したところ、土坑の底と思われる土質

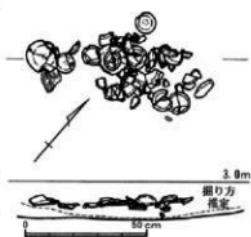


Fig. 148 152号遺構実測図 (1/20)



Ph. 121 152号遺構 (北より)

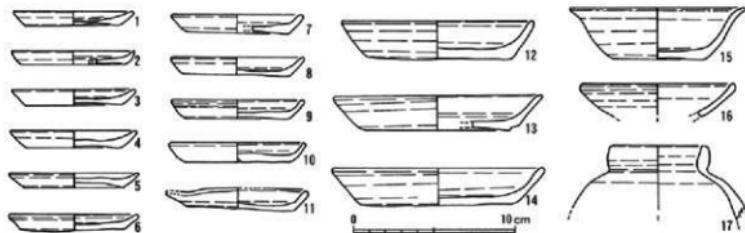


Fig. 149 152号遺構出土遺物実測図 (1/3)

の変化を確認した。よって、断言はできないが、浅い土坑に土師器を一括廃棄したものと考えられる。

出土遺物を Fig. 149 に図示する。1~14は、土師器である。1~11は皿で、口径7.4~8.6cm、器高0.9~1.25cm を測る。12~14は坏で、口径11.8~13.0cm、器高2.2~2.3cm を測る。これらの皿・坏の底部は回転糸切りである。15は、白磁の口禿皿である。

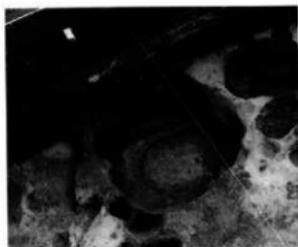
16~17は陶器で、16は褐釉の皿、17は褐釉の瓶である。

13世紀代の遺構である。

179号遺構

第3面で検出した土坑である。径150cm 前後の略円形を呈し、深さは55cm 程度を測る。

出土遺物を Fig. 150 に示す。1~6は、土師器である。1~4は皿、5・6は坏で、ともに体部が直線的に開くものと丸みを持つものがある。底部は、回転糸切りする。7~11は、青



Ph. 122 179号遺構 (東より)

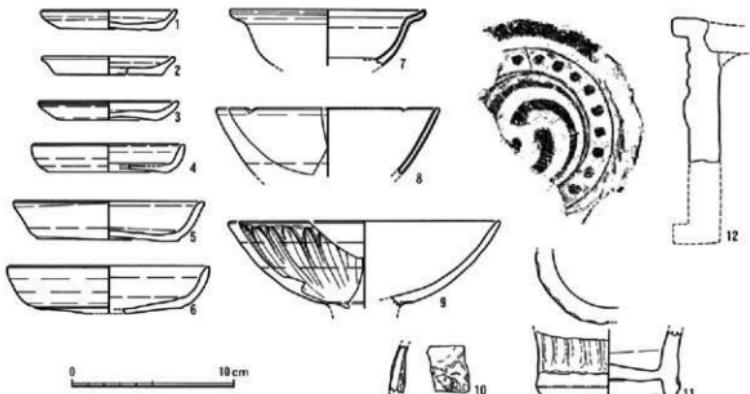


Fig. 150 179号遺構出土遺物実測図 (1/3)

磁である。7は小鉢、8・9は碗、10・11は花生けで、10・11は部位としては離れるものの同一個体の可能性が高い。12は、軒丸瓦である。このほか、平瓦(コビキ)片なども出土している。

13世紀後半頃の廃棄土坑であろう。

374号遺構

第4面で検出した土坑である。長径135cm、短径110cmの略梢円形を呈し、深さ約60cmを測る。埋土中程に、流れ込むような形で、砾・土器・陶磁器などが出土している。

出土遺物をFig.152~154に示す。1~13は、土師器である。1~6は、皿である。6は、体部が高く薄手、黄灰色を呈する白色系土師器である。ロクロ土師器で、底部は回転糸切りする。嵌入品であろう。7~13は壺である。法量から3タイプに分かれる。9の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことを示している。14~16は、白磁である。14・15は口禿の皿、16は口禿碗の底部である。17~23は、青磁である。17~19は小鉢、20・21は碗、22は盤である。全面施釉し、疊付きのみ袖を搔き取って露胎とする。23は水注である。24・25は、青白磁である。26~28は、陶器である。26は灰褐釉のこね鉢、27は褐釉の壺、28は黄釉の盤である。29は、滑石製の石鍋である。30~37は、瓦である。30~31は鬼瓦である。30には右眼・鼻・口の一部が残っている。31は、目の部分であろうか。突出していた筈の眼窓部分は、剥落している。破面に右鼻孔の一部と口の一部が認められる。32~35は平瓦である。

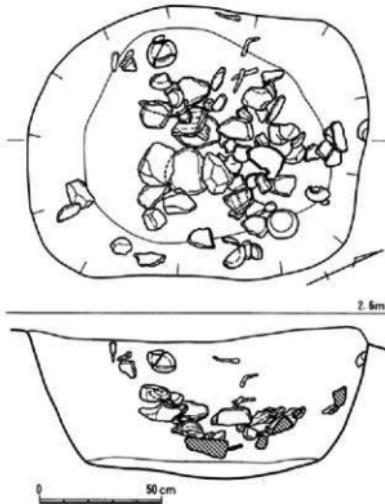
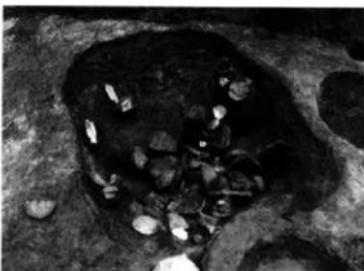


Fig. 151 374号遺構実測図 (1/20)



Ph. 123 374号遺構 (東北より)



Ph. 124 374号遺構出土遺物

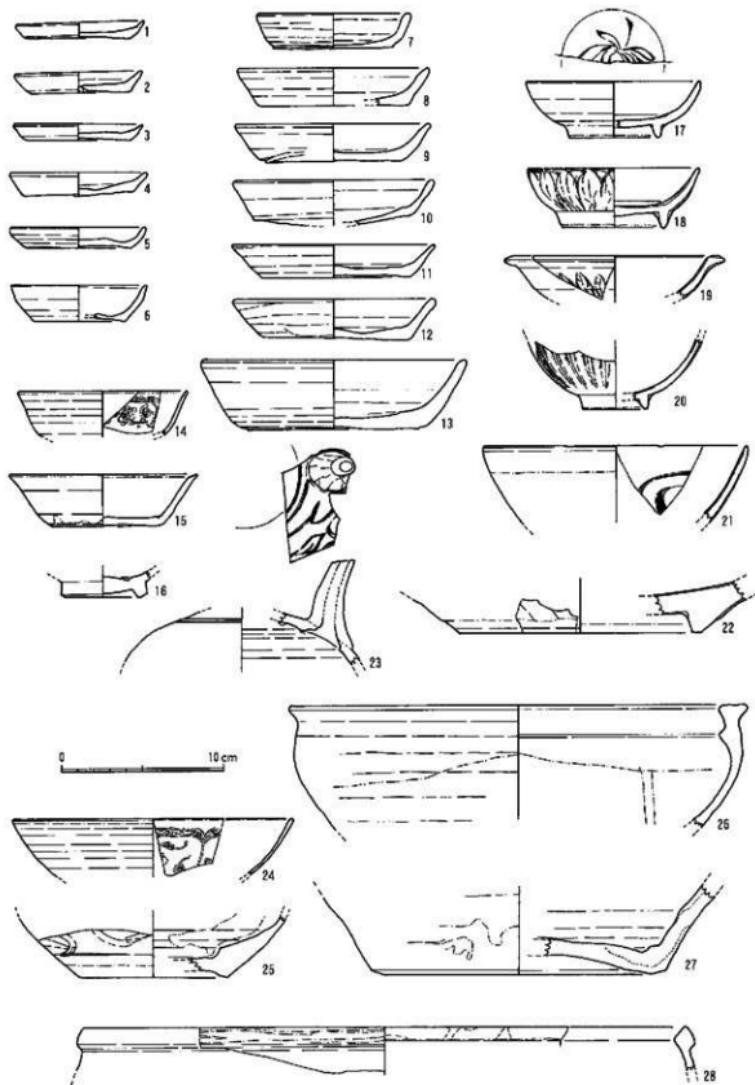


Fig. 152 374号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

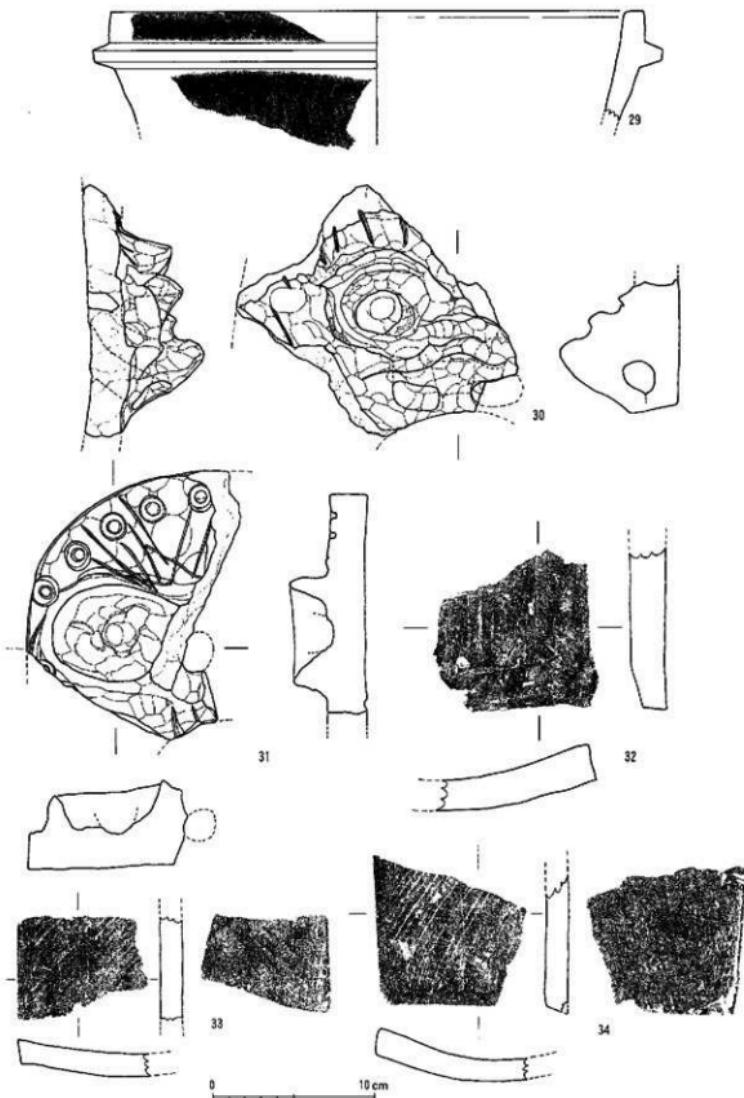


Fig. 153 374号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

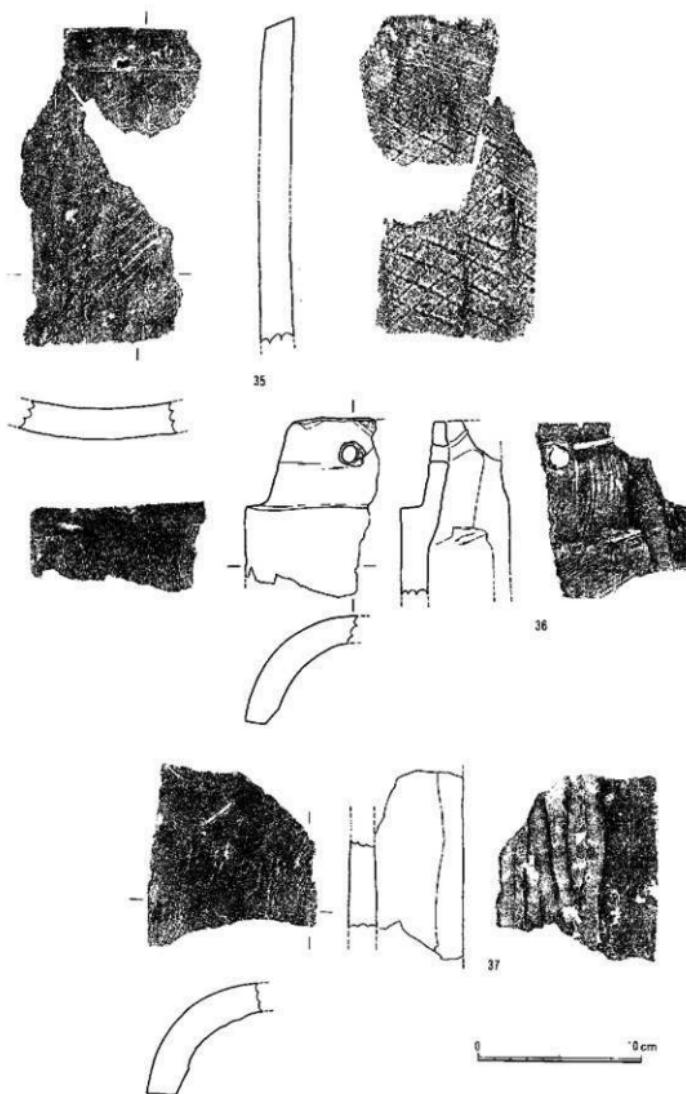


Fig. 154 374号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

る。コビキ痕が見られ、35ではコビキ痕に格子叩き目が被っている。36・37は、丸瓦である。このほか、鉄釘・炭化米のかたまり（おにぎり状か）が出土している。

青磁盤の高台から、14世紀後半と思われる。

（3）井戸

412号遺構

第4面で検出した井戸である。317号遺構（大型土坑）に切られるが、第3面においてもこの部分で大きな掘り込みの存在を確認しており、317号遺構と412号遺構にあたる可能性がある。



Ph. 125 412号遺構（北東より）

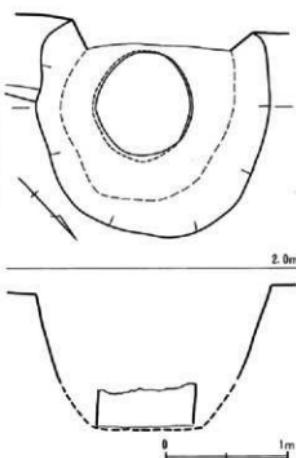


Fig. 155 412号遺構実測図（1/40）

412号遺構の掘り方は、第4面上では、さしわたし280cmを測る。Fig. 155に示したのは、第5面で作成した実測図である。井筒には、直径80cmの結い桶を据える。

土師器（底部回転糸切り）・白磁（口禿）・陶器・瓦（コビキ）・砥石などが出土しており、13世紀後半～14世紀前半の井戸である。

（4）溝状遺構

122号遺構

第3面で検出した溝状遺構である。幅30cm程度の浅いくぼみに、瓦が投棄された状態で検出されたもので、調査区を南西から北東に横断している。

出土遺物をFig. 156に示す。1・2は、土師器である。1は皿であるが、体部の立ち上がりは非常に小さく、偏平になる。2は壺で、体部下位に棒状工具が当たったへこみが見られる。皿・壺とも、回転糸切りである。3～5は平瓦、6は丸瓦である。いずれもコビキ痕跡をとどめ、離れ砂が付着している。

14世紀前半頃であろう。



Ph. 126 122号遺構（南より）

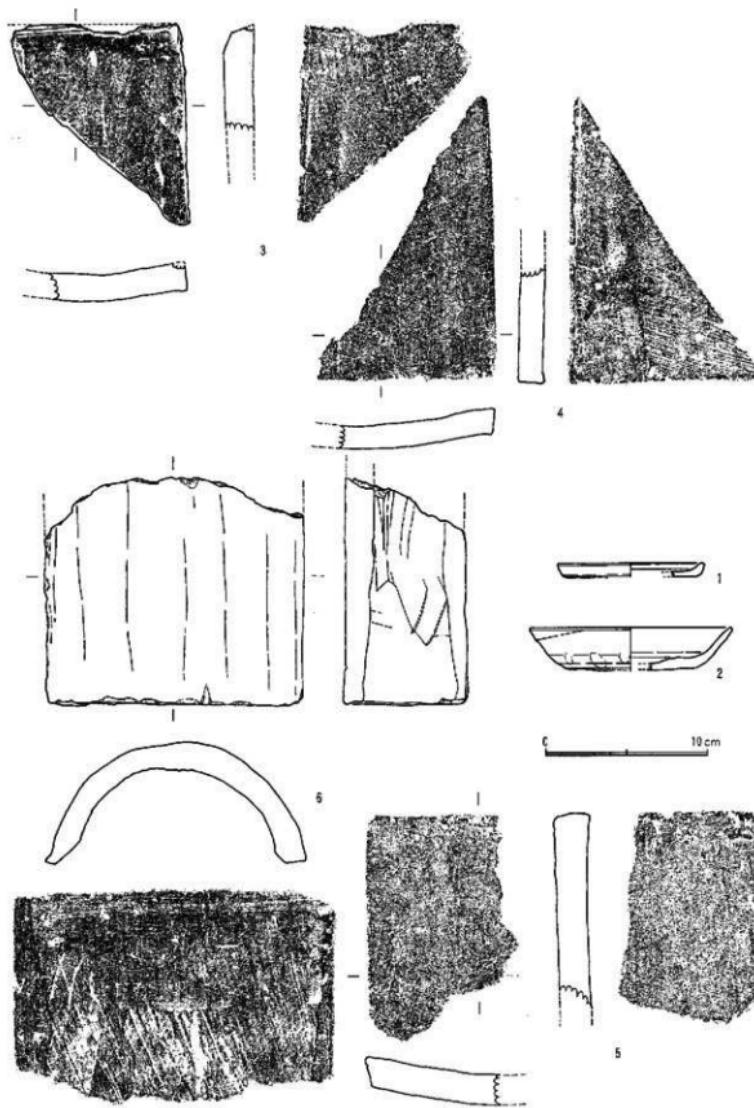


Fig. 156 122号墓出土遺物実測図 (1/3)

156号遺構

第3面から検出した、溝状遺構である。規模・構造等は、122号遺構とほぼ同様であるが、122号遺



Ph.127 156号遺構（南東より）

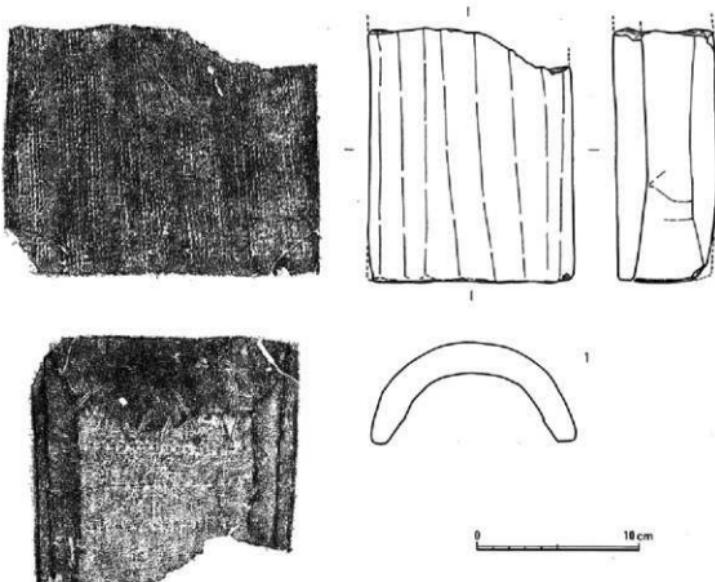


Fig.157 156号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

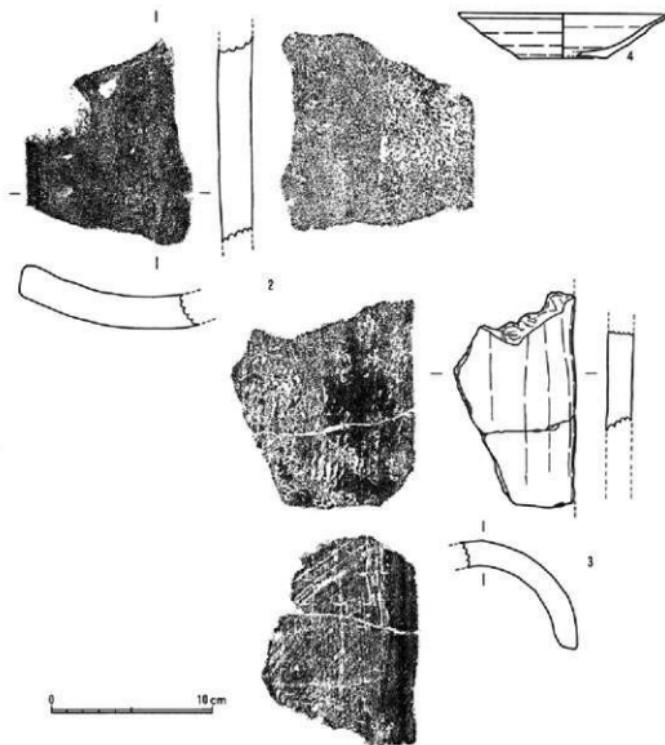
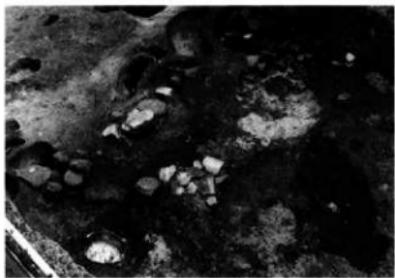


Fig. 158 156号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

構と直交する方位を取る。一連の遺構と言えよう。

出土遺物を Fig. 157・158に示す。1・3は、丸瓦である。上面は縄目叩き、下面には布目が認められる。2は、平瓦である。コビキ瓦で、下面には離れ砂が付着している。4は、土師器の壊である。口径に対し、著しく小さい底部を持ち、体部は大きく開く。胎土は精良で、薄手に作られている。焼成も良好で、堅緻に焼き上がり、黄白色を呈する。そのほか、土師器の小片が出土している。

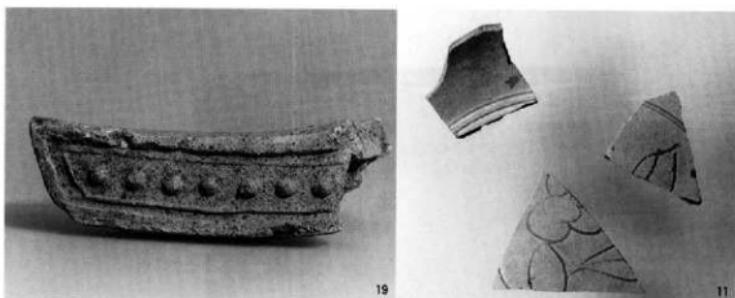
出土遺物からは時期を判断する決め手を欠くが、122号遺構と同時期であろう。



Ph. 128 156号遺構 (北より)

158号遺構

第3面より検出した遺構である。浅い溝状を呈し、調査区南西壁際では、平瓦片を敷き詰めている。全体的には、東側を主に礫が散らばり、それに混じって土器類がみられる。土層の観察においても、顯著な溝状の落ちはなく、排水等の機能を負ったものではない。敷き詰められた平瓦に注目すれば、



Ph.129 158号遺構出土遺物

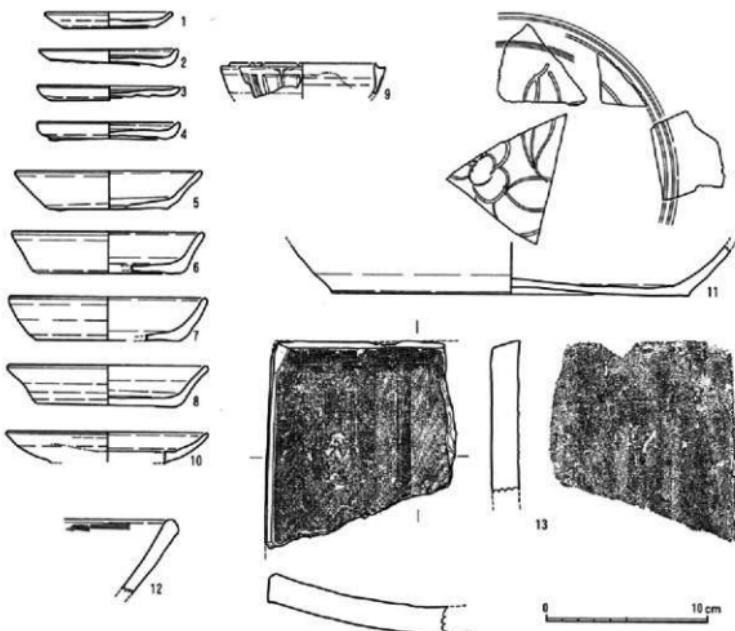


Fig.159 158号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

舗道の可能性もあるが、碟・土器の状況からは是認し難く、一応、区画溝と考えておく。

出土遺物を、Fig.159～162に示す。1～8は、土師器である。1～4は皿で、2～4の体部は小さく、偏平な形態を取る。5～8は、壺である。これら皿・壺は、底部を同軸糸切りする。9は、白磁の合子である。10・11は、陶器である。10は櫻釉の皿である。11は、白化粧土を塗った後、丸刀で削り取り、花文を描き、透明釉を薄く施釉する。胎土は灰色で、きめ細かく精良である。12は、瓦質土

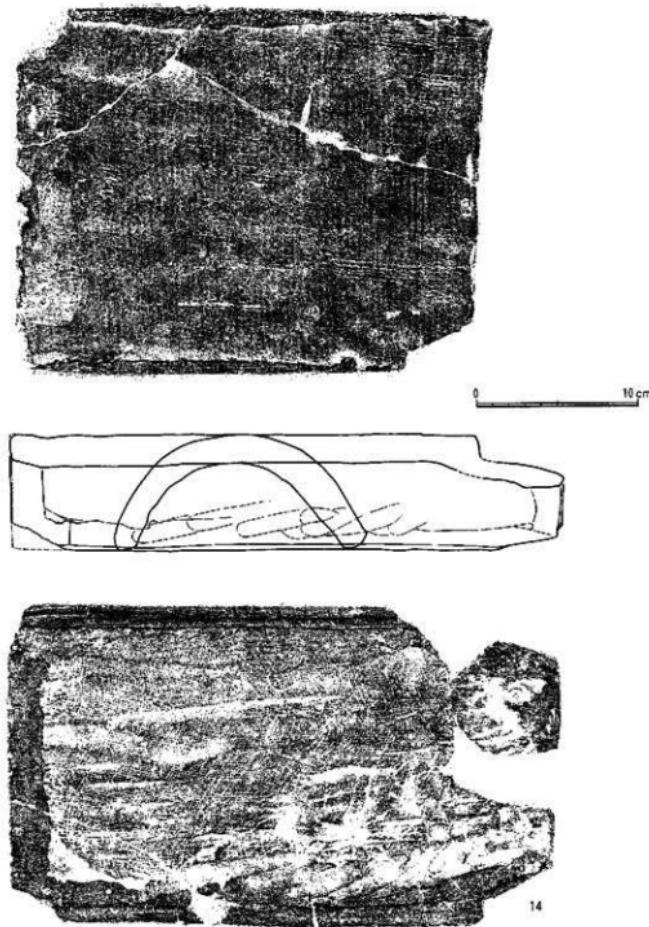


Fig. 160 158号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

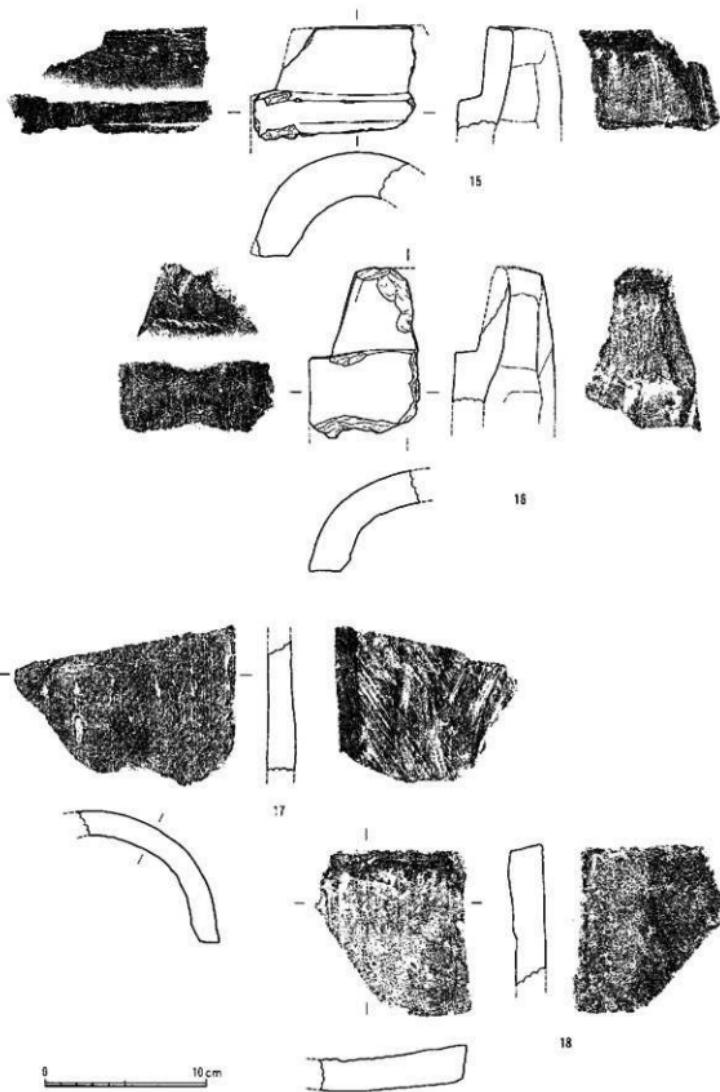


Fig. 161 158号遺構出土遺物実測図 3 (1/3)

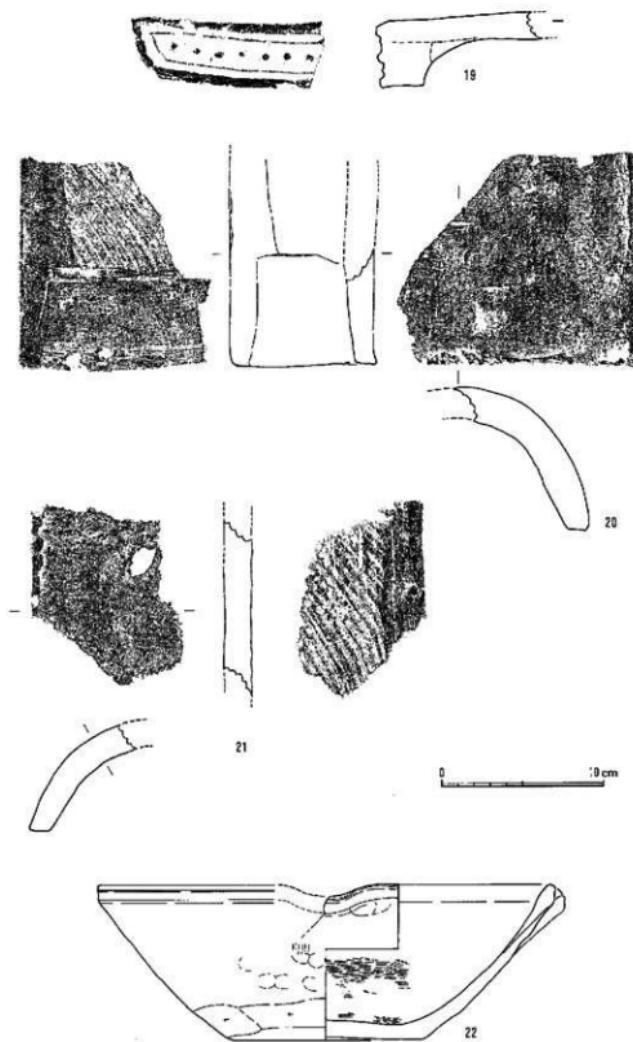


Fig.162 158号遺構出土遺物実測図4 (1/3)

器の鉢である。13～21は、瓦である。15～18は、南西壁際に敷き詰められていた瓦の一部である。19～21の瓦は、158号遺構北側に固まって捨てられていたものである。22も北側付近から、数片に分かれて出土した瓦質土器のこね鉢である。体部下位に、横方向の窓削りを加えている。このほか、蓮弁文の青磁碗、小札状の鉄片などが出土した。

13世紀～14世紀前半の区画遺構であろう。



Ph. 130 410号遺構（北東より）



Ph. 131 410号遺構出土遺物

410号造構

第5面より検出した溝である。前節「基本層序」の項で述べた、埋立砂層中に掘り込まれている。掘り込み面は、Fig. 140に見るよう、溝の北西側で高く、南東側で低い。おそらく、埋立自体に駆行性があり、北西の砂丘側からの埋立が停滯した時点で、その境界に410号溝が掘削されたものであろう。第5面調査時で、溝幅470cm、深さ115cmを測る。

出土遺物を Fig. 163・164に示す。1・2は、土師器である。底部は、回転糸切りされる。3は、筑前型瓦器碗である。底磨きは浅く、単位が認めにくい。4・5は、青磁である。4は越州窯系青磁、

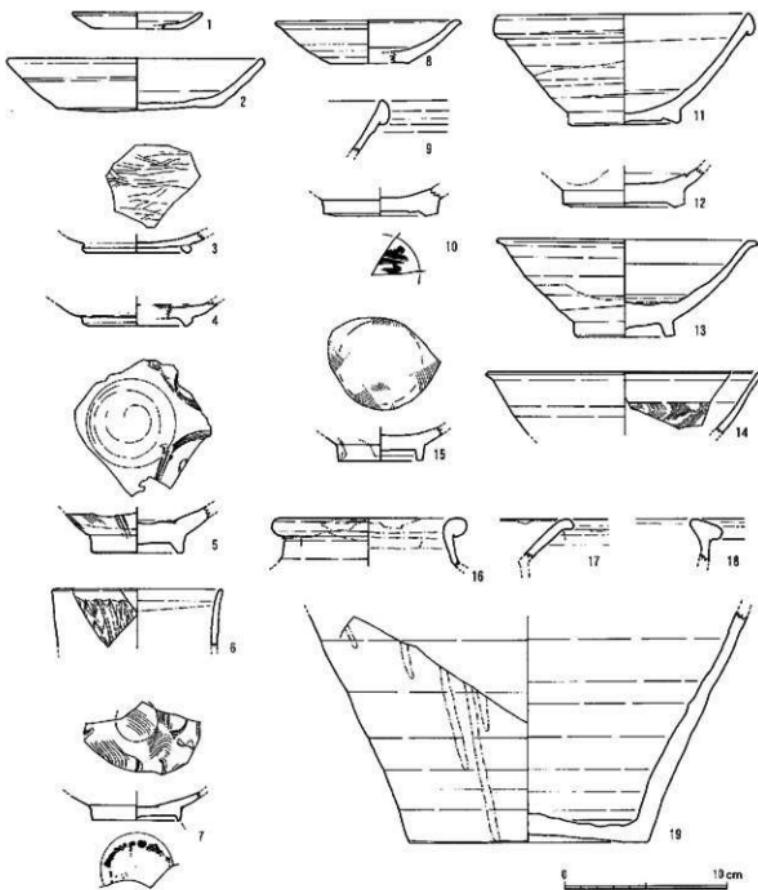


Fig. 163 410号造構出土遺物実測図 1 (1/3)

5は同安窯系青磁の碗である。6・7は、青白磁である。6は香炉で、内面は露胎となる。8～15は白磁である。11は、完形品で出土した。10の底部には墨書きがみられる。花押と思われるが、遺存部位が小さく、不明確である。16～19は、陶器である。16は黄釉陶器の壺、17は黄釉陶器盤、18は褐釉陶器鉢、19は黒褐釉陶器の壺である。20・21は、石製品である。20は滑石性の石鍋で、外面に焼が付着している。21は、砂岩性の砥石である。実測図向かって右側の屈折した二面が、底面である。22～26は、瓦である。22は、押圧文系の軒丸瓦で、花卉文の一部が残る。Ph.131-27は鬼瓦の一部であろう。12世紀後半の溝と考えられる。

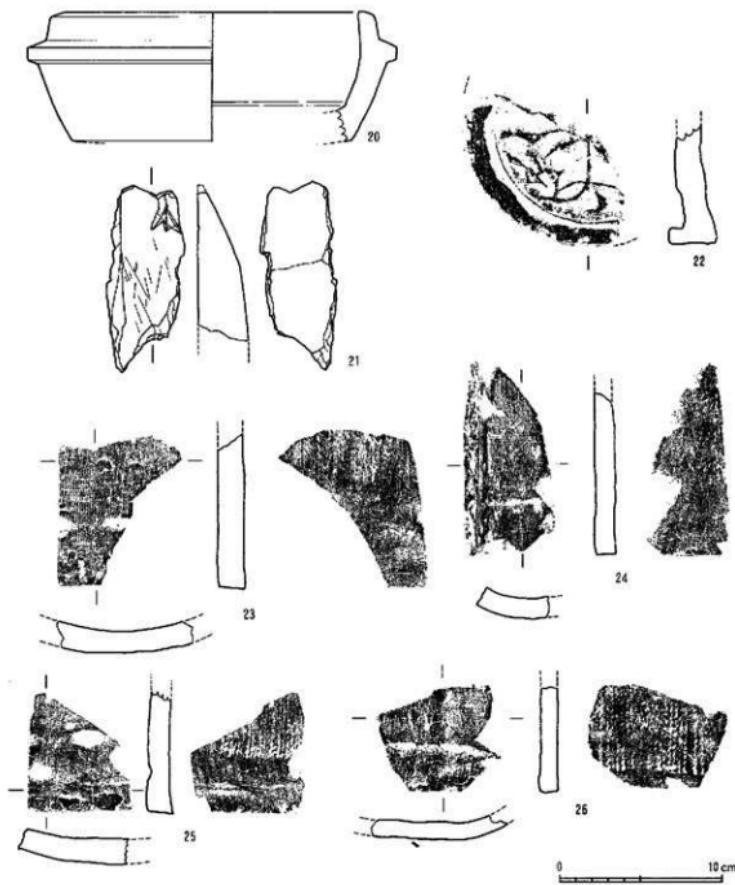


Fig. 164 410号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

(5) 庭園状造構・建物関連造構

101号造構

第2面より検出した建物関連造構である。幅3mで調査区を横断して、炭層が広がっている。炭層の直下は、焼けた硬化面で、緩い蒲鉾型の断面を呈する(Ph.133左上)。この状況から、回廊基壇状の造構が、調査区を横断する方向に延びているものと推定した。

また、硬化面の直上には、部分的に玉砂利状の小石が集中している状況がみられた。特に密に集中する部分は、おむね方形のプランを呈する(101-4、-5、-6)。全容が知れる101-5では、60cm四方に玉砂利が密集し、その外側を幅5cm程の砂利列が断続的に巡っている。これら砂利敷きの下部には、特になんら施設は作られていなかった。砂利敷きの性格は、不明といわざるを得ない。

回廊状部分の東を画すると思われる小溝(101-1)は、方形砂利敷きと平行し、101-1から枝分かれした小溝は、101-5の南辺に取り付く。一連の構造と言えよう。西を画すると思われる101-7溝は方形砂利敷きや101-1溝の方向に対しても、斜行している。一方、炭層の範囲は正しく平行しており、101-7溝については、回廊状造構に伴わない可能性がある。

出土遺物をFig.165・166に示す。1～16は、土師器である。1～8は皿で、小型の1(口径7.2cm、器高1.5cm)、器高が高い2(口径8.6cm、器高2.2cm)と、その他のタイプ(口径8.3～8.9cm、器高1.3～1.5cm)に分かれる。1の口縁には油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことを示している。9～15は、壊である。9～14は口径12.4～13.4cm、器高2.45～3.05cm、15は大型の壊で、口径16.0cm、器高3.95cmを測る。16は、底部が小さく、体部が大きく開くタイプで、搬入系の土師器である。口径9.7cm、底径6.0cm、器高2.5cmをはかる。17は、白磁の口禿皿である。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿に使われたことが分かる。18は、鎮運弁文の青磁碗である。19は、無釉焼き締め陶器の鉢である。20は、土師質土器の鉢である。体部外面には、うすく縱方向の刷毛目



Ph.132 101号造構周辺(北東より)

が残るが、ほとんど撫で消されている。21・22は、瓦質土器の火鉢である。外面は、範磨きで平滑に仕上げている。内面は、21は横刷毛目、22は横撫で調整する。口縁部直下には、3個を単位とした菊花文のスタンプが打たれている。23・24は、常滑焼きの壺である。同一個体の可能性が高い。同一個体と見れば、推定器高53.5cmとなる。口縁を屈曲させているが、面状の口縁帯を形成するにはいたっていない。中野編年では、6a期に属する。25は、鉛製の櫂である。水滴型を呈し、頂部側に穿孔している。底辺や側縁は削られているが、重量を調整したものであろう。27.98gを測る。

3・8・11～13は101-1溝から、2・4～7・14・15は101-7溝からの出土で、時期差は見られない。14世紀前半の回廊状遺構と考えられる。



Ph.133 101号遺構

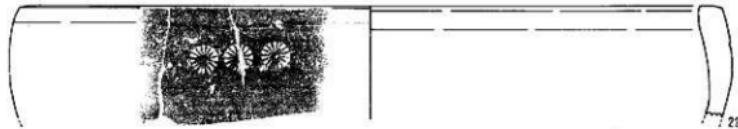
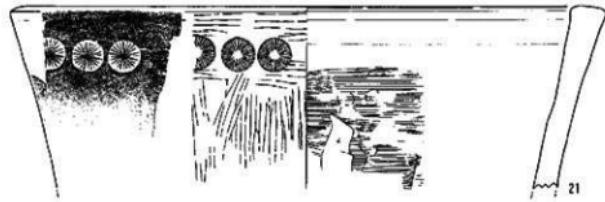
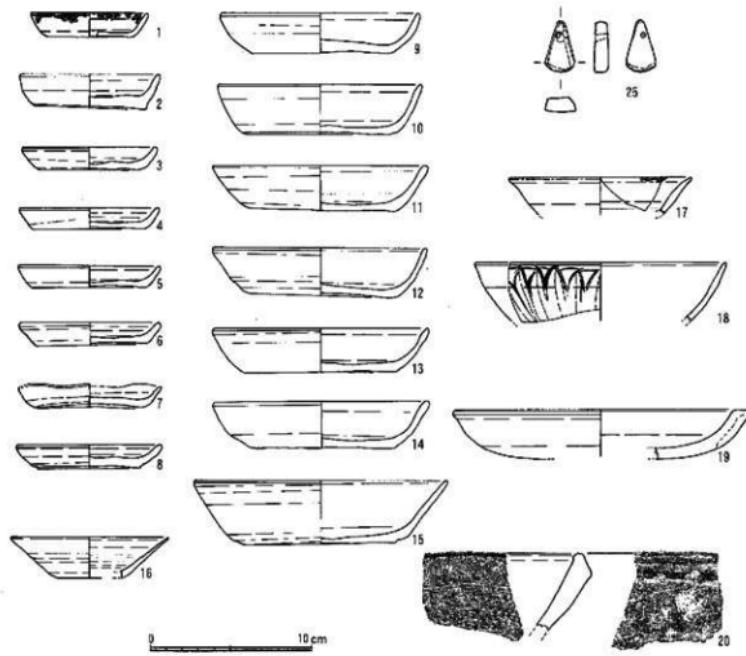
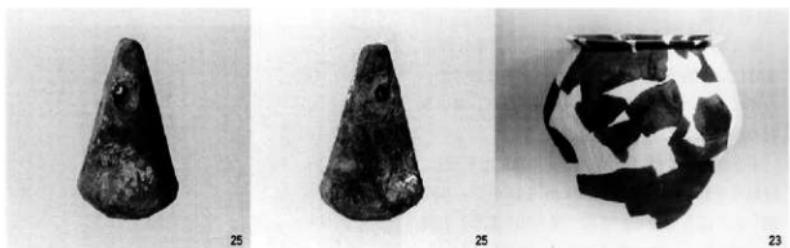


Fig. 165 101号造構出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph. 134 101号遺構出土遺物

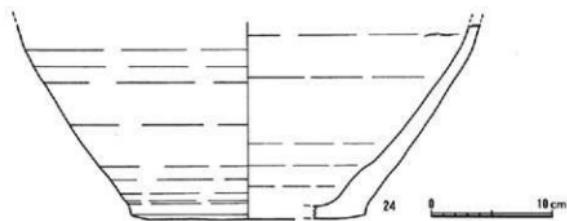
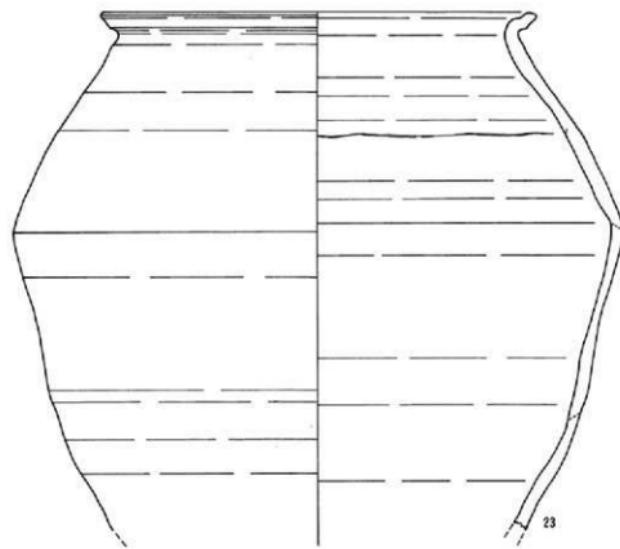


Fig. 166 101号遺構出土遺物実測図 2 (1/4)

151号遺構

第3面で検出した池状遺構である。第3面調査時には、調査区内に設置したベルトコンベアーの影になって半ば調査できなかったが、第3B面の調査に当たって、全体を確認した。

平面形としては、長軸400cmの瓢箪型を呈し、短軸はそれぞれ180cm・230cmをはかる。多段掘り状に深さを増し、底部で深さ30~50cmを測る。南半分には礫が集中するが、意図的に配されたものではなく、投棄されたと考えられる。

出土遺物を Fig. 168・169に示す。1・2は、土師器の皿・壺である。底部は回転糸切りである。3は、白磁の口禿皿である。4は、青磁の皿である。底部を基筒底に作る。高台の内側は、丸く露胎となる。5・6・10~12は、瓦質土器である。5は風炉の口縁部、6は火鉢、10・12はすり鉢、11はこね鉢である。7~9は、土師器の土鍋である。外面には、煤が付着している。13は、備前焼のすり鉢である。内底部は、使い込んで摩滅している。間壁編年3期に位置づけられる。この他、瓦・礫石などが出土している。

14世紀前半から中頃にかかる時期に営まれた池であろう。



Ph. 135 151号遺構（北西より）

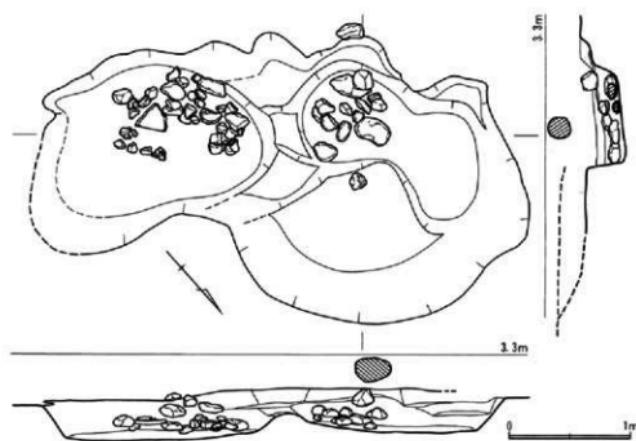


Fig. 167 151号遺構実測図（1/40）

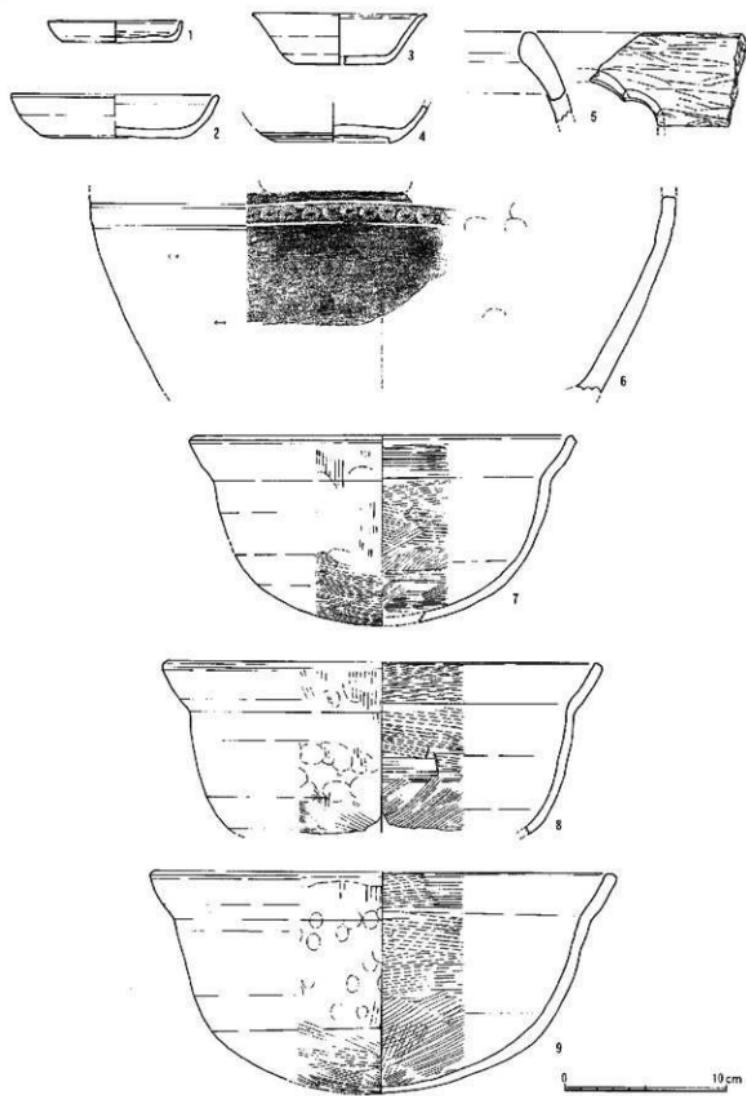


Fig. 168 151号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

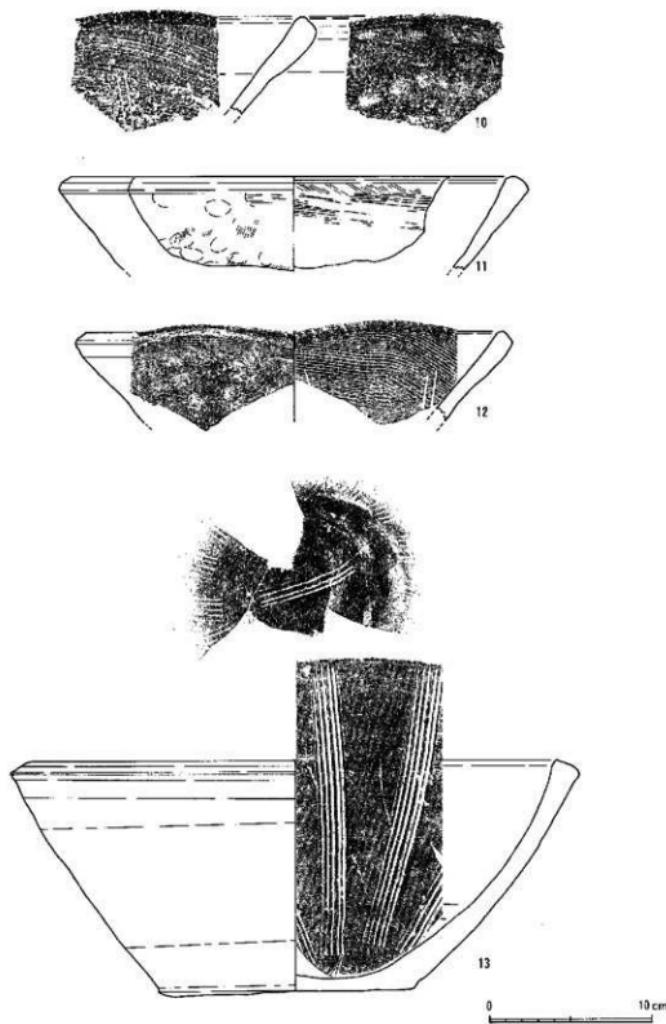


Fig. 169 151号造構出土遺物実測図 2 (1/3)

408号遺構（375号遺構）

第5面で検出した池状遺構である。調査区を横切る形で見つかっており、長軸7.5m、短軸4.5mの楕円形を呈すると推定される。南岸から東岸にかけては、ほぼ直に三段程度の石積みによる護岸を作るが、北岸は素掘りのままとなる。なお、石積みの東三分の一の上半は石が小さく、積み直されたものと思われる。この部分の裏込め土の下部には、もう一回り外側に大きめの石が整然と巡っており、当初の護岸を狭めたものと考えられる。さらに護岸石積みからやや離れて、ひとかたまりの石組が見られ、護岸の作り直しに際しては、汀線に入り組みをもたせた可能性が考えられる。また、池の埋積が進み石積みが半ば隠れた頃、池底に小石を敷いた状況が検出された。北岸では、若干埋まった段階で、景石と思われる大型の石を含む大小の礫が流れ込んでいた。意図的な護岸とは見えないので、北岸の際に設けられていた景石群が、落ち込んだものと推定される。また、流れ込んだ礫の下から、土師器の一括廃棄が見つかった。池底に貼り着くように出土しており、初期の池に伴う廃棄行為と思われる。

なお、第4面での遺構検出時に、この北岸付近と南岸に該当する二ヶ所の土質の変化を確認しており、特に景石群周辺から上層を375号遺構として、遺物を取り上げている。

375号遺構出土遺物を、Fig. 171・Fig. 172に示す。1～31は土師器である。1～11は皿で、口径8.5～9.0cm、器高0.9～1.3cmを測る。12



Ph. 136 375号・408号遺構

~31は壺である。口径12.0~14.1cm、器高2.0~3.0cmを測る。壺・壺の底部は、回転糸切りされる。32は、瓦質土器の火鉢である。内面は雜な撫でだが、外面は平滑に磨く。33・34は、青磁である。鎬蓮弁文が見られる。35は、青白磁の壺である。36~40は、白磁である。36は口禿壺、37~39は口禿碗、40は水注の口縁部である。41~49は陶器である。41・42は天目茶碗である。43は褐釉の灯火器であろうか。破損した下部には、鉗が付くと思われる。44は褐釉の瓶で、外底部に花押が墨書きされている。45は褐釉の壺、46は黄釉鉄絵鑽、47は褐釉の壺である。48・49は灰綠釉の大壺で同一個体か。

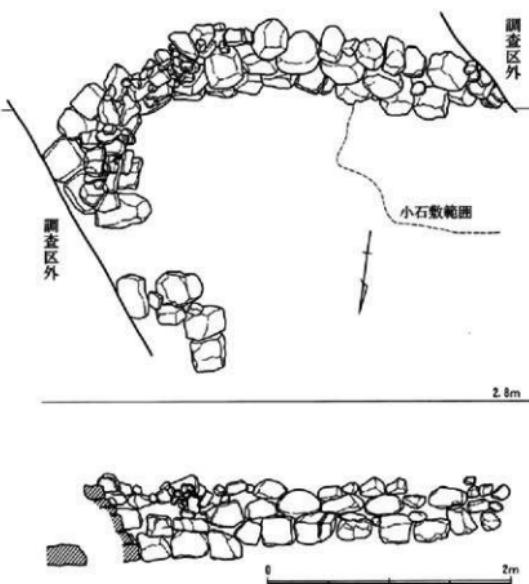
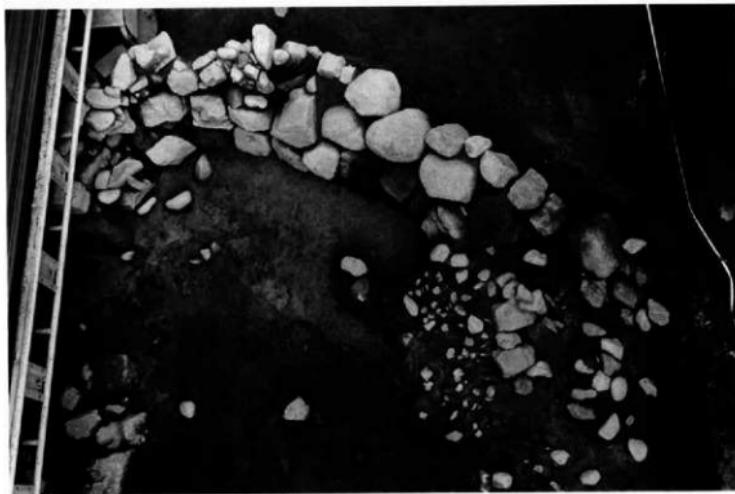


Fig. 170 408号遺構実測図 (1/40)



Ph. 137 408号遺構石積み (西より)

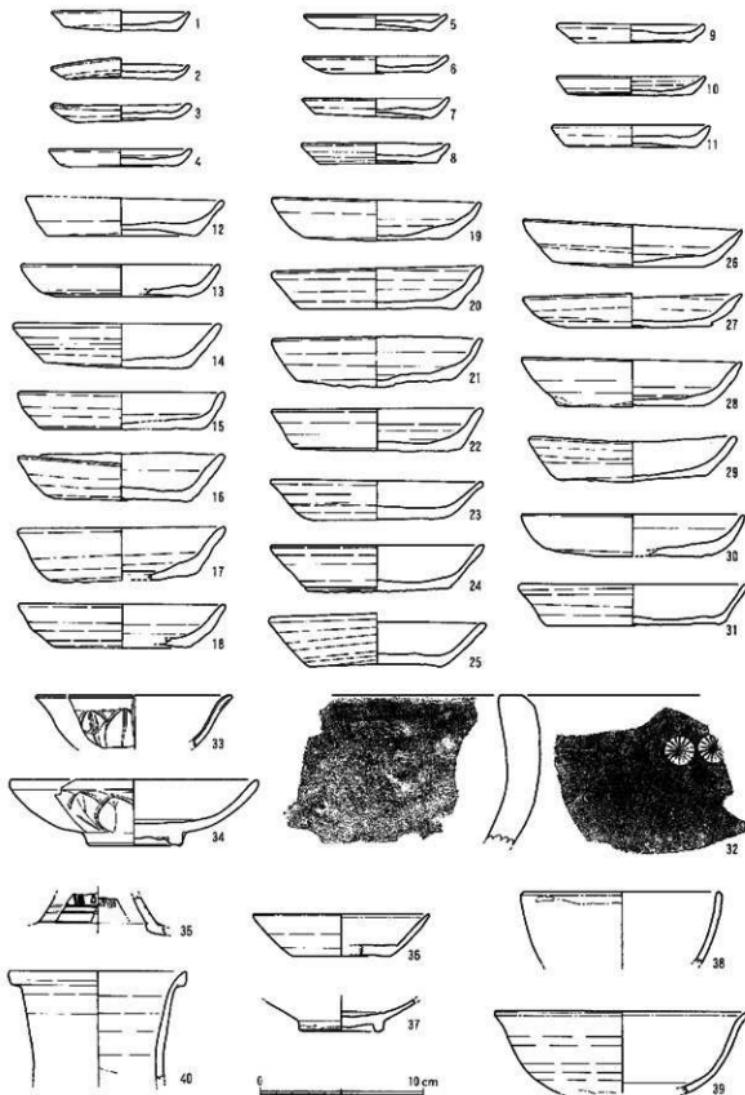


Fig. 171 375号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

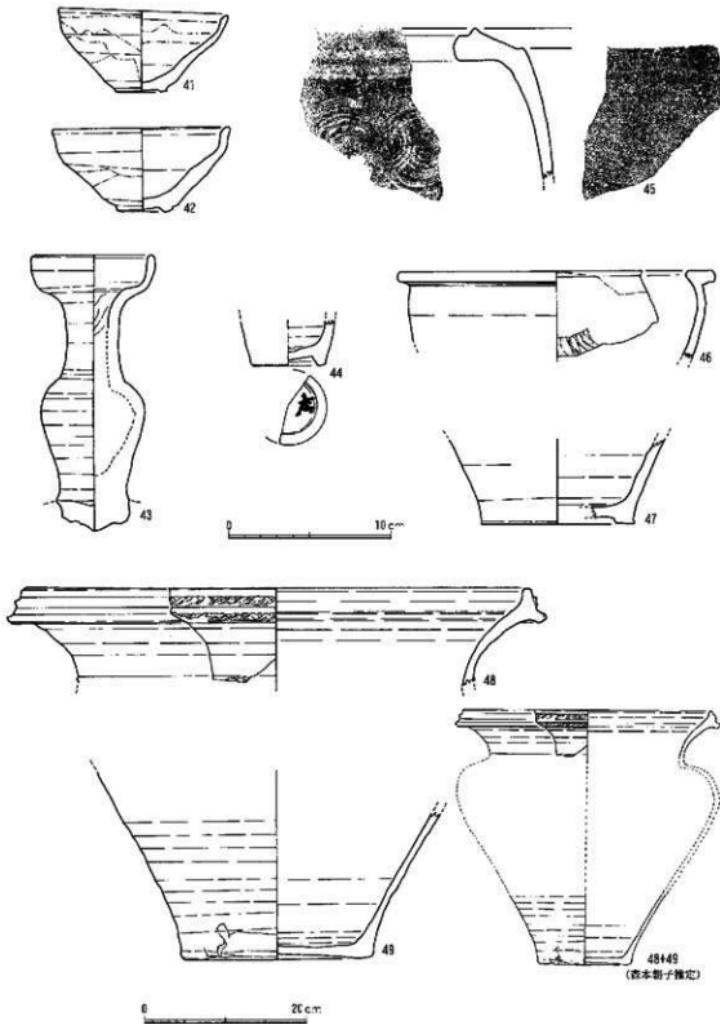


Fig. 172 375号造構出土遺物実測図 2 (41~47…1/3, 48・49…1/6)

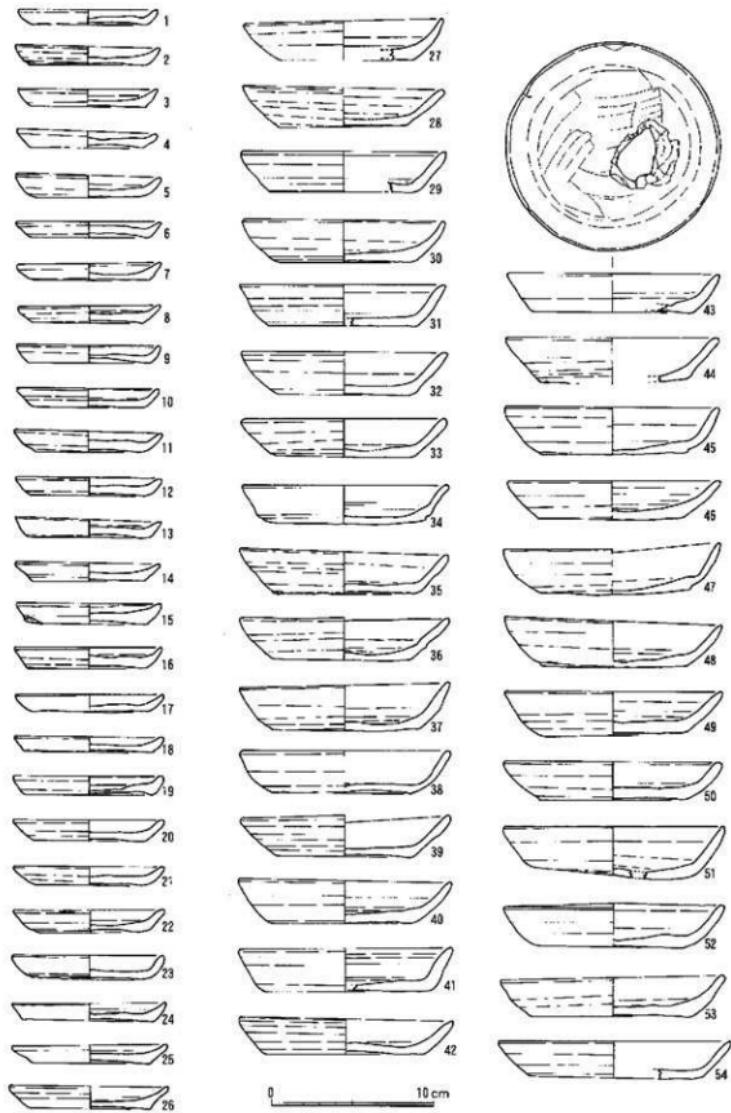
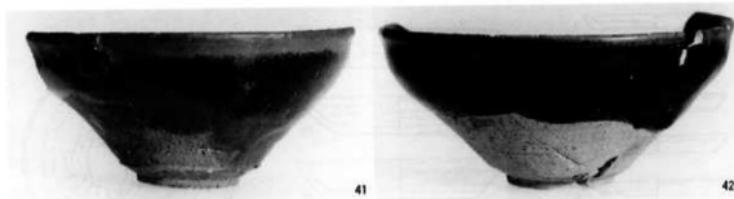


Fig. 173 408号遺構出土遺物実測図1 (1/3)



Ph. 138 375号遺構出土遺物

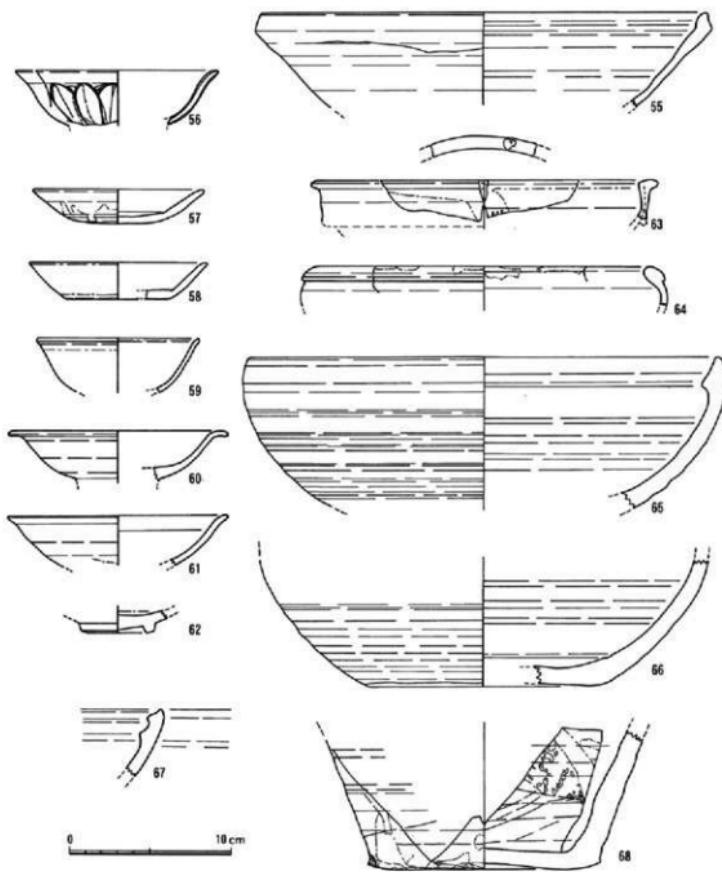


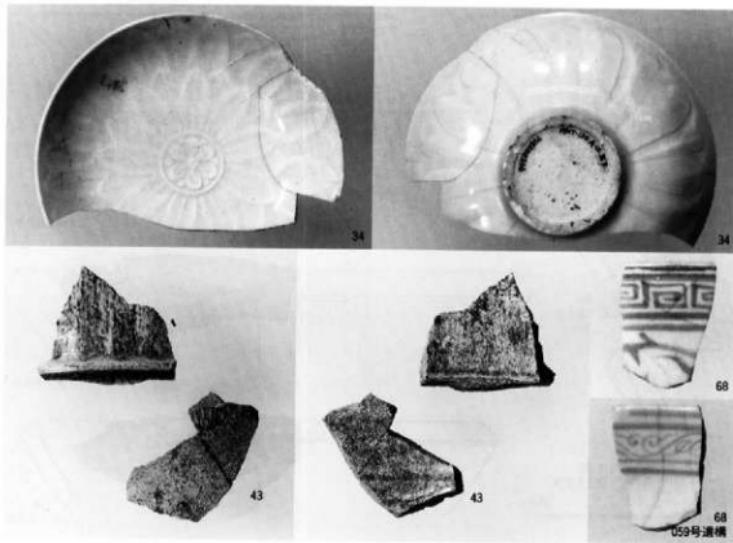
Fig. 174 408号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

409号遺構出土遺物を Fig. 173・174に示す。1～54は土師器である。底部は回転糸切りする。1～26は皿で、口径8.5～9.7cm、器高0.9～1.4cmを測る。27～54は壺である。口径12.3～14.4cm、器高2.4～3.0cmである。43の底部には、穿孔がみられる。55は東播系須恵器の鉢である。口縁直下には、粘土の継ぎ目が残る。56は、鎌蓮弁文の青磁小碗である。57～62は白磁である。58・59は、口縁を口禿に作る。63～68は陶器である。63は褐釉のすり鉢で、口縁上面に目跡が付く。64は褐釉の鉢、65～67は無釉のこね鉢、68は褐釉の壺である。無釉こね鉢の内面は、使用のため摩耗している。

両遺構で時期差はほとんど認められず、13世紀後半から14世紀前半の池状遺構と思われる。

(6) その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺構出土遺物・包含層出土遺物の内、特徴的なものを Fig. 175～179に示す。1～7は、土師器である。1は極めて薄手の白色系土師器で、口クロ成形される。2は、京都系土師器のへそ皿である。3～7は、口径に対して極めて小さい底部を持ち、体部は大きく開く。3～5が白色系で薄手、強いロクロ目を持つに対し、6・7は褐色系で厚手、滑らかな器壁を持つ。前者は搬入土師器、後者は在地土師器であろう。8～20は、瀬戸焼きである。8は香炉、9～16は鉢皿、17～20は折縁深皿である。21～29は、備前焼である。21～28は、すり鉢である。間整編年Ⅱ期からⅣA期の資料が出土している。29は、ⅢB期の壺である。30～33は、青磁である。34・35は、青白磁である。34は皿、35は鳥餌皿である。36～40は、白磁である。39の見込みは露胎で、輪状に耐火砂が回る。40は四耳壺の底部であるが、割取って、外底のくぼみを現に転用している。スライスするように割り取った破片も出土しており、接合できている。41は、元青花の玉壺春である。42～48は、陶器である。42～45は殿青釉の花盆である。46は、黒褐釉の鉢（河南天目）である。縦に鉄錆が浮い



Ph. 139 その他の出土遺物 1

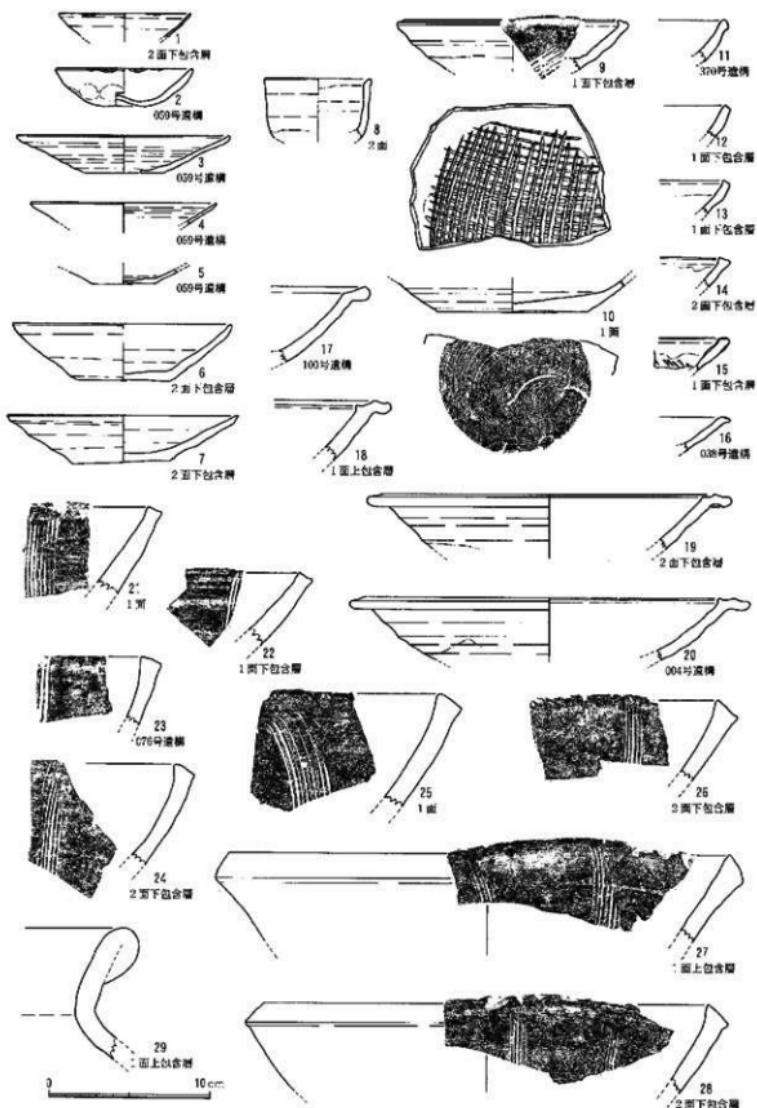


Fig. 175 その他の出土遺物実測図 1 (1/3)

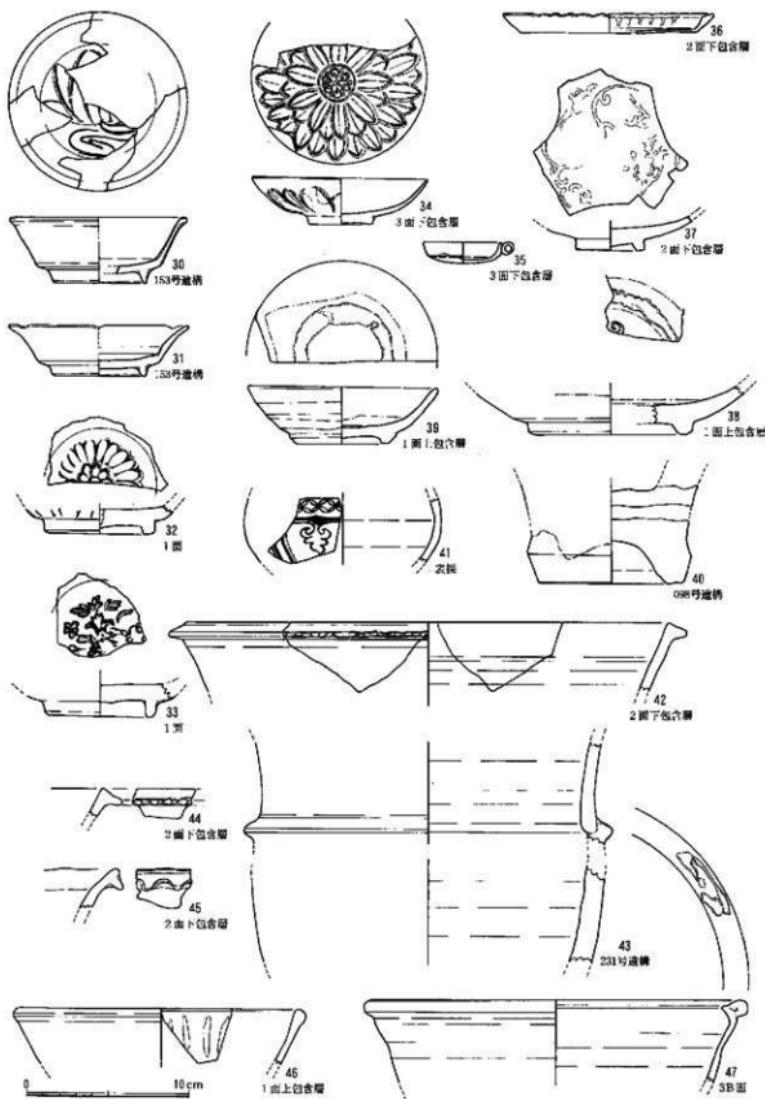


Fig. 176 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)

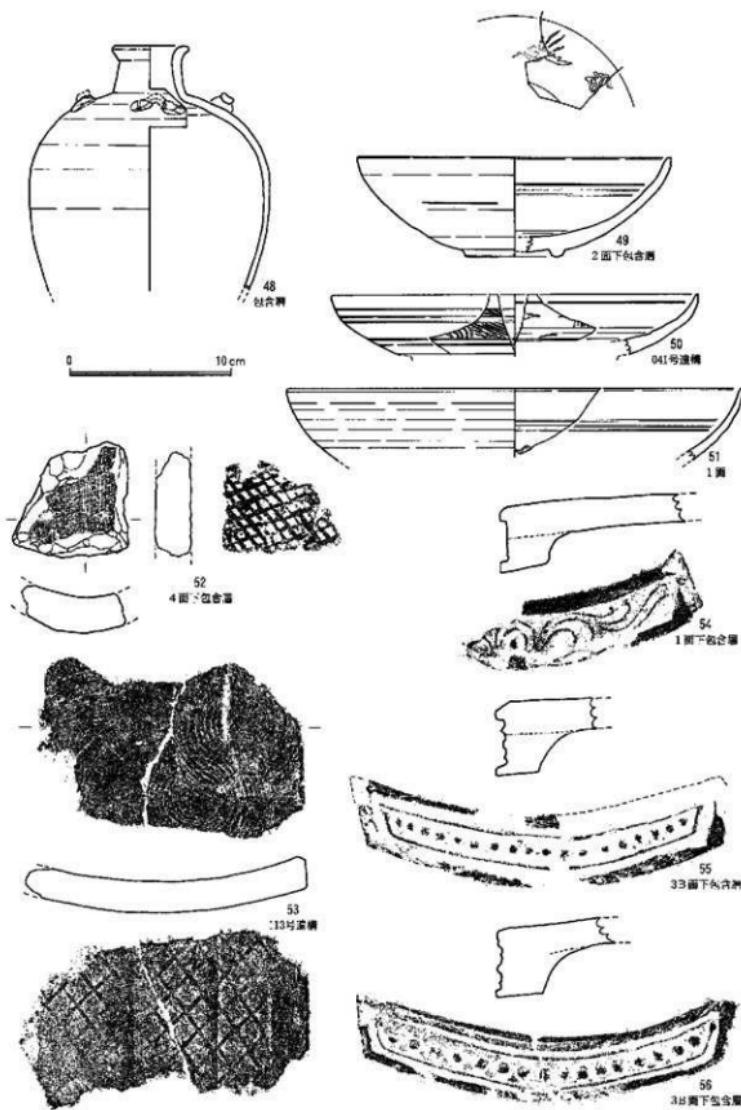
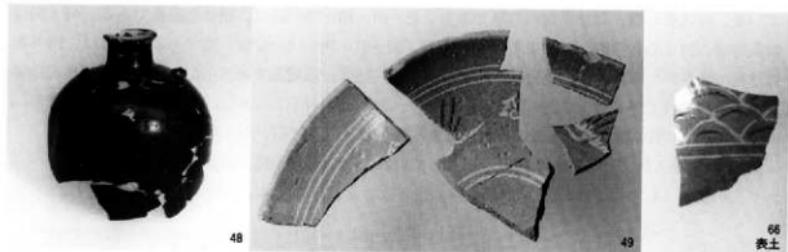


Fig.177 その他の出土遺物実測図 3 (1/3)



Ph. 140 その他の出土遺物 2

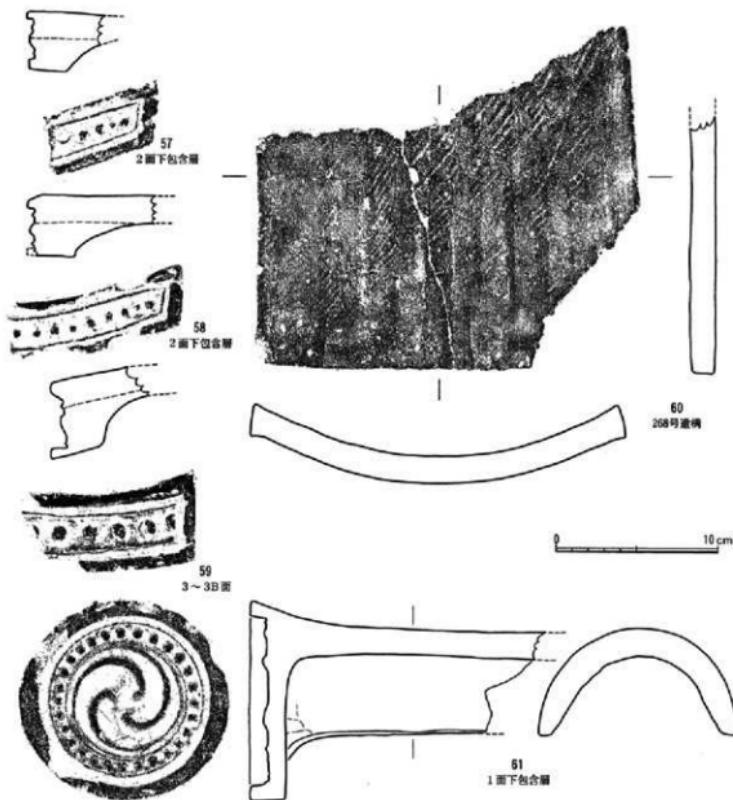
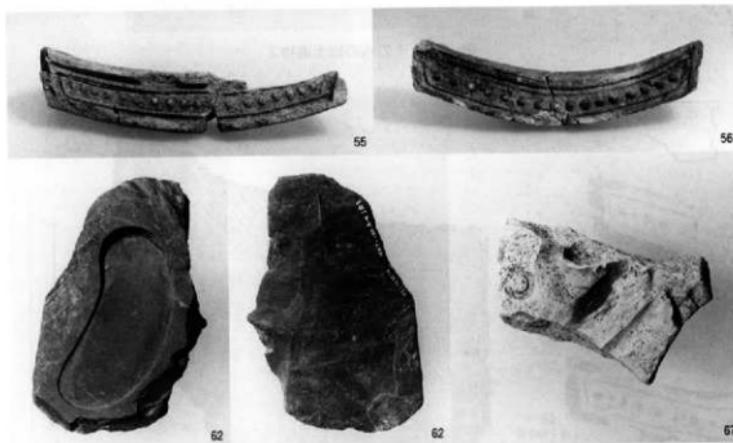


Fig. 178 その他の出土遺物実測図 4 (1/3)

ている。47は黄釉盤、48は黒褐釉の瓶である。49～51・Ph.140-66は、朝鮮陶磁器である。49・50は象眼青磁、51は粉青沙器、66は象眼の壺である。52～61・Ph.141-67は、瓦である。52には、内外面に綠釉が施されている。67は鬼瓦の一部である。62～65は、石製品である。62は硯である。裏面はほとんどが剥離面であるが、部分的に砥ぎを加えている。63～65は、滑石石鍋の転用品と思われる。Ph.139-68は、明の釉裏紅である。発色はあまり良くないが、紫赤がかった文様がみられる。

第120次調査A区では、85点の銭貨が出土している。内、解読不能が30点、近代の「一錢」が一点あり、中国錢としては唐錢4点、北宋錢48点、南宋錢2点である。以下、拓本と一覧表を示す。



Ph. 141 その他の出土遺物 3

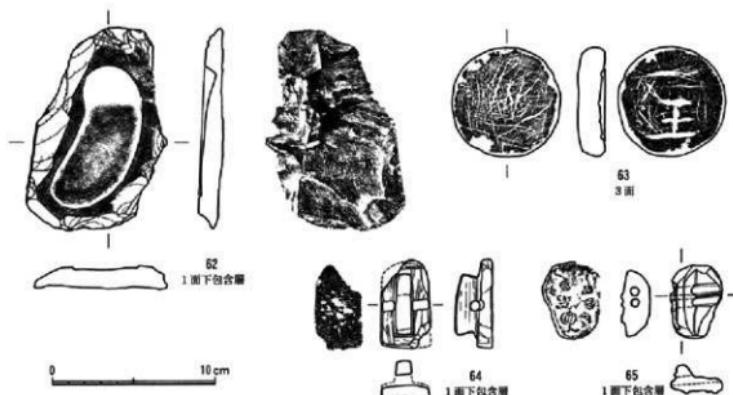


Fig. 179 その他の出土遺物実測図 5 (1/3)

表5 第120次調査A区出土銅錢一覧

錢貨名	判讀年	下期名	年号	枚数	錢貨名	判讀年	下期名	年号	枚数
熙元通寶	621	唐	武德4年	3	紹熙元宝	1094	北宋	紹熙元年	2
乾元重寶	758	唐	乾元重宝	1	元符通寶	1099	北宋	元符元年	1
太平通寶	976	北宋	太平興國元年	2	聖宋通寶	1101	北宋	建中靖國元年	2
咸平元宝	996	北宋	咸平元宝	3	崇寧通寶	1102	北宋	崇寧元年	1
祥符元宝	1009	北宋	人中祥符元宝	3	大觀通寶	1107	北宋	大觀元年	1
天禧通寶	1017	北宋	天禧元宝	1	政和通寶	1111	北宋	政和元年	5
天聖通寶	1023	北宋	天聖元宝	1	宣和通寶	1119	北宋	宣和元年	1
景祐元宝	1034	北宋	景祐元宝	2	熙寧通寶	1208	北宋	熙寧元年	1
皇宋通寶	1038	北宋	皇宋通寶	4	嘉定通寶				
聖和通寶	1054	北宋	聖和元年	1	淳熙通寶				1
熙寧元宝	1068	北宋	熙寧元宝	7	高宗通寶				30
元祐通寶	1078	北宋	元祐元年	21	所造不能				
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	4					85
			總	數					

A-4区-1面-50
紹熙元寶A-2区-3面-117
崇寧通寶A-8区-3面下
開元通寶A-4区-1面上包含著
開元通寶A-2区-2面
乾元重寶A-3区-1面
熙寧元寶A-4区1面-057
元豐通寶A-2区-1面-008
元祐通寶A-1区-1面
元符通寶A-1区-4面-231
政和通寶A-3区1面-056半割
元豐通寶

Fig.180 120次A区調査出土銅錢拓本1 (1/1)

表6 出土遺構別銅錢一覧

遺構番号	錢貨名	鉢跡番	王朝名	径(cm)	備考
1-B004	解説不能				鋭激しい
1-B007	元祐通寶	1078	北宋	2.42	鋭激しい
1-B008	崇寧重寶	1101	北宋	2.45	5枚隕着の1
1-B008	紹聖元寶	1094	北宋	2.43	5枚隕着の2
1-B008	元祐通寶	1086	北宋	2.38	5枚隕着の3
1-B008	元祐通寶	1096	北宋	2.39	5枚隕着の4
1-B008	元祐通寶	1078	北宋	2.39	5枚隕着の5
1-B008	崇寧通寶	1038	北宋	2.48	5枚隕着の1
1-B008	政和通寶	1111	北宋	2.35	5枚隕着の2
1-B008	天禧通寶	1017	北宋	2.49	5枚隕着の3
1-B008	政和通寶	1111	北宋	2.48	5枚隕着の4
1-B008	咸平重寶	998	北宋	2.46	5枚隕着の5
1-B008	崇寧通寶	1038	北宋	2.45	5枚隕着の6
1-B025	元祐通寶	1086	北宋	2.45	
1-B034	解説不能				鋭激しい
1-B042	元祐通寶	1078	北宋	2.22	小さめ
1-B042	解説不能				1/4残
1-B042	解説不能				細片
1-B042	解説不能				細片
1-B046	至和通寶	1054	北宋		鋭激しい
1-B056	元祐通寶	1078	北宋	2.41	鋭激しい
1-B057	元祐通寶	1078	北宋	2.43	鋭激しい、背面に大きなズレ
1-B057	解説不能				鋭激しい、1/2残
1-B057	嘉定通寶	1208	南宋	2.45	背面「一」茶色味を帯びる
1-B060	紹熙元寶	1190	南宋	2.97	折二、背面「一」茶色味を帯びる
2-B074	元祐通寶	1086	北宋	2.39	鋭激しい
2-B079	大觀通寶	1107	北宋		反りあり
2-B088	紹聖元寶	1094	北宋	2.47	
3-B017	解説不能				鋭激しい、2/3残
3-B017	崇寧重寶	1102	北宋	3.32	当十錢
3-B033	元祐通寶	1078	北宋	2.48	鋭激しい
3-B051	崇祐元寶	1034	北宋	2.58	鋭激しい
4-B021	政和通寶	1111	北宋		加工の跡あり
4-B049	太平通寶	976	北宋		

A-4区1面下掲り下げ
太平通寶A-8区-3面下
祥符元寶A-3区-1面下
景祐元寶A-1区-2面下
熙寧元寶A-8区-1面-2
元豐通寶A-2区-1面-008
元豐通寶A-4区-3B下
元豐通寶A-1区-1面-25
元祐通寶A-2区-1面-008
紹聖元寶A-2区-2面-088
紹聖元寶A-2区-1面上
聖宋元寶A-2区-2面-09
大觀通寶A-2面下掲り下げ
政和通寶A-2区-1面-008
政和通寶A-4～5区-カバ
宣和通寶

Fig.181 120次A区調査出土銅錢拓本2 (1/1)

第五章 120次調査B区の概要

1. 発掘調査の方法と経過

B区においては、発掘調査に先行する鋼矢板打ち込み、表土掘削、地中梁工事が終了したのは1999年12月16日で、翌17日より発掘調査に着手した。調査期間としては、A区の調査と重複している。

発掘調査は、まず表土除去後のガラを除去し、中央に長軸に沿ってトレンチを設定して、土層の堆積を確認、遺構検出面を設定することから始まった。以後、トレンチ掘削、遺構検出面設定、掘り下げ、遺構検出、遺構精査、記録作成を繰り返して、文化層の発掘調査を行った。下層については、次節で述べるようにB区は砂丘上に立地していないため、基盤層の堆積環境を確かめるため、A～Eのグリッドを設け、砂層の調査を行った。

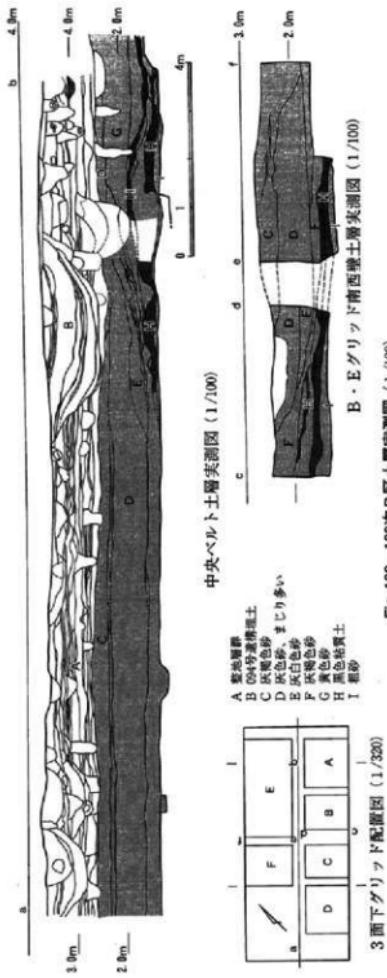
2000年3月13日現場作業終了、同21日撤収をもって、3次4地点にわたる御供所疎開跡地道路建設関係の発掘調査を終了した。

2. 基本層序

発掘調査で確認し得た最下層は、河川性の粗砂である。粗砂の上を、厚く砂層が覆うが人為的な埋



Ph.142 整地層堆積（1面下）中央トレンチ（南より）



立の可能性が高い。標高2.6m付近から上には、細かい単位の整地層が第1面まで堆積している。整地は砂質土、炭・焼土、粘土からなる互層で、粘土面上が各生活面に当たると思われる。

3. 各遺構検出面の概要

(1) 第1面

表土除去面に設定したトレンチで、すぐ下から大型の礫石を検出した。礫石は灰色粘土面に据えてあったため、この礫石上面の高さを基準として掘り下げを行い、灰色粘土面で第1面を設定した。標高3.4~3.5mを測る。

14世紀後半の生活面であろう。

(2) 第2面

標高2.9~3.1mで設定した遺構検出面である。黄灰色粘土面を指標としたが、第1面直下にも、硬化した焦土面があり、中間にも生活面が存在したことは明かである。

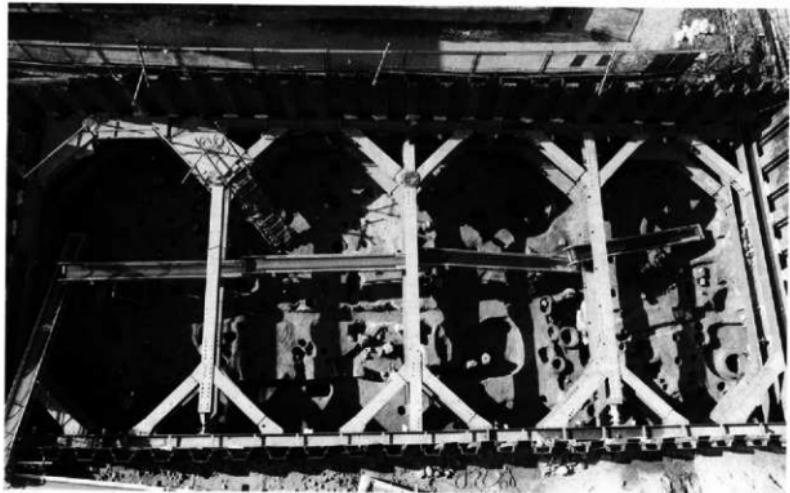
14世紀中頃の生活面と思われる。

(3) 第3面

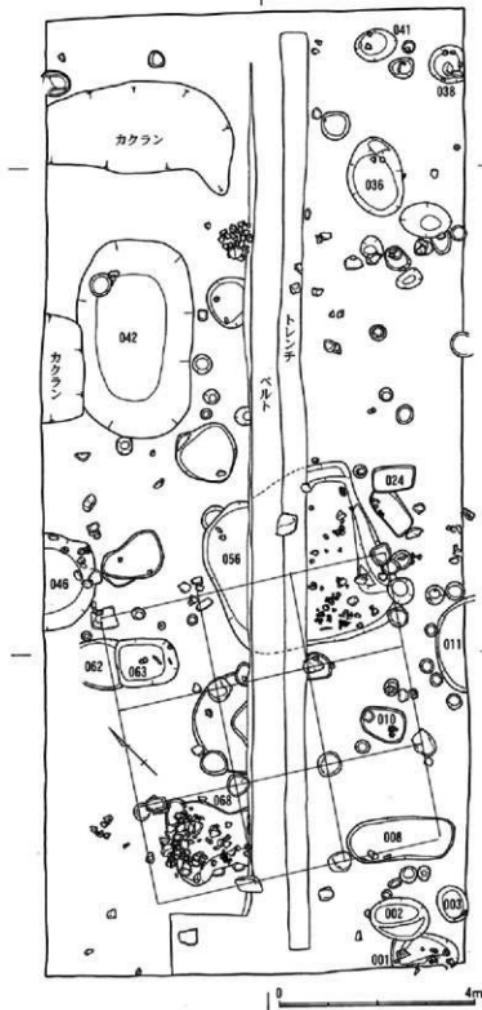
標高2.4~2.7mで設定した遺構検出面である。整地層を除去した、砂質土の上面に当たる。調査区の周囲は、二段目の地中梁工事のため、遺構検出面よりも20~50cmほど掘り下げている。特に南東壁際においては、この掘り下げのためかなりの遺構が失われたものと推測される。

遺構密度は、3面の内最も濃く、溝に区画されて建物が立っていた様子がうかがわれる。

13世紀後半~14世紀前半の遺構検出面であろう。

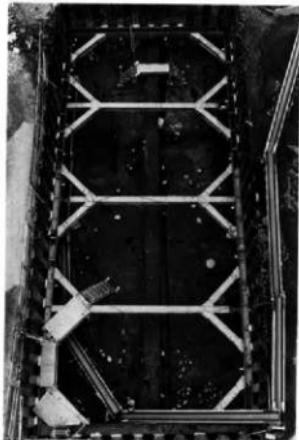
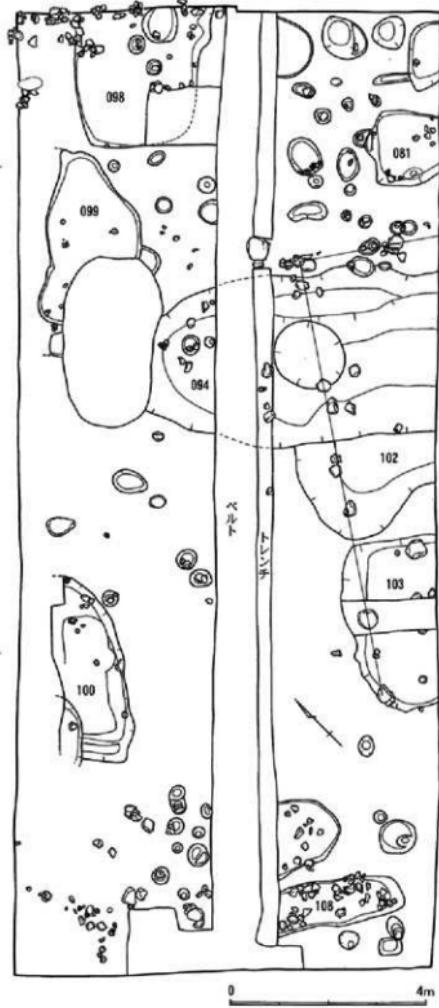


Ph.144 第3面全景（南東より）



Ph.145 第1面全景 (南西より)

Fig.183 第1面造構全体図 (1/100)



Ph. 146 第2面全景（南西より）

Fig. 184 第2面連構全体図 (1/100)

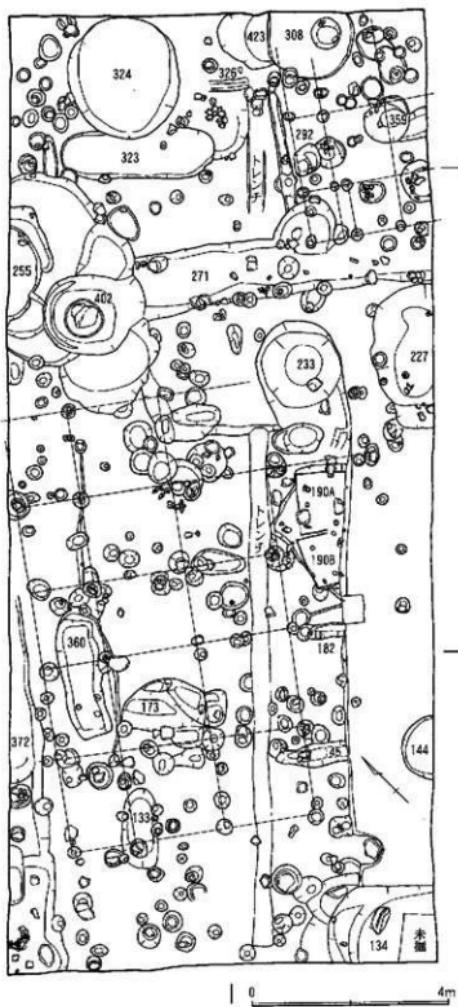


Fig. 185 第3面造構全体図 (1/100)

4. 遺構と遺物

(1) 最下砂層出土人骨

第3面において、下層の状況を確認するためには設定したグリッドのひとつ、Dグリッドの下部から出土した人骨である。調査区南東壁側から、急角度で下降して堆積した灰色砂の下部から出土した。第六章で述べるが、この堆積砂については、人為的な理立の可能性が指摘されており、人骨はそれに先だって流れ込んだものであろう。

分離した頭蓋骨の部分と歯骨が検出されている。13世紀代の埋立に先行するということで、12世紀代の人骨と推測される。人骨については、巻末の付篇を参照いただきたい。

(2) 磚石建物跡

B区からは、建物跡を構成すると考えられる磚石列が数列想定できたが、現場で明らかに認識できたのは第1面の一棟だけであり、それについてFig.187に図示する。

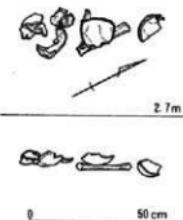
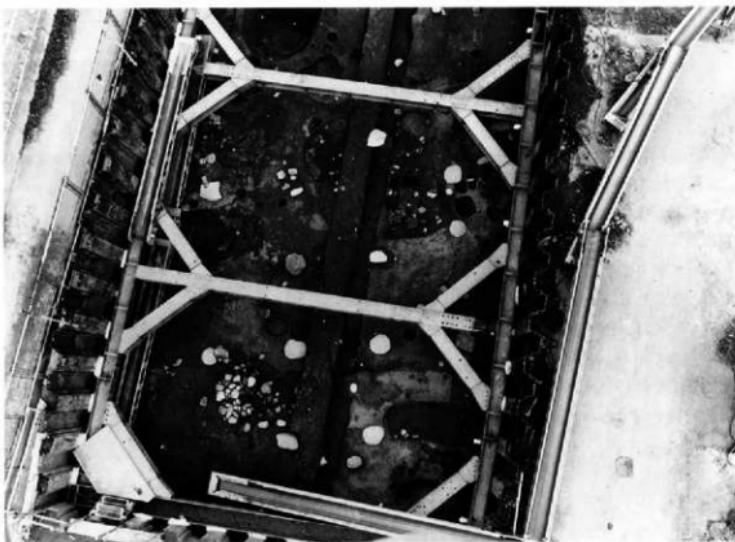


Fig. 186 最下層人骨実測図 (1/20)



Ph. 147 人骨出土状況 (北東より)



Ph. 148 磚石建物 (南より)

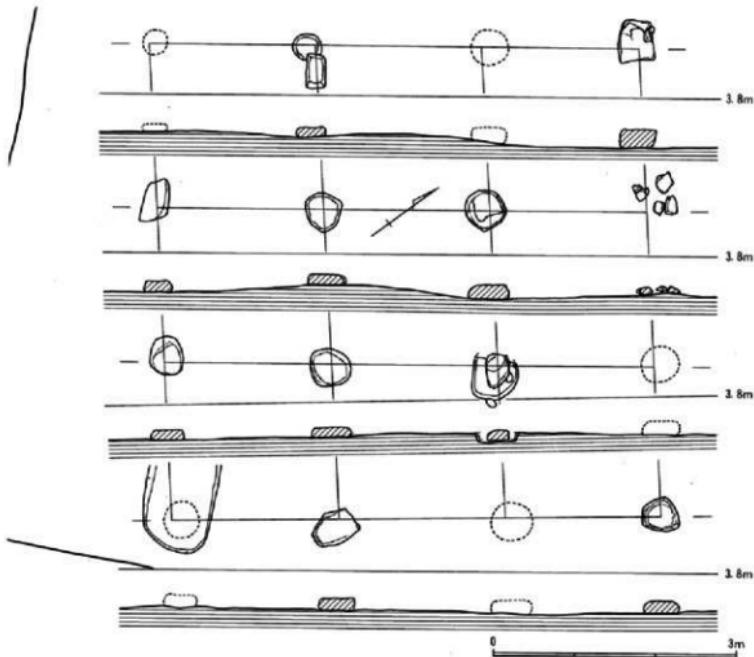


Fig. 187 碓石建物実測図 (1/60)

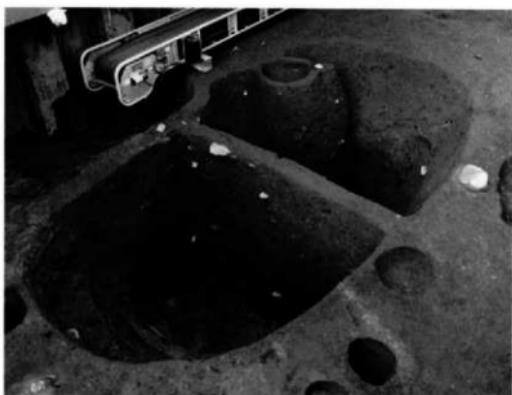
3間×3間の総柱建物であるが、東側に延びる可能性がある。6個の礎石が失われているが、1個に該当する部分には小砾が散らばっており、割って抜かれたものと思われる。粘土の整地面に直もしくは、浅く掘り込んで据えられている。寺院の堂舎など、重厚な建物と思われる。

14世紀後半頃であろう。

(3) 土坑

042号遺構

第1面で検出した大型土坑である。長軸410cm、短軸240cm



Ph. 149 042号遺構

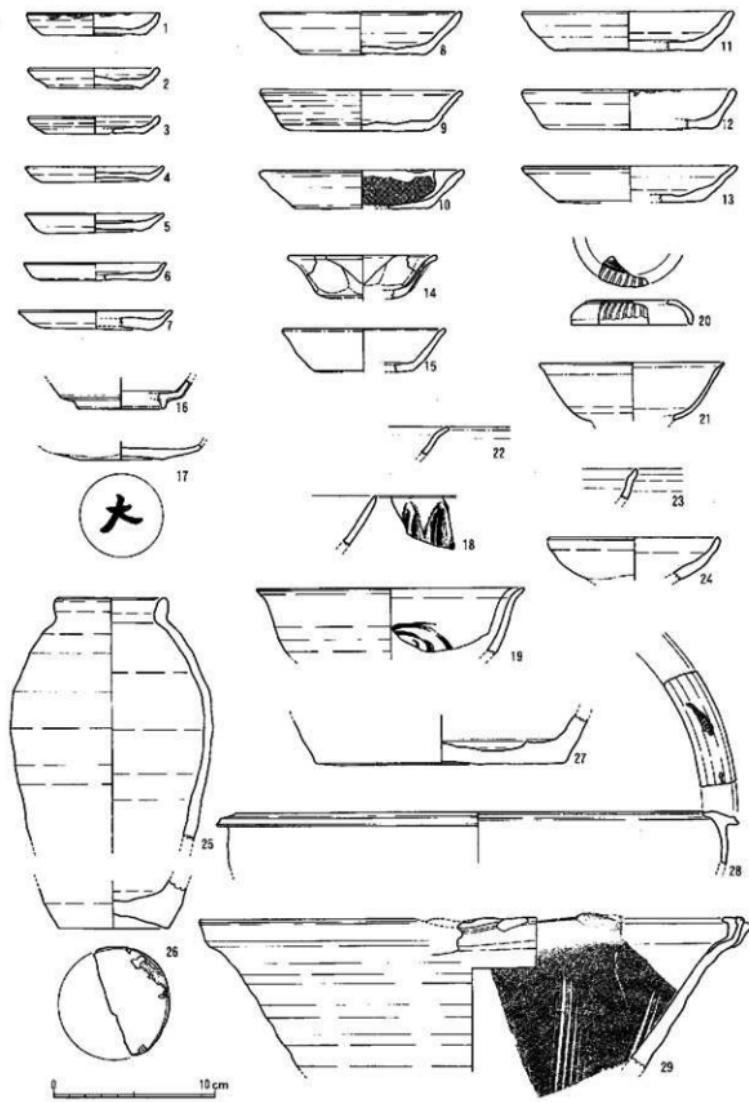


Fig. 188 042号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

の小判型を呈し、深さは150cmをはかる。埋土には顕著な変化はなく、一気に埋められたと思われる。

出土遺物を Fig. 188~190に示す。1~13は、土師器である。1~7は皿、8~13は壺で、底部は回転糸切りする。1と10には、油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことが分かる。14・15は白磁皿である。14は、体部を面取りして、八角にする。16~19は青磁である。17の底部には、「大」の墨書きがみられる。20~22は、青白磁である。21・22の碗は、口禿に作る。23・24は、天目茶碗である。25~28は、陶器である。25・26は褐釉の瓶、27は壺、28は朝鮮王朝陶器の鉢である。28の口縁上面には、貝日が残る。29~36は国産陶器である。29・31・32・35は肥前陶器で、31の見込みには色絵が見られる。

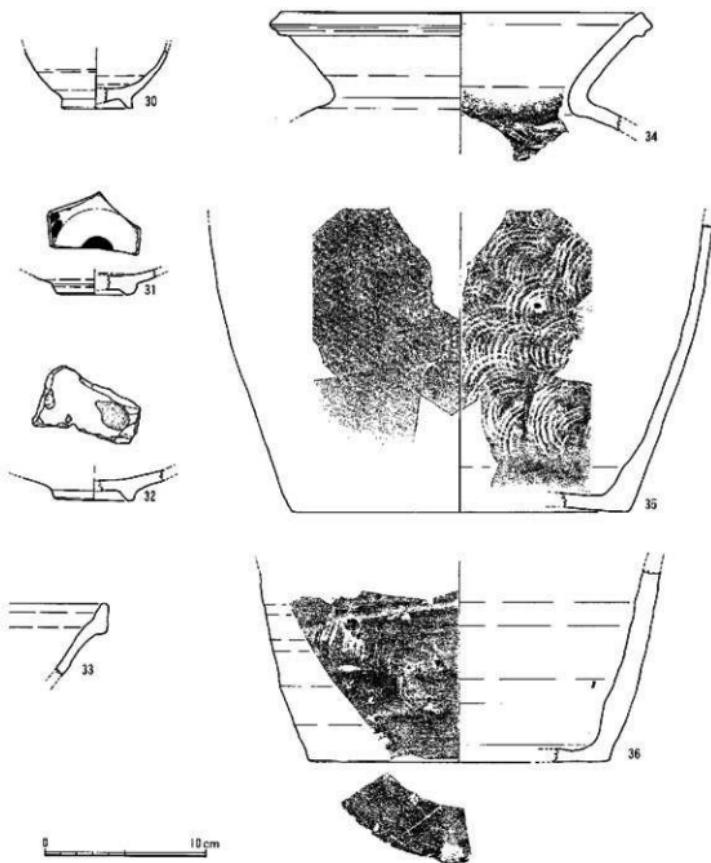


Fig. 189 042号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

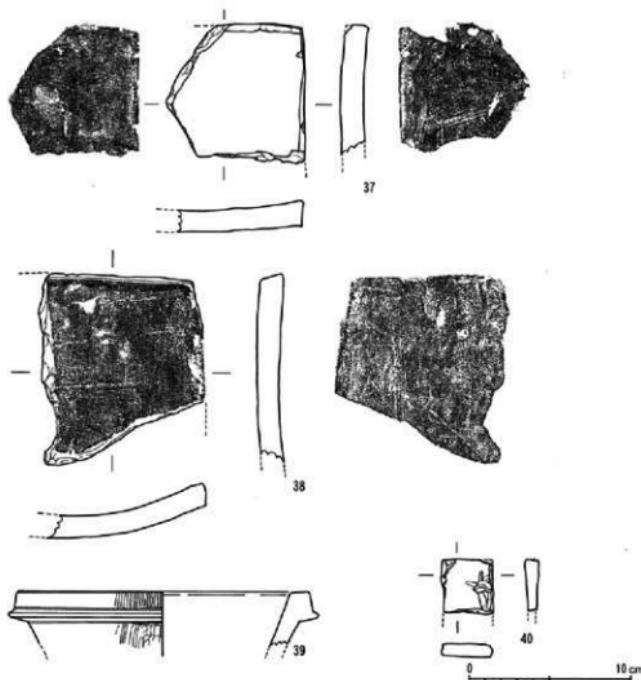


Fig. 190 042号遺構出土遺物実測図 (1/3)

30は、肥前の白磁である。
33は東播系須恵器の鉢、34
は須恵器の壺で、混入遺物
であろう。36は、備前焼の
壺である。37・38は瓦、39
は石鍋・40は砾石である。

17世紀前半の土坑である。

056号遺構

第1面で検出した大型土
坑である。350cm四方の
略方形を呈し、遺構検出面
からの深さは40cmを測る。

出土遺物をFig. 192に図
示する。1~13は、土師器



Ph. 150 056号遺構 (南西より)

である。1は口径7.4cm、2～4は7.9～8.3cm、5は9.4cmを測る。6～11は坪である。6～10は口径12.2～12.7cm、11は17.4cmを測る。12・13は鉢である。13は口径17.0～17.8cm、底径9.0cm、器高5.25cmを測る。内面全体と外面の下半は、手持ち範削りである。外底部にも範削りが及んでいる。内底部は、撫で調整する。口縁部には、小さな削り込み見られる。胎土・焼成とともに、明らかに在地産であるが、特異な形態を呈している。14は白磁碗で、体部外面の露胎部分に、花押と思われる墨書きみられる。15・16は青磁、17・18は無釉陶器のこね鉢である。

14世紀代の土坑であろう。

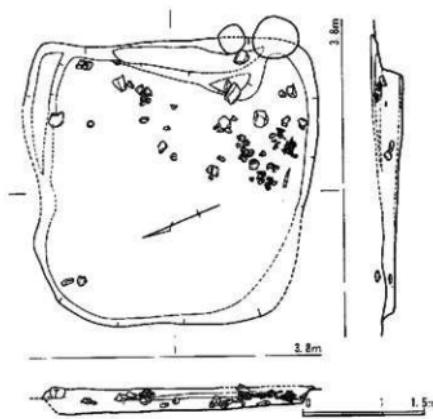


Fig. 191 056号遺構実測図 (1/60)

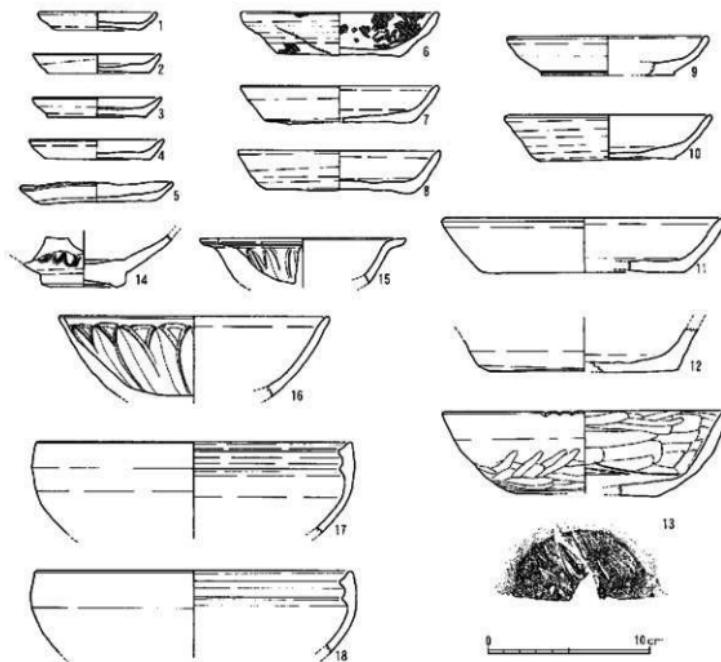


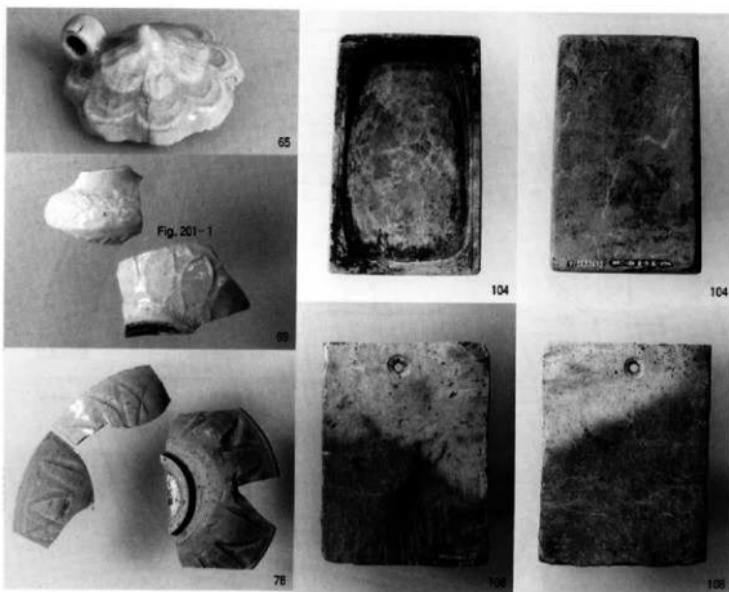
Fig. 192 056号遺構出土造物実測図 (1/3)

094号遺構

第2面で検出した大型土坑である。調査区中程から、南東壁に延びており、全体を知り得ない。調査区内では、幅350cm、深さ65cmの溝状を呈する。底から233号遺構（井戸）を検出しており、233号遺構に後出する遺構である。

出土遺物をFig.193~198に示す。1~37は、土師器である。1~15は、皿である。口径7.2cm・器高1.2cmと一回り小さい1、口径7.8~8.0cm・器高1.0~1.4cmの2~10、口径8.3~8.5cm・器高0.9~1.1cmと偏平な11~14、口径10.4cm・器高1.2cmと大きめの15に分かれる。16~37は、壺である。口径11.4~13.2cm、器高2.2~2.9cmを測る。20の口縁部には、油煙が付着しており、灯明皿として使われていたことを示している。以上の皿・壺の底部は、すべて回転糸切りである。38は、吉備系土師質土器の碗である。嵌入土師器である。39は、極めて薄手に作られた壺である。底部は回転糸切りである。在地産と思われるが、底径が小さく、特異な特徴を持つ。40~43~46は、瓦質土器である。40は火舍である。鉢状の口縁部上面に、巴文のスタンプが並ぶ。43~46は、こね鉢である。41~42は、土鍋である。外面には、厚く煤が付着している。47~49は、東播系須恵器である。47~48は鉢、49は壺の胴部である。50~51は、常滑焼きの壺である。50は、中野縄年の6b期、51は7期に属すると思われる。

52~64は、青磁である。61は、体部外面に片切り彫りで蓮弁文を刻む。外面の施釉は体部下位に及ばず、露胎となる。同安窯系の青磁である。その他は、龍泉窯系青磁に属する。65~68・70~72は、青白磁である。65は小壺の蓋、66は合子の蓋、67は袋物、68は合子の身、70は皿、71~72は碗である。67は、頸部片で全体は不明だが、瓶を布で包んで、頸部で縛ったような意匠と思われる。69~73~80



Ph.151 094号遺構出土遺物

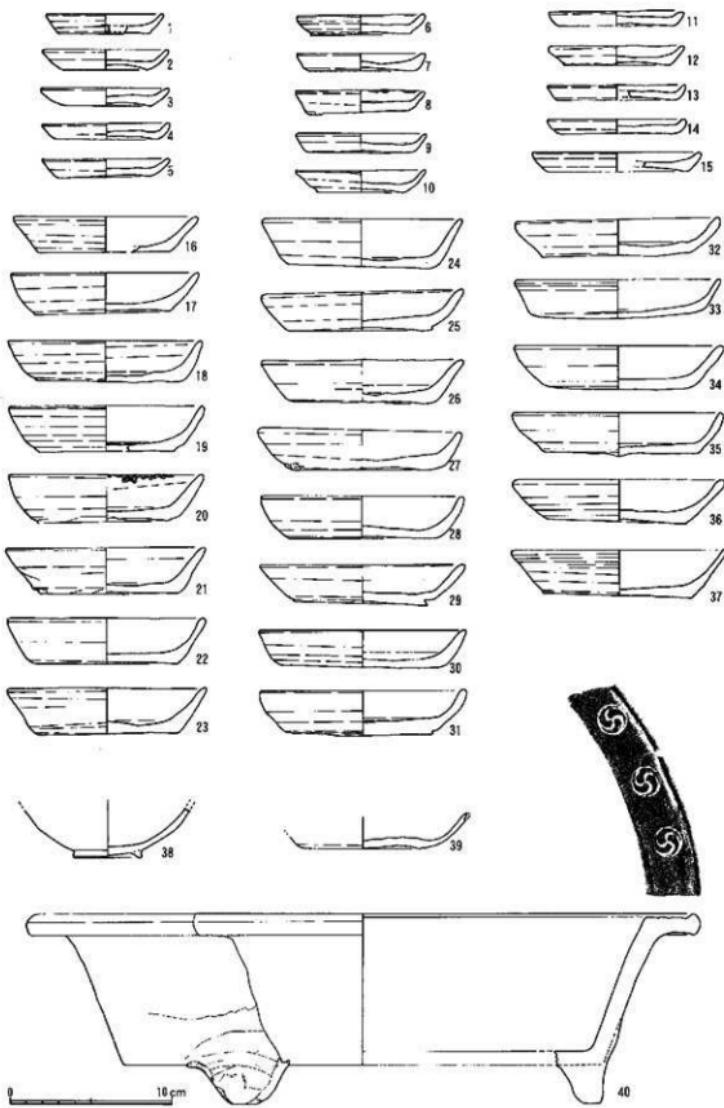


Fig. 193 094号遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

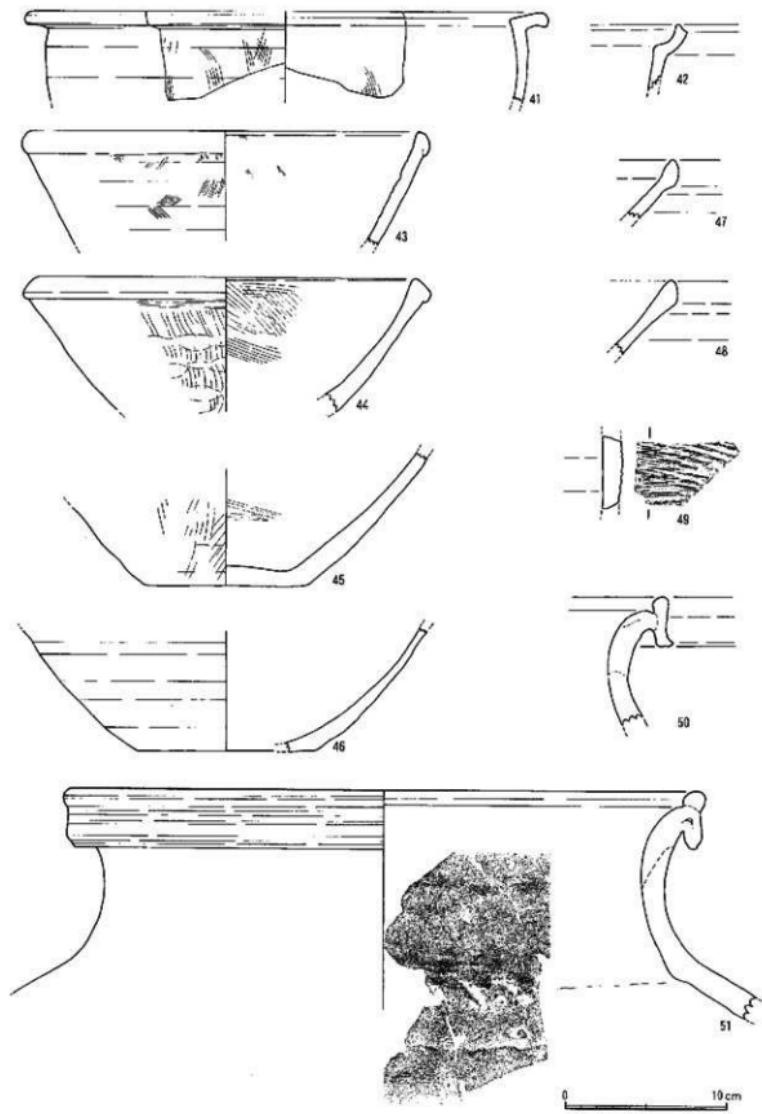


Fig. 194 094号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

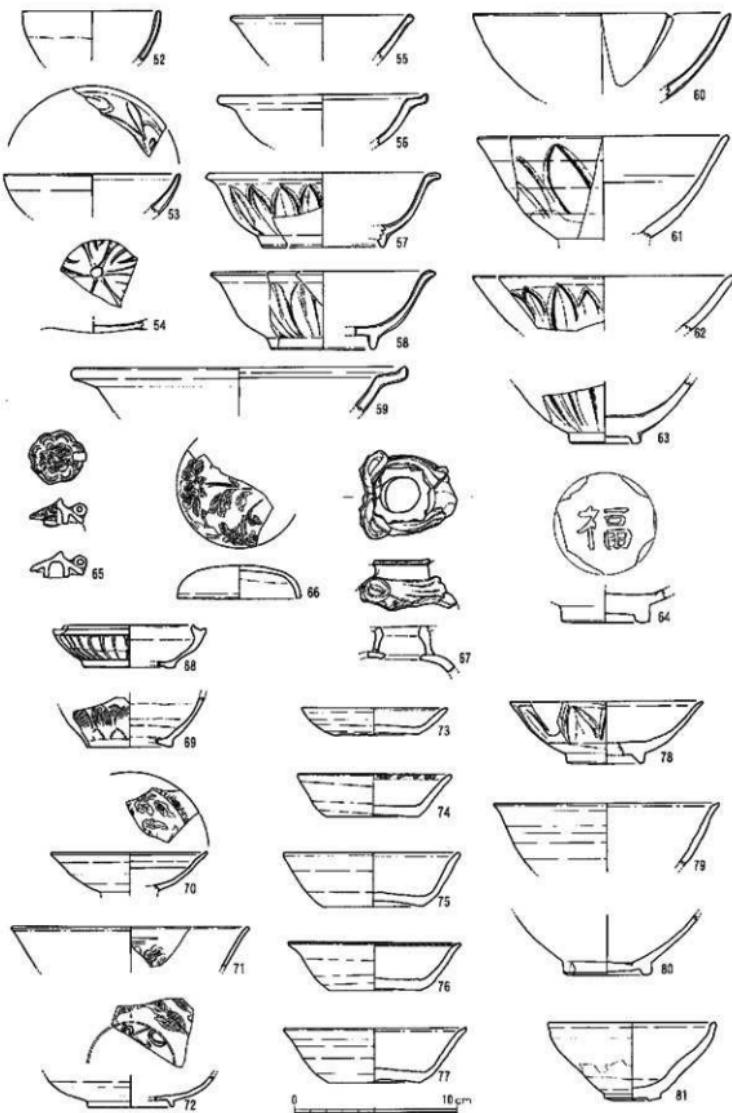


Fig. 195 094号遭構出土遺物実測図 3 (1/3)

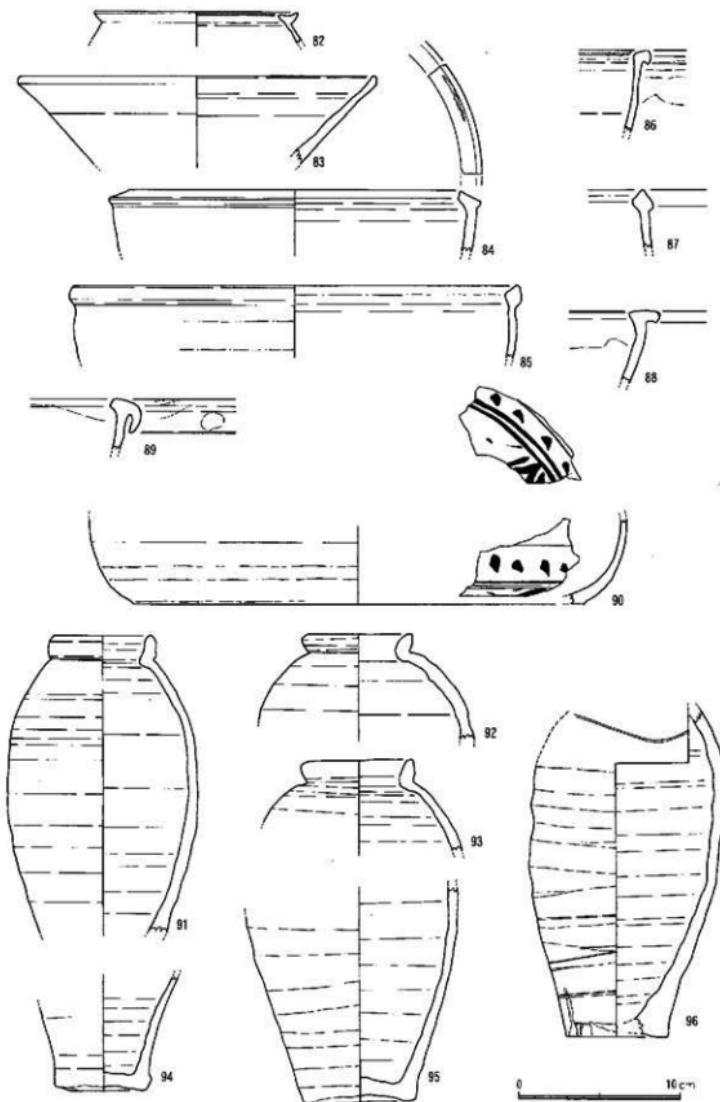


Fig. 196 196号遺構出土遺物実測図 4 (1/3)

は、白磁である。73～77は口禿皿、79・80は口禿碗である。78は小碗である。体部外面には、太い沈線で、蓮弁を描く。見込みは、輪状に釉を削り取っている。体部下位から外底部は露胎である。81～101は陶器である。81は天目茶碗、82は黒褐釉壺、83は灰釉の鉢、84は褐釉の鉢である。85～90は黄釉の盤で、90には鉄絵が描かれる。91～96は瓶である。94は灰釉、他は褐釉を施す。97～101は大型容器である。97は褐釉の壺、98～100は褐釉壺の底部、101は茶綠釉の大甕である。101は、口径63.4cmを測る。102・103は瓦、104～108は石製品である。104は硯、107は砥石、108は滑石の温石。14世紀前半の構造土坑であろう。

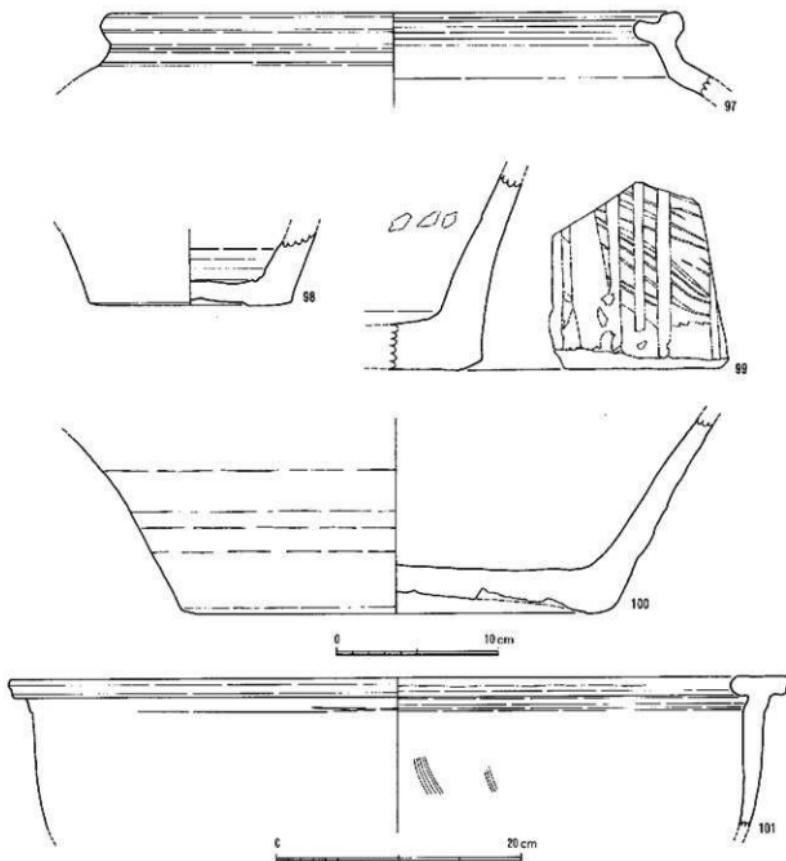


Fig. 197 094号造構出土遺物実測図 5 (97~100…1/3, 101…1/4)

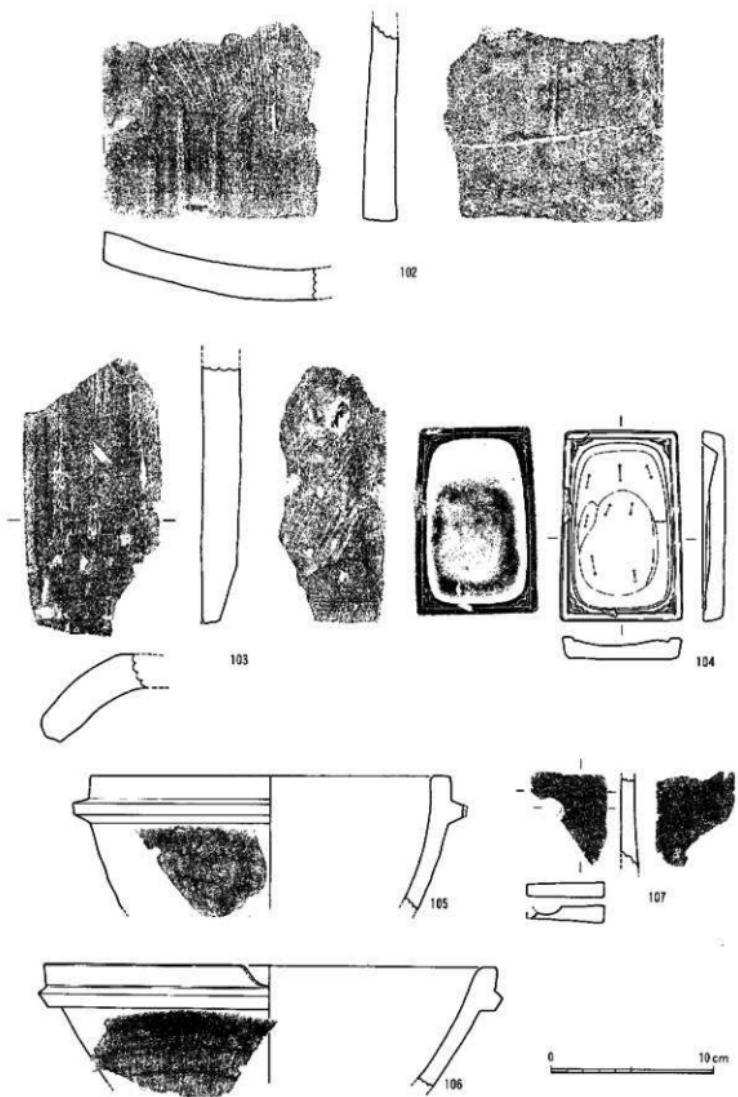


Fig. 198 094号遺構出土遺物実測図 6 (1/3)

100号遺構

第2面の北西壁際で検出した大型土坑である。調査の都合上、半ば以上が未掘で、平面的にも全形を知り得ない。調査できた範囲で、一辺が約400cm、深さ50cmを測る。

出土遺物を Fig.199・200に示す。1～12は、土師器である。1～7は皿、8～12は壺で、8～10

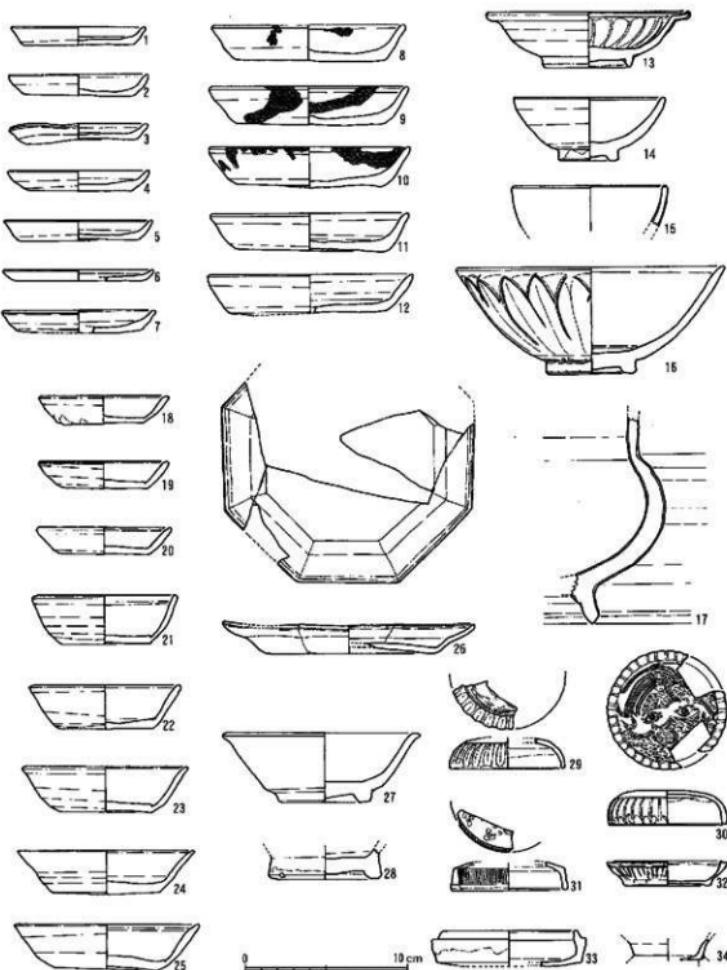


Fig.199 100号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

には油煙が付着している。底部は回転糸切りである。

13~17は青磁である。17は、香炉である。全面に厚く施釉し、高台皿付きを削り取って露胎とする。18~28は白磁である。18~25は、口禿皿である。26は、八角皿となる。浅い皿で、体部は屈曲して二段に開く。全面施釉だが、口縁部は削って、口禿とする。27は小鉢である。皿付きの際まで、透明釉をかける。見込みには、使用による細かい傷が多数付いている。外面は、黒く焼けている。28は壺の底部である。29~34は、青白磁である。29~33は合子、34は上下とも欠失するが、灯火器であろう。35~41は、陶器である。35・36は褐釉の瓶、37~41は黄釉の盤である。

42は滑石製の石鍋である。外面には煤が付着している。

13世紀後半から14世紀前半に属する土坑である。



Ph. 152 100号遺構出土遺物

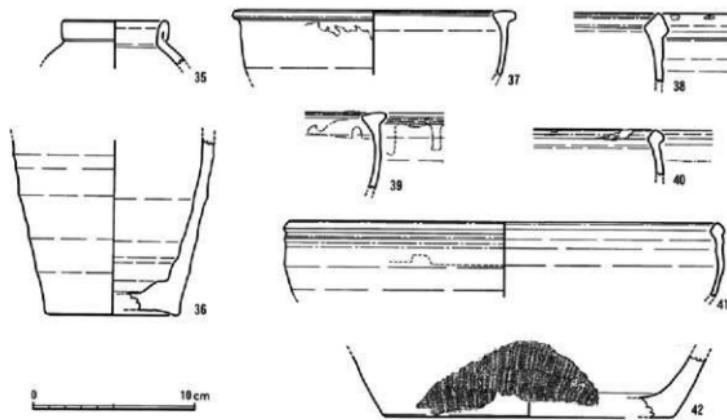


Fig. 200 100号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

103号遺構

第2面で検出した大型土坑である。過半が調査区外に出るため、全容は不明である。

出土遺物の内、特筆すべき物を Fig. 201 に示す。1 は、白磁の印花文小壺である。Ph. 153-4 は青白磁の合子蓋である。2 は天目茶碗で、完形で出土した。3 は、石硯である。赤褐色の凝灰岩（赤間石）を用いる。実測図下端の二辺は生きており、風字硯の再生品と思われる。

14世紀前半頃の土坑である。

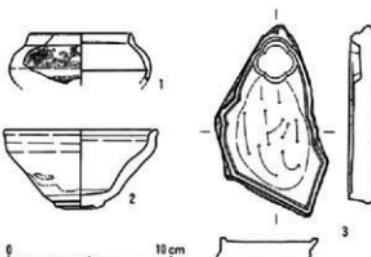
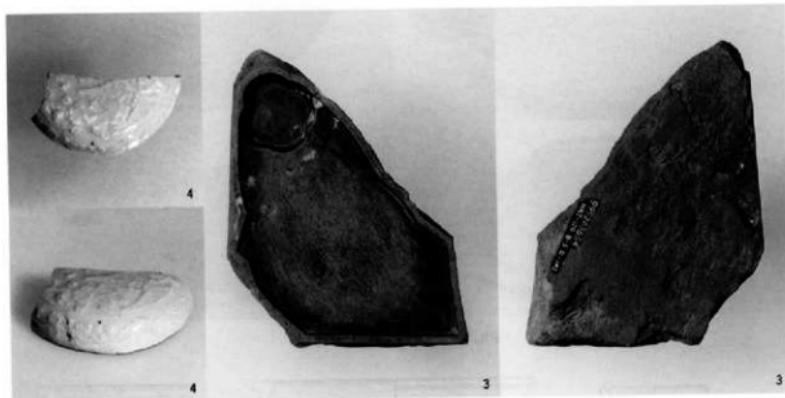


Fig. 201 103号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 153 103号遺構出土遺物

133号遺構

第3面で検出した土坑である。長辺180cm、短辺110cm の略長方形を呈し、遺構検出面からの深さは20cm 前後を測る。埋土中位より、完形の土師器皿・白磁皿を中心とした遺物が出土している。

出土遺物の一部を Fig. 203 に示す。1～11は、土師器である。1～7は皿で、口径7.6～8.8cm、器高0.9～1.2cm を測る。8～11は壊である。口径12.1～13.8cm、器高2.1～2.4cm を測る。土師器皿・壊の底部は、回転糸切りである。

12～14は、青磁である。12・13は鎌蓮弁文の碗である。14は小鉢で、前面施釉した上で、豊付きの袖を削り取って、露胎とする。15～25は白磁である。

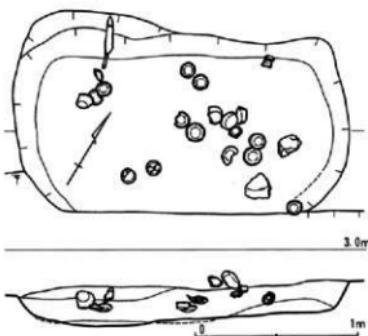
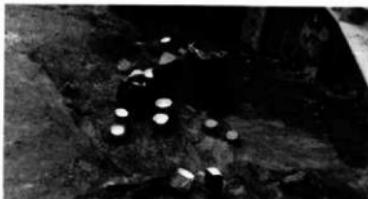


Fig. 202 133号遺構実測図 (1/30)

15~24は口禿皿、25は平底皿である。25の見込みには、片切り掘りの割花文が描かれている。26~28は、陶器である。26は天目茶碗で、黒色釉がかけられている。27は掲軸である。器形不明だが、灯火器の部分であろうか。28は、掲軸の蓋である。内面には、うっすらと細かい青海波の叩き目が見える。

この他、瓦片・鉄短刀なども出土している。

13世紀後半の遺構であろう。



Ph. 154 133号遺構(東より)

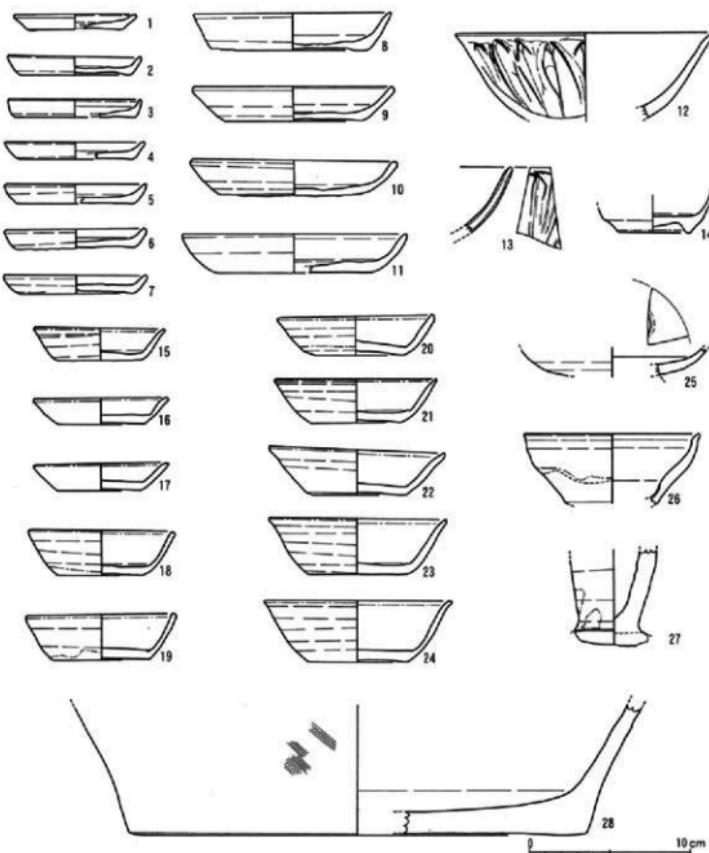


Fig. 203 133号遺構出土遺物実測図 (1/3)

190号遺構

第3面より検出した土坑である。ふたつの方形板囲い土坑からなり、北側の板囲いを190A、南側の板囲いを190Bとした。190Aは長辺140cm、短辺90cm、深さ34cmを測る。190Bは、調査区矢板の地中梁工事に絡む事前掘削で、一部分を失っており、長辺100cm以上、短辺120cm、深さ25cmを測る。板壁は、遺存状態が悪く、木質が検出されたのみだが、190Aでは板の内側に杭を打って支えた状況が確認できた。なお、土坑掘り方は、精査によってもひとつしか確認できなかった。また遺物の出土状況も、両遺構が同時に埋まつた状況を示している。したがつ

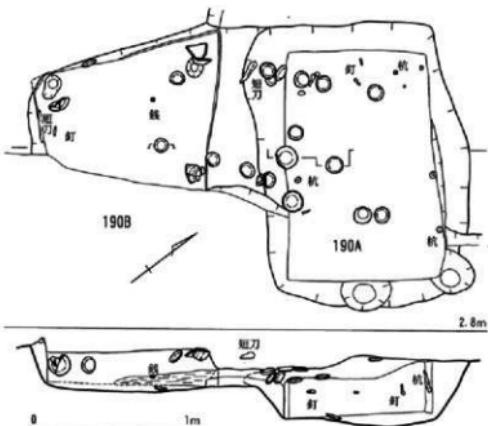


Fig. 204 190号遺構実測図 (1/30)



Ph. 155 190号遺構

て、190A と 190B は同時に営まれた、二段構造の板囲い土坑と考えられる。残念ながら、機能は不明とせざるを得ない。

出土遺物を Fig. 205 に示した。1～19は、土師器である。1～15は皿で、口径8.1～9.4cm、器高0.9～1.3cmを測り、浅くて偏平な皿が多い。16～19は壺で、口径13.0～13.6cm、器高2.5～3.1cmを測る。皿・壺ともに、底部は回転糸切りである。なお、19の内外には、墨書きがみられる。文字のようだが、内容は不明。20は、東播系須恵器の鉢である。21～28は白磁である。21～23は、体部が屈曲

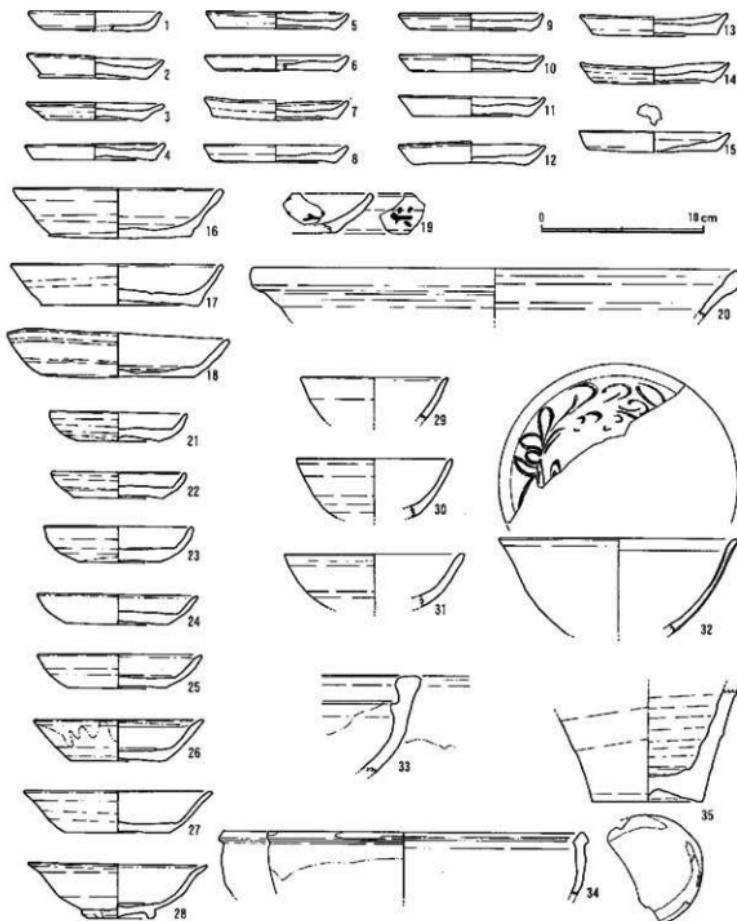


Fig. 205 190号遺構出土遺物実測図 (1/3)

して丸みを持つ。24～27は口禿皿である。28は、口禿の高台皿である。外面は、高台の際まで施釉している。29～32は、青磁である。32の内面には、浅い片切り彫りの牡丹唐草文があしらわれている。33～35は、陶器である。33は灰褐色のこね鉢、34は黄釉の鉢、35は褐釉の壺である。35の外底部には胎土目が付いている。これらの遺物の内、2・4・5・7・9・11～13・15・17・24・26・27は190A、14・16・21・22・35は190Bから出土している。

この他、鉄短刀・鉄釘・銭貨・鐵滓などが出土した。

13世紀後半の土坑と考えられる。

360号遺構

第3面より検出した土坑である。長辺240cm、短辺90cmの長方形を呈し、検出面からの深さは、30cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、壁は比較的立つ。形態的には、木棺墓を思わせるが、寸法が大きすぎて難が残る。用途不明として、判断は保留したい。

出土遺物をFig.207に示す。1～11は、土師器である。1～8は皿で、口径8.5～9.5cm、器高0.85～1.25cmを測る。9～11は壺で、口径12.0～12.4cm、器高2.3～2.5cm。皿・壺の底部は、回転糸切りである。12～14は、白磁である。13は、小鉢である。疊付きの際まで、透明釉を施す。14は、口禿碗である。15～21は青磁



Ph. 156 360号遺構（北東より）

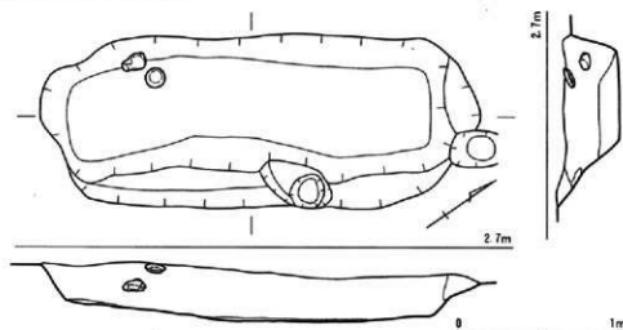


Fig. 206 360号遺構実測図 (1/30)

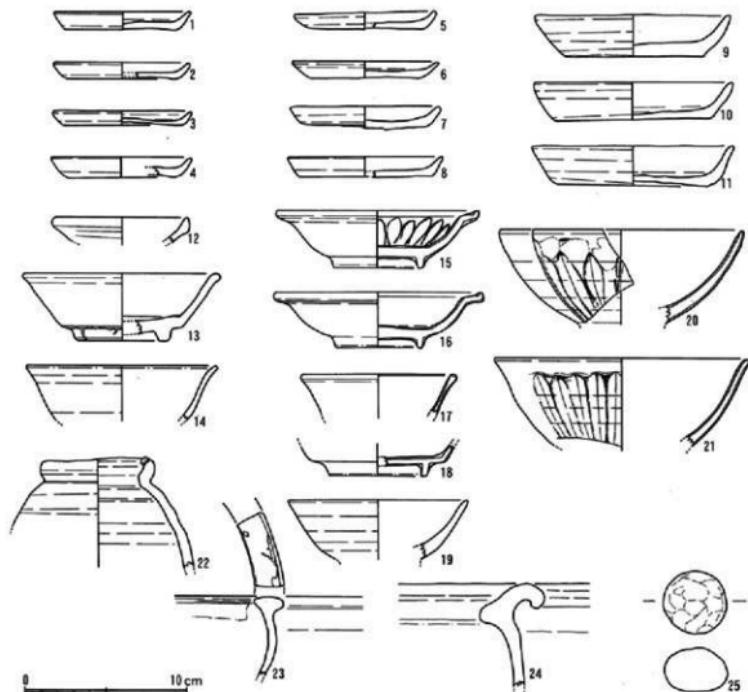


Fig. 207 360号遺構出土遺物実測図 (1/3)

である。青磁では、この他 Fig. 217に示した花生の底部片が出土している。22~24は、陶器である。

22は褐釉瓶、23は黄釉整、25は黄釉の鉢である。26は、石玉

である。ぎっちょう球であろうか。

13世紀後半の遺構であろう。

367号遺構

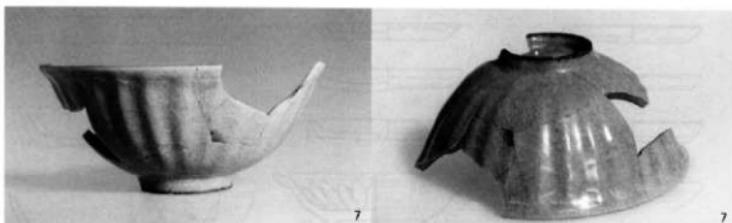
第3面の、360号遺構のすぐ横で検出した、柱穴状の土坑である。遺構としては、あり触れた柱穴だが、次に示すような優品の青磁がまとめて出土している。

出土遺物を Fig. 208に図示する。1は、白磁の口禿皿である。2~8は、青磁である。2は完形品の小鉢である。3もほぼ完形で出土した。4は小碗である。5~8は碗である。すべて鎬蓮弁文の碗である。4~7は、全面施釉の後、高台



Ph. 157 367号遺構出土遺物 1

疊付きの釉を削って露胎とする。8は、疊付き際から外底は、施釉せずに露胎とする。
13世紀後半の遺構であろう。



Ph.158 367号遺構出土遺物 2

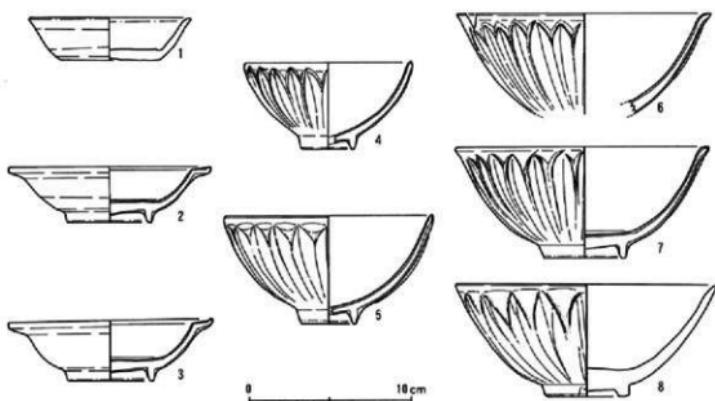


Fig. 208 367号遺構出土遺物実測図 (1/3)

390号遺構

第3面で検出した土坑である。埋土下位から陶器の脚部が出土している。廃棄土坑であろう。

出土遺物を Fig. 209に示す。1～3は、土師器の皿である。底部は、回転糸切りする。1は口径8.4cm、器高1.15cm、
2・3はともに口径9.4cm、器高1.1cm
を測る。4は白磁の、口禿碗である。5
は、青磁の鎬蓮弁文碗である。高台際ま
で施釉する。6は褐釉陶器の脚部である。
灯火器の脚部であろう。

13世紀前半代の土坑と思われる。



Ph.159 390号遺構 (南西より)

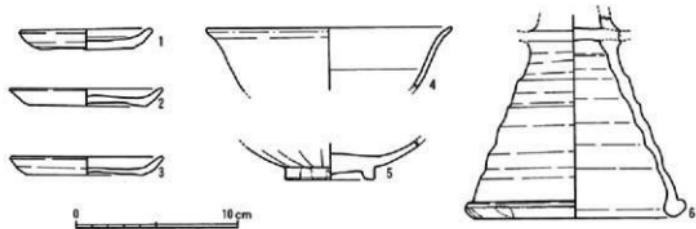


Fig. 209 390号遺構出土遺物実測図 (1/3)

451号遺構

第3面より検出した浅い土坑である。

埋土上位より、金箔を貼った漆器皿が出土した。木地の木質はほとんど残らず、漆皮膜の上に金箔がのっていたのみである。周囲の土ごと切りとつて取り上げた。

他に土師器の小片（底部糸切り）が出土している。

時期を判断するに足る資料はないが、13世紀代と考えれば大過なかろう。

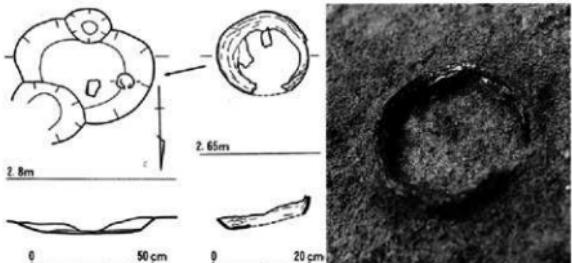


Fig. 210 451号遺構実測図 (1/10, 1/5) Ph. 160 451号遺構金箔皿
出土状況 (北東より)

(4) 井戸

233号遺構

第3面で検出した井戸である。前述した094号遺構に切られており、094号遺構の底面において検出したことになる。したがって、掘り込み面として第3面に伴うか否かは、明かではない。



Ph. 161 233号遺構 (南より)

Ph. 162 308号遺構 (南西より)

直径160cm 程の円形の掘り方のほぼ中央に、径70cm 程の結い桶を据えて、井側とする。

土師器、青磁、白磁(口禿)などが出土している。13世紀から14世紀前半の井戸であろう。

308号遺構

第3面で検出した井戸である。掘り方の一部が調査区外にかかるが、おむね直径170cm の掘り方に、60cm ほどの結い桶を据えて井側とする。

土師器、青磁(運井)、白磁(口禿)、陶器、瓦質土器こね体、東播系須恵器鉢、瓦(コビキ)などが出土している。

14世紀前半頃の井戸であろう。



Ph.163 324号遺構(北西より)

324号遺構

第3面で検出した井戸である。径230cm 前後の掘り方を持ち、井側には結い桶を据える。

埋土からは、多様な遺物が出土した。Fig.211-1は、山茶碗系こね鉢である。内底部は、使用のため摩滅している。Ph.164-2は、白磁の陶枕である。そのほか、青磁・白磁・陶器・常滑・備前・東播系須恵器・瓦・石鍋などが出土した。

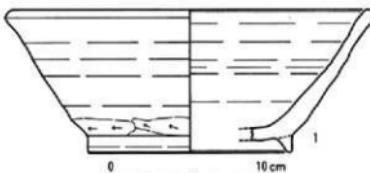
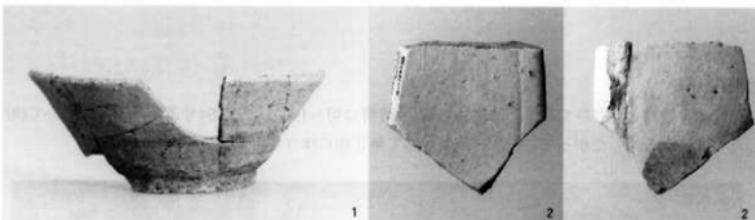


Fig.211 324号遺構出土遺物実測図(1/3)



Ph.164 324号遺構出土遺物

13世紀後半から14世紀前半頃の井戸であろう。

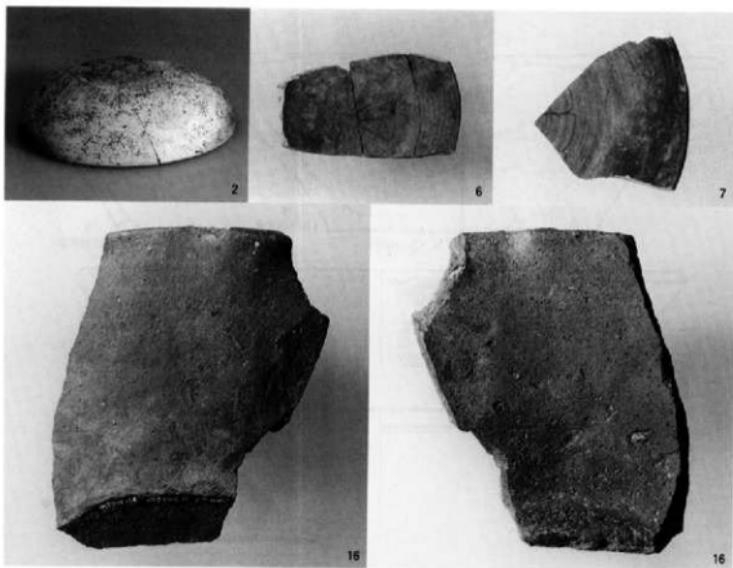
(5) その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺構出土遺物・包含層出土遺物の内、特徴的なものを Fig.212~215に示す。1~3は、土師器である。1は口径に対して極端に底径が小さい皿で、器壁は薄く、強いロク口目が残る。白色系土師器である。2は、京都系土師器である。内面は平滑で、外面には掌で押さえた跡がみられる。伊野分類 Ga-1 タイプに属する。3は、吉備系土師質土器碗である。以上の土師器は、いずれも撒入土師器と考えられる。4~7は、楠葉型瓦器である。4は碗で、内面は密に荒磨

き、外面にはやや疎らな分割磨きがみられる。5～7は、坏である。見込みには暗文で花文を描く。体部は、内面に指を二本当てて外側から箠で押し、輪花に作る。

8・9は、中世須恵器である。8は、香川県の十瓶山南麓で焼かれた製品と推定される壺である。口縁の内外面は横撫で、体部外面は格子叩きであるが、口縁部外面の横撫での下には、格子叩き目が薄く残っている。9は、生産地不明の壺である。口縁は、外側から折り曲げて玉縁状に作る。10は、瀬戸の壺の口縁である。前Ib期の瓶子や小型三耳壺の口縁形態に類似する。11～14は、備前焼である。11は間壁編年Ⅲ期、12はⅣB期のすり鉢、13・14はⅢ期の壺の口縁である。15～20は、常滑焼きである。15は中野編年1b型式の壺である。16～19はこね鉢で、16・17・19は7型式、18は8型式に該当する。20は、6a型式の壺である。口径42cmを測る。

21～23は、越州窯系青磁碗である。21はきめ細かい胎土の精品、22は胎土が灰色がかった粗く体部下位が露胎となる粗製品、23は総釉で高台内側に目痕が付く精品である。24～27は、龍泉窯系青磁である。24は、印花文碗である。25は、乳鉢であろう。内面の露胎部分は、平滑に摩耗している。26は鉢である。見込みには片切り彫りで水波、貼花で双魚を配し、体部内面にも片切り彫りで波をあしらう。総釉で、豊付きのみ釉を搔き取る。27は、酒会壺の底部である。内側に棱をなしてすばまた体部に円盤を落として、底部とする。落とし底と体部は、釉で接着する。28～35は白磁である。28・29は型作りの小鉢である。30・31・34の口縁も口禿に作る。35は、青白磁の皿である。体部下位は露胎、見込みは輪禿にする。36～38は陶器である。36は、磁窯窯の黄釉褐彩水注である。体部下位から外底部は露胎となるが、化粧土が覗いている。37は褐釉、38は黒褐釉の瓶である。Ph.167-39は、天目茶碗である。火を受け、釉表は荒れている。40は、青磁の香炉である。舟腰に作る。41・42は、白磁の



Ph.165 その他の出土遺物 1

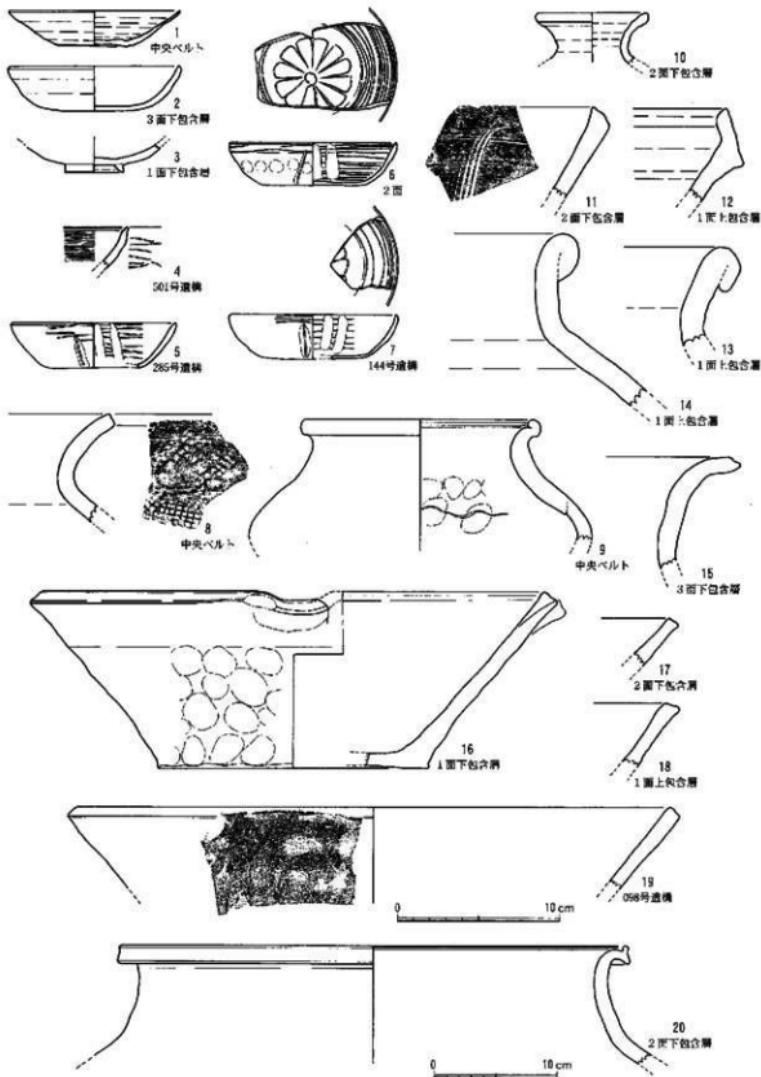


Fig. 212 その他の出土遺物実測図1 (1~19…1/3, 20…1/4)

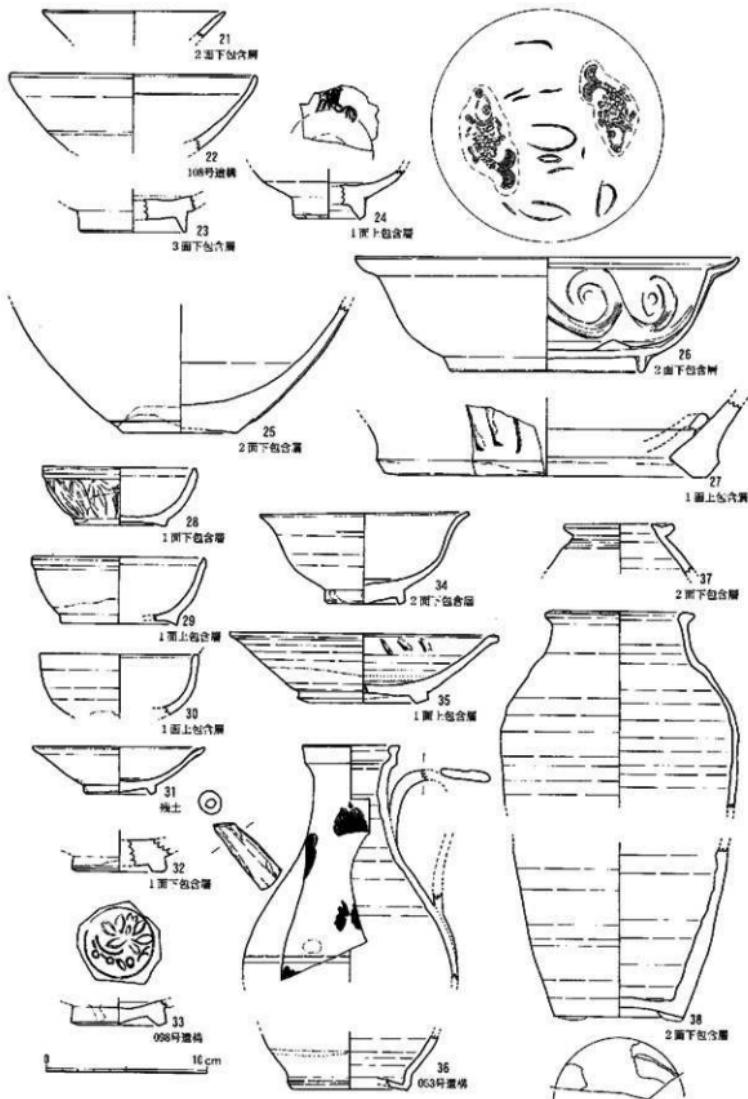
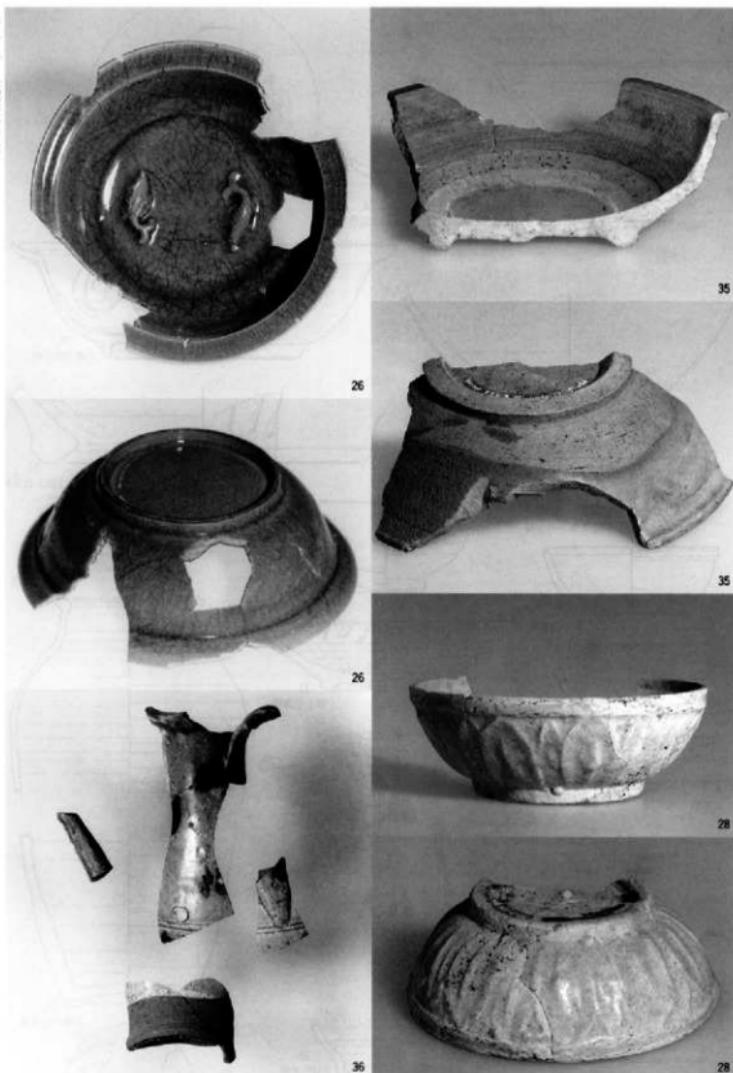
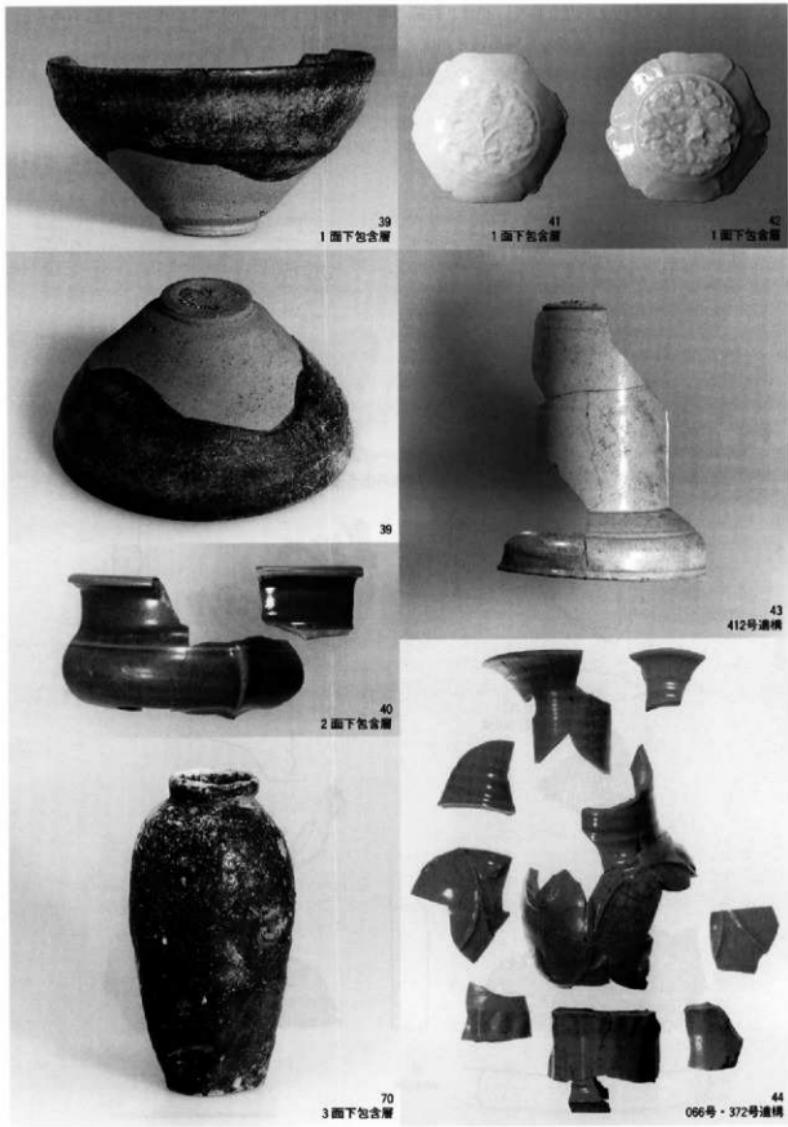


Fig. 213 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph. 166 その他の出土遺物 2



Ph. 167 その他の出土遺物 3

蓋である。上面に印花文をあしらう。43は、白磁の脚である。土管状を呈する。鼓の可能性もある。
44は青磁の花生である。Fig. 217に実測図を示す。70は褐釉陶器の瓶である。



Ph. 168 その他の出土遺物 4

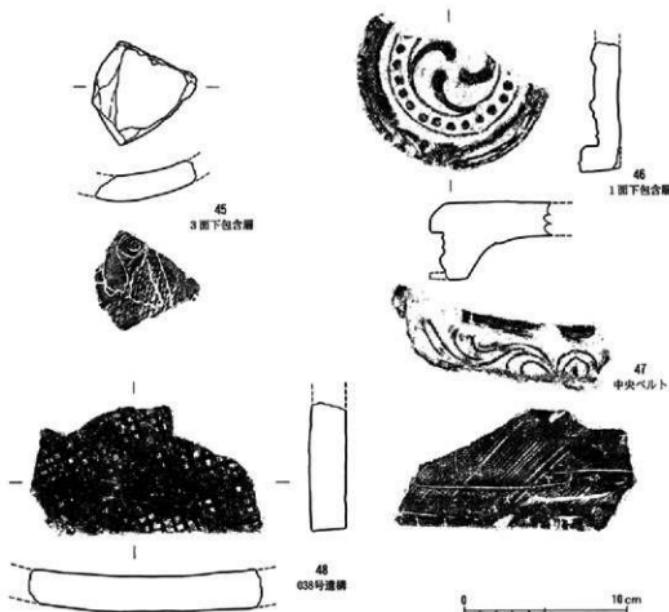
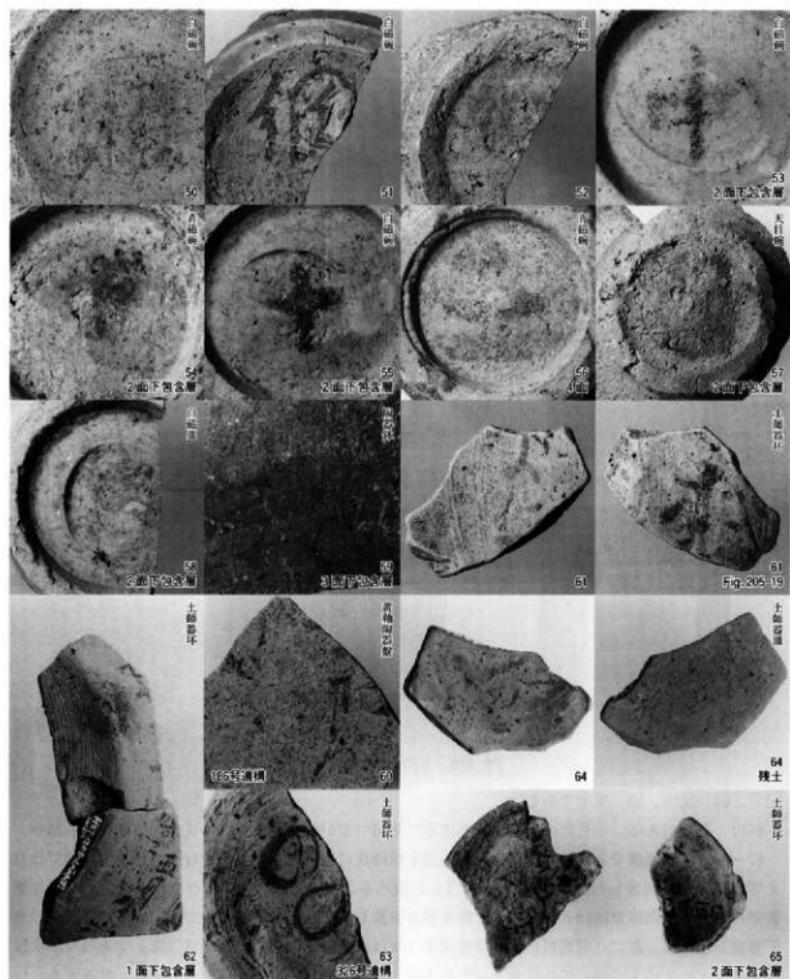


Fig. 214 その他の出土遺物実測図 3 (1/3)

45～49は、瓦である。45は平瓦であるが、下面に沈線で文様を描く。意匠は不明である。46は軒丸瓦の瓦当である。珠文は24個と推定される。47は、軒平瓦である。48の平瓦の上面は、格子叩きの後撫で、下面には板状工具による擦過痕が見られる。49は、鬼瓦片である。

Ph.169には、墨書き資料を示した。50～「王綱」、51～「綱」□、52～「綱」、53～「中」、54～「下」、55～「十」、56～「三」、57～59～文字、60～仮名、61～習字、62～「□□ 五月小六日 □□」、63～



Ph. 169 その他の出土遺物 5

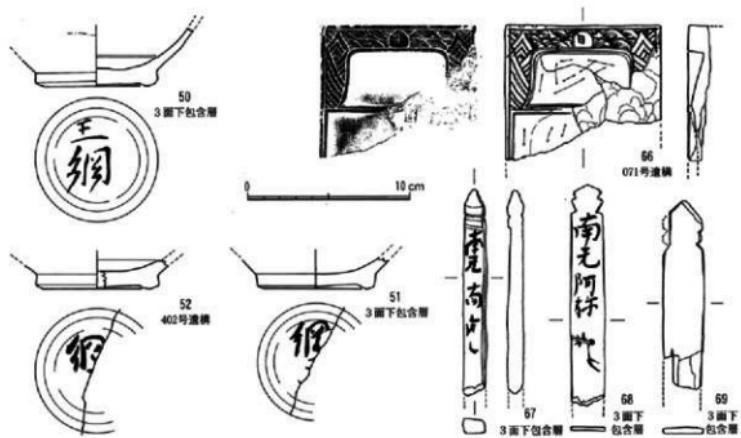
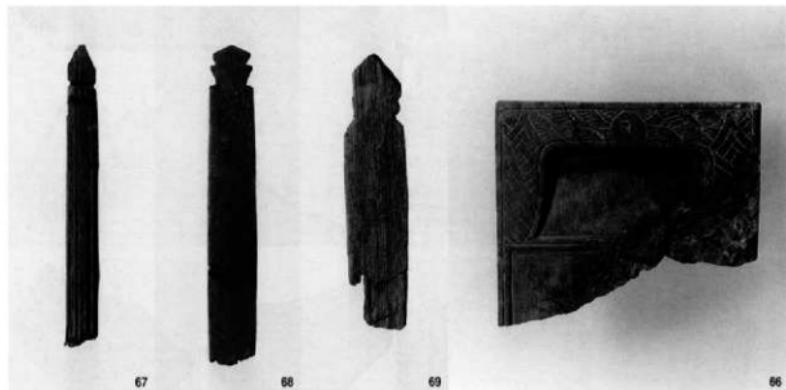


Fig. 215 その他の出土遺物実測図 4 (1/3)



Ph. 170 その他の出土遺物 6

記号、64一文字、65一呪句である。

66は、石鏡である。小豆色の凝灰岩（赤閃石）を用いている。額部に細い沈線で、波模様を刻む。67～69は、板塔婆である。67は、角柱の頭部を板碑状に削りだし、墨書を行う。墨書は肉眼では見えず、赤外線で判読した。「南無南無~~カ~~」と読める。68・69は、薄い板材を削り出す。68には墨書がみられる。肉眼ではほとんど見えず墨書部分が盛り上がって見えるだけであるが、赤外線では若干墨痕が追える。縦に「南無阿」までは確実で、次は不明瞭ながら形としては「弥」であろう。次は墨が見えず、その下の板に切れ目が入ってめくれている部分で、鮮明な墨痕が見える。判読するにはいたらないが、形から、「如」ではなかろうか。もう一文字分の墨痕が残るが、漢字の払いの一部が

見えるだけで、形はつかめない。以上を総合して推定すると、「南無阿弥陀如来」と読めそうである。69には、墨痕は認められなかった。

B区からは70点の銅錢が出土した。その内、錯や破損のため判読できなかつたり、銭文を確定できなかつた錢が46点、近代銅貨が1点含まれている。銭銘が判読できた内訳は前漢1点、唐2点、北宋18点、金1点、南宋1点である。…覧表と拓本を示す。元豊通寶に崩り輪錢 (Fig.216中段中央) がある点と、切斷した錢 (Fig.216中段左端) がある点に注目したい。

表7 第120次B区調査出土銅錢一覧

銭貨名	初鑄年	王朝名	年号	枚数
五銖	BC 118	前漢	元狩5年	1
開元通寶	621	唐	武德4年	2
景德元寶	1004	北宋	景德元年	2
祥符通寶	1009	北宋	大中祥符元年	1
明道元寶	1032	北宋	明道元年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	3
嘉祐元寶	1056	北宋	嘉祐元年	1
治平元寶	1064	北宋	治平元年	2
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	1
元豊通寶	1078	北宋	元豐元年	2
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	1
聖宋元寶	1101	北宋	建中靖國元年	1
政和通寶	1111	北宋	政和元年	3
正隆元寶	1157	金	正隆2年	1
嘉定通寶	1206	南宋	嘉定元年	1
近代錢(一覧)				46
解説不能				
總数				70

表8 出土遺構別銅錢一覧

遺構番号	銭貨名	初鑄年	王朝名	径(cm)	備考
1面008	明道元寶	1032	北宋	2.25	
1面050	政和通寶	1111	北宋	2.48	
1面056	解説不能				
1面056	解説不能				折二・粗悪
2面070	五銖	BC118	前漢		1/2残
2面094	開元通寶	621	唐	2.43	
2面094	解説不能				細片
2面094	解説不能				
2面094	解説不能				細片・もろい
2面094	解説不能				錯激しい
2面094	解説不能				1/2残
2面094	() () () 寶				錯激しい
2面094	解説不能			2.45	錯激しい
2面094	解説不能				錯激しい
2面094	解説不能				錯激しくもろい
2面094	解説不能				錯激しい
2面094	解説不能				錯激しい
2面094	解説不能				細片
2面094	解説不能				錯激しい
2面094	解説不能				錯激しい
2面120	太() () 寶				錯激しくもろい
3面153	解説不能				錯激しい
3面190B	解説不能				錯激しくもろい
3面385	元豊通寶	1078	北宋	2.48	青味

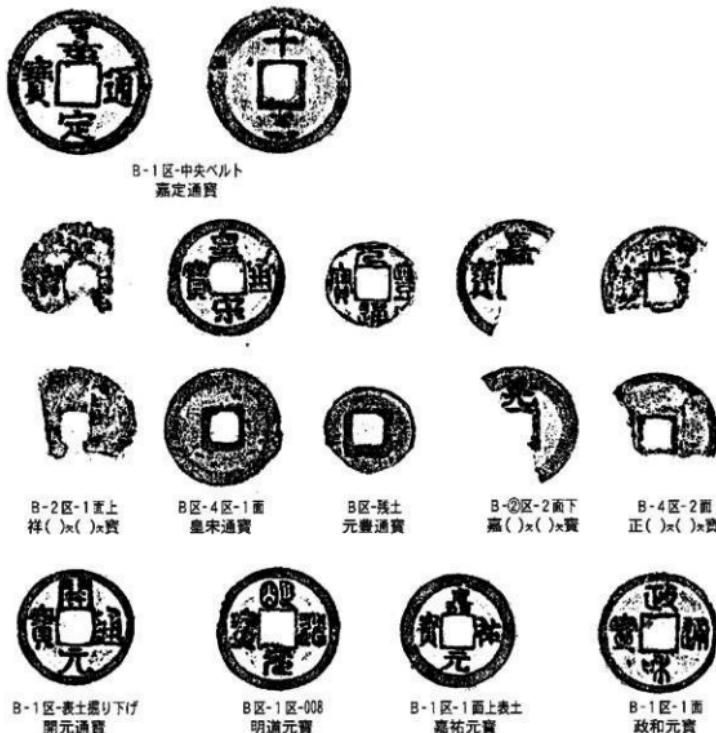


Fig. 216 120次 B区出土銅銭拓本 (1/1)

第六章 ま　と　め

本書を終えるに当たって、若干の問題点に基づいて調査成果を整理し、発掘調査の総括に代えたい。なお、本書作成と並行して行っていた、資料収藏のための整理の過程で、これまで破片として取り上げていた青磁の花生が、かなり接合でき、口縁から底部までつながった。既に破片の集合写真は Ph. 167に掲載したが、実測図を改めたので、Fig. 217に示すこととする。

1. 地形環境の復元

既に述べてきたように、102次・120次A区・120次B区調査地点は、砂丘状に立地していない。博多遺跡群は、全体として博多湾岸に形成された数列の砂丘状に立地していることが知られているが、

今回報告した4地点は、砂丘間低地をL字型に調査した形となる。

これら各地点に関して、西南大学の磯野教授から自然地理学の見地からのご教授をいただいたので、それに基づいて検討を試みたい。

102次調査地点では、最下層が、河口性の砂であることが指摘された。それを覆うのは、湿地的な環境を示す、グライ化した土と鉄分を含む砂の互層であり、それまでが自然堆積とされた。言い替えれば、最下層とその上20cm程度分を除けば、すべて人為的な堆積ということになる。

類似の指摘は、120次B区においてもなされた。120次B区の第3面下の堆積砂層は、すべて埋立層とされたのである（Fig. 182 参照）。120次B区の下層は、調査区南東辺側から急傾斜で落ち込んでいた。この落ち込んだ砂の堆積が、120次B区全体を覆い、120次A区の中程から南東側の砂丘の落ち（Fig. 140）につながるものと思われる。なお、120次B区では、南東辺側の急傾斜の落ちの背後に、砂の水平堆積が確認されており、これが自然堆積層と判断された。磯教授によると、102次調査地点方向から120次B区方向に河口を開いていた谷を人為的に池状に整形して、そこに水が溜まった。やがて、全体を一度埋め立てて池状の地形を作り

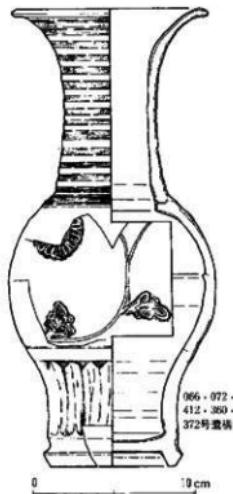


Fig. 217 120次B区出土青磁花生

なおし、しばらくは水が溜まつたまま放置され、黒色粘土層が形成された。その後、砂丘の風成砂を大量に客土し、埋立を完成させたと言ふ。

整理しよう。102次調査地点付近から北東に砂丘の谷地形が存在し、小河川が流れ込んで河口性の砂が堆積しつつあった（平安時代後期以前）。その後、102次調査地点付近で大規模な埋め立てが行われる一方で、120次B区から120次A区にかけては、大きな池状の地形が人為的に作り出された。この池は、一度余地に埋め立てられたが埋まりきらず、維持され続けた。池の周囲の埋立が進行した時期は、102次調査の457号遺構、120次A区の410号遺構からみて、12世紀前半から後半にかけてである。またこの段階で、120次B区の人骨や板塔婆が流れ込んでいる。本格的にこの旧谷地形を埋め立てたのは、13世紀前半であり、以後、粘質土を敷いた細かい単位の整地が繰り返されて、安定した生活面を作り続けることとなる。

2. 寺院の内と外

室町時代以降、120次B区付近には、聖福寺塔頭の総光庵が存在した。B区の礎石建物や分厚く堆積した粘土による広範囲の整地層群は、この寺院に伴う可能性が高いと思われる。同様な整地は、102次調査地点や120次A区でも見られ、池状遺構などの庭園と考えられる遺構が調査されていることを考え合わせれば、102次調査地点・120次A区調査地点を含む範囲に、寺院敷地が展開していたものと考えて大過ないだろう。

一方、107次調査地点では、このような整地層は検出されなかった。107次調査地点は、砂丘上に立地しており、古墳時代の6世紀以降古代・中世を通じて、多数の遺構が営まれていた。特に9世紀から12世紀には、土壙墓が営まれ、祭祀上坑が掘られ、経筒が埋められるなど、特殊な空間であったことを思わせる。その後、場としての特殊性は感じられなくなるが、逆に生活遺構の密度は高く、他の

3地点とは好対照をなしている。102次調査地点や120次調査地点が寺院敷地となった当初、おそらく107次調査地点がそれに取り込まれることは無かったに違いない。120次A区調査地点と107次調査地点の間には、現在路地が通っている。この道筋は、かつて74次調査でその延長が発掘されており、14世紀初頭に作られた道路であることが判明した。102次・120次調査地点を含む寺院敷地と町屋とは、恐らくこの道路を境にして対峙していたのであろう。

3. 東海系S字状口縁台付壺について

102次調査からは、東海系S字状口縁台付壺（以下、S字壺と略称する）の遺存状態の良好な破片が出土した。口縁部はほぼ全周残り、胴部は3分の2、底部は完存、脚部も一部が残り、口縁部から脚部まで接合、復元することができた。この遺物については、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏・永草康次氏に見直していただき、ご教示を賜った。また、接合できなかった小片を試料として提供し、胎土分析からの検討を加えていただいた。本来ならば、両氏から原稿をいただくところではあるが、報告書作成のさまざまな都合から果たせなかつたので、両氏からいただいたコメントのエッセンスに触れておきたい。

まず、胎土については、花崗岩とそれを起源とする砂礫によって特徴付けられ、尾張地域で出土するS字壺の本來的な胎土と比較すると、細部にわたって共通点が認められる。しかし、博多周辺も花崗岩類が分布しており、在地の土器も花崗岩質であることが予想されるので、尾張出土の同形式の上器胎土と類似することが直接搬入であることを示すとは断言できない。

次に、S字壺の形態であるが、B類古段階の資料であり、外面および内面調整、台付部の補充技法など、尾張地域出土の同時期資料と同様な技法が観察できる。細部の形態や色調・焼成からも連和感は無く、東海地域からもたらされた搬入品と考えられる。

以上のご指摘から、このS字壺が東海からの直接搬入品である可能性は高いと思われる。また、一緒に博多遺跡群出土と、博多遺跡群の北東に隣接する堅粕遺跡群出土のS字壺を見ていただいたが、胎土、技法、形態的にはいずれも搬入の可能性が指摘されていることも付け加えておく。

4. 107次調査検出の経筒埋納

107次調査104号遺構からは、経筒用陶器の埋納遺構が検出された。経筒に用いられた中国製の陶磁器については、杉山洋氏による研究がある（「北部九州の陶製経筒」「橘崎彰一先生古希記念論文集」橘崎彰一先生古希記念論文集刊行会、1998年）。杉山氏の分類に則ると、107号遺構の経筒はA1型式にあたり、12世紀前半に位置づけられることとなる。

さて、104号遺構が、蓋と身を正しく組み合わせて、正置して埋納するなど、経塚と考えられることにについては異論はないだろう。問題は、これが営まれた時点での107次調査地点の景観・性格である。第2遺構検出面を見ても、遺構の上からは、何等特殊な要素は認められない。いわば、町中に唐突に営まれている、という感は拭えない。この類の簡単な経塚については、より日常的な埋納行為であったという可能性も考えて良いのではなかろうか。

本書を持って、御供所跡開跡地道路新設に伴う、博多遺跡群第102次・107次・120次調査の報告は完了する。とはいって、出土した遺物は膨大であり、そのすべてについて整理を終えたわけではない。また、期間・予算の制約から、本書からもれた遺構・遺物は多く、調査担当者として十分に意を尽くせたとは、およそ言い難い。いずれ機会を作つて、再論を期したい。

博多遺跡群第107次・120次調査出土の古代～中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院

中橋孝博

はじめに

日本でも有数の古い歴史を持つ港町、博多は、永年に渡るこれまでの発掘調査によって次第にその往時の姿を鮮明にしつつあるが、同時にまた相当数の古人骨資料が出土して、人類学的にも過去の住民に関する興味深い情報が蓄積されている。とりわけ全国的に出土例が少ない古代～中世初期にかけての人骨が出土する点で、貴重なフィールドと言えよう。今回、福岡市教育委員会によって1998年～1999年に実施された発掘調査により、また新たに古代から中世にかけての人骨が出土した。残念ながら少數の、しかも保存状態が悪い資料であったため得られた情報は限られたものになったが、精査する機会を得たので以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

今回人骨が出土した遺跡は、共に福岡市博多区上呉服町の旧砂丘上に位置し、福岡市教育委員会によって、1998年に第107次調査が、1999年に第120次調査が実施された。第107次調査区は聖福寺の西に接し、12世紀頃の経筒が出土している。また、第120次調査区はその境内に含まれるが、寺が建設される以前は旧河口近くの堆積層であり、塔婆状木製品等と共に人骨が流れ込んだものと考えられている。

出土人骨を表1に一覧した。10世紀から11世紀所属の人骨が3体で、12世紀のものが1体、それに16世紀のものと思われる未成人骨2体を加えた、計6体が出土した。人骨の計測は、Martin-Saller (1957) に従い、性判定には筆者らの方法(中橋、1988)を採用した。

表1. 博多遺跡群第107次・120次調査出土人骨

遺構番号	性別	年齢	時代	埋葬施設	副葬品
第107次調査					
133号-A	不明	小児	16C.	なし	なし
-B	不明	幼児			
159号	女性	老年～	10C.後半～	土壙墓	黒色土器碗1
			11C.前半		
310号	男性	老年～	10C.前半	土壙墓	土師器皿1、黒色土器碗1
311号	男性	成人	10C.前半	なし	なし
第120次調査					
B区最下層	男性	(成年)	12C.	なし	なし

観察・計測結果

I. 第107次調査

1. 133号遺構

埋葬遺構は検出されず、計2体分の未成人骨が、かなり乱れた状態で出土した。人骨の殆どはA号のもので占められ、ほぼ全身各部の骨を確認できるが、B号の骨は頭蓋片のみ検出された。

1-1、133-A号

保存状態は不良ながら、頭蓋を初めとして、ほぼ全身各部が確認された。関節した部位は無く、また寛骨のように移動の激しい部位はあるものの、南西から北東の方向に、頭蓋、上肢、下肢の順序で並び、元の解剖学的位置関係からそれほど大きくは外れない状況で検出された。頭蓋は土圧による歪みがあり、詳しい計測による検討は出来なかったが、一応、以下にA号の歯式を示しておく。

/ / M ¹ m ² m ¹ / / /	I ¹ I ² / m ¹ m ² M ¹ (M ²) /
/ / M ₁ m ₂ / / / I ₁	I ₁ I ₂ (C) / m ₁ M ₁ / /

(/ : 欠損、() : 未萌出)

乳歯がまだ残存しており、歯の萌出状況、歯根の形成段階から判断して、10~11歳程度の小児骨と見なされる。性別は不明である。

1-2、133-B号

頭蓋片のみで、前頭骨、頭頂骨、側頭骨の各破片と、顔面の左右頸骨、上顎骨が確認できた。歯式を以下に示す。

(I ¹)	(I ¹) (C)
/ / (M ¹) m ² m ¹ / / i ¹	/ / / m ¹ m ² (M ¹) / /

歯の萌出状況、歯根の形成段階から、2歳前後の幼児と見なされる。

表2. 大脛骨計測値 (男性、左)

	博多107 (古代)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		津雲 ²⁾ (縄文)		西日本 ³⁾ (古墳)		吉母浜 ⁴⁾ (中世)		九州 ⁵⁾ (現代)	
	310号	311号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 敗大長	-	-	60	430.9	19	414.1	3	426.3	18	419.1	59	406.5
2 自然位長	-	-	18	427.7	19	411.0	3	422.0	15	418.1	59	403.2
6 中央矢状径	27	30	162	29.7	47	29.0	22	27.2	19	28.1	59	26.5
7 中央横径	32	26	166	28.0	47	26.0	22	26.8	19	27.7	59	25.6
8 中央周	91	88	161	90.8	47	87.4	21	85.9	19	87.8	59	82.4
9 骨体上横径	-	30	115	32.6	43	30.7	20	29.0	19	32.1	59	29.4
10 骨体上矢状径	-	26	115	26.2	43	25.5	17	28.4	19	24.1	59	24.3
8/2 長厚示数	-	-	18	21.4	19	21.2	3	20.1	14	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	84.4	115.4	162	106.4	47	111.8	22	101.8	19	101.3	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	-	86.7	115	80.5	43	83.1	17	98.1	19	76.1	58	82.8

1) 白崎・永井(1989)、2) 池田(1988)、3) 織(1938)、4) 中橋・永井(1985)、5) 阿部(1955)

2. 159号

土壌墓から検出されたもので、頭蓋片と、左右大腿骨のみ遺存していた。頭蓋の左側に黒色土器碗が1個副葬されていた。遺存部から判断する限り、頭位は北東で、左右の大転骨近位端が開いていることから、一応、仰臥位で膝を緩く曲げた状態で埋葬されていた可能性が窺われる。頭蓋の縫合に癒合が認められるので、熟年以上であった可能性が高い。また、大腿骨がかなり華奢であることから、女性と見なされる。

計測結果を比較群と共に表3に示した。骨幹の諸径はほぼ現代人並で、粗線の発達は微弱であり、その断面示数の小ささが目立つ。骨体上部にも扁平性は認められない。

3. 310号

土壌墓出十八骨で、頭蓋の他、右鎖骨、右上腕骨、及び左右の大転骨と脛骨が遺存していた。頭の左側に、黒色土器碗と土器皿各1個が副葬されていた。頭位は東で、下肢は強屈して右に倒している。上半身は仰臥位の可能性もあるが、大腿骨の位置関係から、やや右側臥に近い埋葬姿勢が窺われる。歯の咬耗がかなり進行し、頭蓋縫合に癒合部位が認められるので、熟年以上と推定される。また、下顎の大きさ、四肢の太さなどから、男性と見なされる。

大腿骨の計測値が得られたので、比較群と共に表2に示した。骨幹の周計は太い大腿骨を持つことで知られる弥生人の平均を上回っているが、粗線の発達が弱く、骨体断面示数は84.4と非常に小さい特徴が見られる。

4. 311号

土壌墓出十八骨で、下肢骨及び一部の上肢骨らしき破片が検出された。一応、下肢を強屈していたことが窺えるが、上半身の状況が不明なので、頭位や詳しい埋葬姿勢は不明である。下肢骨の太さ、粗線の発達の良さなどから、男性と見なされる。一応、成人であったと思われるが、詳しい年齢は不明である。

大腿骨の計測結果を表2に示した。310号とは対照的に、粗線の発達が良好で、その断面示数は

表3. 大腿骨計測値 (女性、左)

	博多107 (古代)	北部九州 (弥生)		津需 (绳文)		西日本 (古墳)		吉母浜 (中世)		九州 (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 最大長	-	34	405.5	22	388.2	2	401.0	25	378.0	13	308.1
2 自然位長	-	11	403.0	22	381.7	2	401.0	24	375.8	13	375.9
6 中央矢状径	23	112	25.7	45	25.2	23	24.5	28	23.3	13	23.6
7 中央横径	26	112	26.3	45	24.2	24	24.7	28	24.8	13	23.2
8 中央周	74	111	81.5	45	78.0	23	78.1	28	76.1	13	74.2
9 骨体上横径	(28)	86	30.5	42	28.4	19	28.2	28	29.1	13	27.5
10 骨体上矢状径	(22)	86	23.2	42	22.2	17	26.6	28	20.9	13	21.3
8/2 長厚示数	-	11	20.8	21	20.3	1	20.6	24	20.4	13	19.8
6/7 中央断面示数	88.5	112	98.3	45	104.5	23	100.0	28	84.5	13	102.0
10/9 上骨体断面示数	78.6	86	76.4	42	78.2	19	72.2	28	72.0	13	77.1

115.4と、この時代のものとしてはかなり高い。骨体上部に扁平性は認められない。なお、計測は出来なかつたが、脛骨の骨体にもかなりの扁平性が認められた。

II. 第120次調査

B区最下層

埋葬遺構はなく、元々湿地帯であったところに人骨が流れ込み、集積した状況で検出された。頭頂骨、左右側頭骨、後頭骨の各破片が分離した状態で出土した。なお左頭頂骨の下部に歯骨（種不明）も検出された。

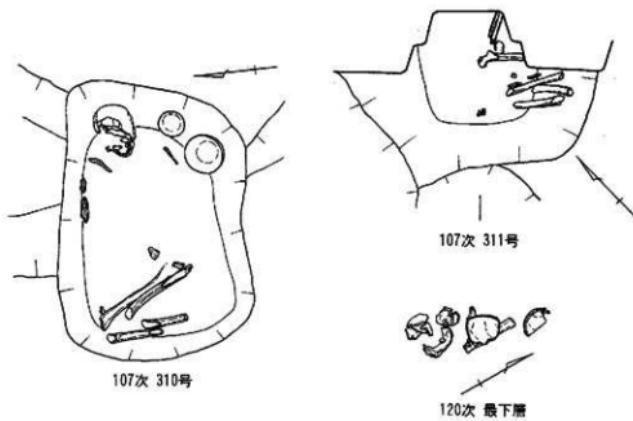
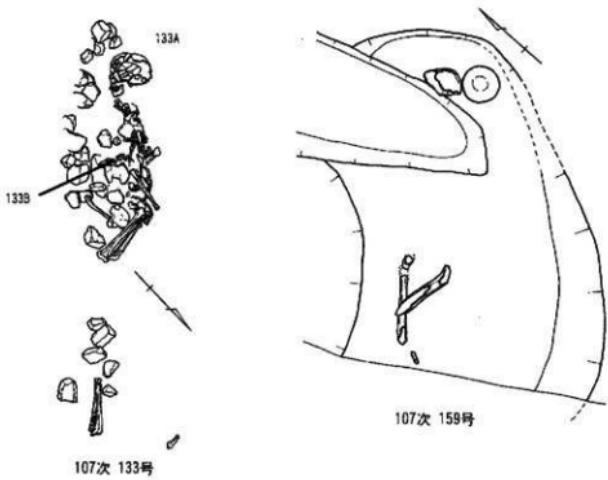
外後頭隆起、及び乳様突起の発達の程度から男性とみなされる。年齢については、不明確ながら、頭蓋冠の各部が縫合部で分離しており齧合の兆候が見られないことから、比較的若い成年期の人骨である可能性が高い。断片的な資料のため形態的な特徴については不明である。

謝 辞

当遺跡出土人骨について貴重なご教示を頂いた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝いたします。

文 献

- 阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2。
- 池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義呂先生古希記念論集）
- 城一郎（1938）：「古墳時代人人骨の人類学的研究 第三部 下肢骨」、人類学期報1
- Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 中橋孝博（1988）：「古入骨の性別判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人」「弥生文化の研究」1、雄山閣。



0 50 cm

第107次・120次調査出土人骨 (1/20)

博多遺跡群第102次調査出土の銅錢について

櫻木晋一

博多遺跡群第102次調査で出土した銭貨について報告する。本遺跡には一括出土銭と呼べる状況のものは存在せず、一造構から出土している最多のものでも第2面225の10枚である。出土総数は表2で示したように101枚で、一枚枚数も決して多いとは言えない。しかし、銭貨の出土地点が層位的に把握できており、これらのデータは流通銭貨の復元資料として活用できる可能性をもっており重要なである。

近年、出土銭貨研究の進展には目を見張るものがあるが、今後の新たな研究視点として、個別発見貨をどのように歴史資料として整備・活用していくかという問題が生じてきていると考えられる¹。偶然の機会に遺失された銭貨は、埋納錢などのように意図的選択がなされた銭貨ではないので、流通している貨幣の実態をより正確に反映していると考えられるからである。個別発見貨にはこのような遺失銭貨が多く含まれているのである。これらの銭貨を集め・資料化していくには、眞の歴史資料として有効なデータとなることは明らかである。都市遺跡博多は商品流通の拠点でもあり、その対価として使用される貨幣が実際はどのような種類のものであったのかということを解明することは、貨幣経済史研究上からも重要であり、そのためには考古学の果たす役割は大きいと考える。層位で時期決定を行いながら、それぞれの時期にどのような銭貨が存在・流通していたのかを研究することが、今後の重要な課題の一つであり、そのための基礎資料を提供するのが本報告のねらいである。

さらに、博多遺跡群第85次調査で出土した2点の無文銭についても、金属組成分析が完了したので、ここに併せて報告する。中世末のわが国では、商品流通の進展による通貨不足や銭貨そのものの貶賤化の結果、無文銭や模鋳銭などの流通量が増加してきたと考えられており、これらの銭貨については、その実態把握のために注意を払っていかなければならない。

第102次調査で出土した銭貨の総体的特徴は、遺存状態の悪い銭貨が多く、従って判読不能の銭貨数が多いということである。遺跡発掘の貨幣は総じてこのような状況であると言つてよい。鑄取りをすることによって文字の判読が完全にできたものは、47枚(46.5%)にすぎない。銭種の判別できたものは、開元通寶・元豊通寶・皇宋通寶など唐や北宋の銭貨が多く、大半が過去の出土銭貨データで上位25位に入る銭貨である²。この点では、備前銭研究結果とも一致する極めてノーマルな出土銭貨の状況であると言える。大型銭については、折二銭が少なくとも5枚は確認できているので、これまでの研究で明らかになっているようにその出土率が高いといえる³。中世博多には大型銭がもたらされているのである。無文銭については、確認できなかった。

本遺跡で特色ある銭貨としては、萬曆通寶の出土が挙げられる。明末・清初に鋳造された銭貨は鋳造量そのものが少ないとこの反映である可能性も高いが、明末に鋳造されたこの銭貨のわが国での出土例は少ない。管見の限りでは、萬曆通寶の出土地例は長崎市家庭裁判所敷地遺跡⁴・采町遺跡⁵など数例しか存在しないし、九州に偏在している。この銭貨は16世紀後半に、福建省からジャワに流入したことなどが知られており、広汎に流通していた銭貨ではあるが⁶、日本ではほとんど出土しない。当該期シナ海交易のカギを握っている貨幣なので、この貨幣の出土地点を把握していく必要がある。さらに銭貨鋳造の技術史的観点から見ても、これは重要な貨幣である。なぜならば、中国銭貨は明末の嘉靖通寶(1527年初鋳)以来、青銅銭から真鍮銭へと材質変化することが知られて

いるが、考古資料からその変化を確認する必要があると考えるからである。従って、表1のとおり本遺跡から出土した萬曆通寶を含め6枚の錢貨の金属組成分析を実施した。萬曆通寶以外の小平銭（一文銭）4枚については、外観観察で文字が稚拙なもの（天聖元寶）、仕上がりが悪いもの（祥符元寶）、孔が星のように見えるもの（開元通寶）、公鑄銭（熙寧元寶）、さらに大型銭である折二銭（政和通寶）1枚の分析を試みた。発掘された折二銭の組成分析は管見の限り過去になされておらず、初めての試みとして行った。それらの分析結果については次節に譲るが、結論だけを述べれば、考古資料からも萬曆通寶は真鍮銭であることを確認でき、折二銭についても中国本銭の金属組成と同一の範疇に入る事が確認できた。他の錢貨の分析結果も、中国公鑄銭の範疇に入るとの所見であるが、開元通寶は錫の比率がやや低いし、祥符元寶は鉛の比率が低いと考えられる。公鑄銭を溶かしたものを作たる原料とすれば、成分的には公鑄銭・私鑄銭の区別がつけられないという組成分析の限界も存在する。これらの資料について中国私鑄銭や国内模倣銭の可能性も棄てきれないと考えている。

出土銭貨は1面出土の萬曆通寶を除くと、最新銭が南宋銭なので、調査された本遺跡の主体的時期は14世紀の中期までで収まりそうである。これは第1面が14世紀前半から中ごろ、第2面が13世紀末から14世紀初め、第3面が13世紀後半頃という、遺構面の時期認識と一致する⁴。1面から3面までの個別層位間の時期差については、残念ながら貨幣からは説明できない。遺構として注目したいものは、2面225である。枚数が10枚と多いだけではなく、白色化したものを2枚確認できる。白色化はその成分に鉛分が多く含んでいる結果であると考えられ、錢貨に鉛の含有量が増加するのは、銅や錫の原材料不足と考えられている。鉛を多く含む錢貨の存在と、判読不能銭が大半であることを考え併せると、この時期には流通貨幣が貶質化・不足している可能性が考えられる。3面293は折二を含む北宋銭と南宋銭で構成されており、同様に1面050も2枚のみの出土ではあるが、南宋銭と折二銭の組み合わせで興味深い。これは博多で折二銭や南宋銭の使用頻度が高かった可能性と、恣意的にこれらの錢貨を埋納した遺構が存在する可能性を示していると考えられる。

博多遺跡群第85次調査で出土した無文銭については、発掘担当者が別稿⁵で考古学的所見を発表しているので、ここではその金属組成分析値について簡単に所見を述べる。表1のようにICP-AES法によって定量分析値が計測されており、重要な点は銅の割合が95%を超える純銅系の錢貨であるということである。本来の錢貨は銅・錫・鉛3合金系であるのに対し、中世末にわが国で生産された錢貨にはこのような純銅系錢貨が登場していく。大量の鋳型とともに出土した堺市の無文銭については、金属組成の計測値が明らかにされている。⁶これによると堺で生産されていた無文銭は純銅系無文銭である。博多遺跡群第85次調査地点は博多における銅製品や錢貨の生産地に比定されており⁷、16世紀に国内で生産された無文銭は、堺に限らず博多でも純銅系であった可能性が高い。この2点の無文銭に含まれる他の金属は少量であるが、この2点の鉛（Pb）錫（Sn）の量に差があり、鉄（Fe）砒素（As）銀（Ag）などの微量元素についても個体差が大きく、特徴が明確にできない。その特徴を把握するため、多くの資料を収集・分析する必要がある。また、これらの無文銭については、孔の縁が

表1 無文銭定量分析値 (ICP-AES法)

(μ g/g)

銭貨	Cu	Pb	Sn	Fe	As	Sb	Ni	Au	Ag	Zn
無文銭1	1000000	27000	150	2300	7800	110	2100	56	4800	68
無文銭2	920000	4300	2600	5900	2600	220	2200	15	76	66

打ち抜いたようにめくれている事実があり、鋳造方法などその製作技術についても再検討する必要がある。

今後、遺跡出土の個別銭貨についても、出土遺構や層位を明らかにすることにより、歴史資料として活用できると考えられるので、その報告が待たれる。本報告がそのための一助となれば幸いである。

本稿は、平成11～13年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）「九州・沖縄における中世貨幣の生産と流通」（課題番号11630083）の成果の一部である。

文 献

- i 森本芳樹 1998 「個別発見貨の意味——イギリス中世古銭学による問題提起と所領明細帳研究への波及——」『久留米大学比較文化研究』第21輯
- ii 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- iii 横木晋一 1992 「博多遺跡群の出土銭貨（1）」博多研究会『博多研究会誌』第1号
大型銭の流通問題については、小畠弘己（1997「出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通」『文学部論叢』第57号、熊本大学文学会）の考察がある。
- iv 長崎市教育委員会 1992 「家庭裁判所敷地地理文化財発掘調査報告書」
- v 長崎県教育委員会 2001 「茶町遺跡」長崎県文化財調査報告書162集
- vi 黒田明伸 1999 「16・17世紀環シナ海経済と銭貨流通」「越境する貨幣」青木書店
- vii 本遺跡の調査担当者である大庭康時氏のご教示。
- viii 大庭康時 2000 「博多遺跡群第85次調査地点における銭貨鑄造」『博多研究会誌』第8号
- ix 富沢威・鷲谷和彦ほか 1997 「中世銭貨の化学組成」『堺市文化財調査概要報告第61冊』堺市教育委員会
- x 福岡市教育委員会 1997 「博多57」福岡市埋蔵文化財調査報告書第522集

表2 博多連跡群第102次調査出土銭貨一覧表

番号	層位・遺構	銭名	折銭年	備考
1	1面008	□追元寶	995	草書
2	1面008	景德元寶	1004	
3	1面008	元豐通寶	1078	篆書
4	1面023	聖宋通寶	1036	真書
5	1面050	景德元寶	1260	背不明、白色化
6	1面050	判読不能		折二
7	1面058	元□□□		
8	1面084	熙寧元寶	1068	真書
9	1面108	泉口通□		
10	2面110	大觀通寶	1107	
11	2面126	紹聖元寶	1094	行書
12	2面136	聖宋元寶	1101	行書、折二
13	2面142付近	元符通寶	1098	篆書
14	2面166	元豐通寶	1078	
15	2面173	判読不能		
16	2面173	判読不能		
17	2面184	紹聖元寶	1094	篆書
18	2面195	紹聖元寶	1094	篆書
19	2面195	皇宋通寶	1038	篆書
20	2面203	判読不能		
21	2面203	元豐通寶	1078	行書
22	2面204	判読不能		
23	2面206	大觀通寶	1107	
24	2面212	開元通寶	621	
25	2面215	元豐通寶	1078	篆書
26	2面215	開元通寶	621	
27	2面222	元祐通寶	1086	篆書
28	2面225	判読不能	1/2残存	
29	2面225	祥符元寶	1009	
30	2面225	判読不能	細片、白色	
31	2面225	判読不能	細片	
32	2面225	淳□元寶	南宋	
33	2面225	判読不能	2枚銅着	
34	2面225	判読不能	細片	
35	2面225	判読不能	細片	
36	2面225	判読不能	1/4残存、白色	
37	2面225下振り下げ	判読不能	2/3残存	
38	3面256	□□□寶		篆書
39	3面267	判読不能	細片	
40	3面293	元豐通寶	1078	行書
41	3面293	聖宋元寶	1101	行書
42	3面293	判読不能		
43	3面293	□寧□寶	1071	真書、折二
44	3面293	判読不能	細片、1/2残存	
45	3面293	□定□□	南宋	
46	3面293, 295, 296	祥符元寶	1009	
47	3面293, 295, 296	判読不能		
49	3面293, 295, 296	判読不能	細片	
50	北側トレンチ	判読不能	1/2残存	
51	北側トレンチ	熙寧元寶	1068	真書

番号	層位・遺構	銭名	折銭年	備考
52	中央トレンチ	熙寧元寶	1068	篆書
53	中央トレンチ~5面	判読不能		
54	Bトレンチ黒ベタ層	開元通寶	621	白色
55	白央ベルト1~4面下	政和通寶	1111	やや白色、折二
56	中央ベルト	祥符元寶	1009	
57	中央ベルト~4面上半	判読不能		1/2残存
58	表採	判読不能		1/2残存
59	1面表採	判読不能		1/2残存
60	表採	判読不能		
61	1面	開元通寶	621	白色
62	1面	咸平元寶	998	
63	1面	萬曆通寶	1576	
64	1面	元符通寶	1098	
65	1面	判読不能		1/4残存
66	1面下	嘉祐通寶	1056	
67	1面下振り下げ	開元通寶	621	
68	1面下振り下げ	元豐通寶	1078	行書
69	1面下振り下げ	□□□寶		篆書
70	1面下振り下げ	判読不能		1/2残存
71	1面下振り下げ	判読不能		1/4残存
72	1面下振り下げ	判読不能		
73	1面下振り下げ	明道元寶	1032	真書
75	1面下振り下げ	景德元寶	1004	
76	1面下振り下げ	判読不能		1/4残存
77	2面	元祐通寶	1086	篆書、折二
78	2面	皇宋通寶	1038	真書
79	2面	判読不能		1/1残存
80	2面下	判読不能		1/4残存
81	2面下225振り下げ	人親通寶	1107	
82	2面下振り下げ	元豐通寶	1078	篆書
83	2面下振り下げ	判読不能		
84	2面下振り下げ	判読不能		
85	2面下振り下げ	判読不能		
86	2面下振り下げ	判読不能		2枚銅着
87	2面下振り下げ	判読不能		
88	3面	大聖元寶	1023	真書
89	3面下振り下げ	判読不能		
90	3面下振り下げ	天禧通寶	1017	
91	3面下振り下げ	判読不能		
92	3面下振り下げ	判読不能		
93	3面下振り下げ	判読不能		
94	3面下振り下げ	判読不能		
95	3面下振り下げ	判読不能		
96	3面下振り下げ	阜寧通寶	1038	
97	4面	皇宋通寶	1038	篆書
98	4面	元祐通寶	1086	行書
99	4面下振り下げ	判読不能		
100	4面下振り下げ	元符通寶	1098	真書
101	3面229	天聖元寶	1023	真書

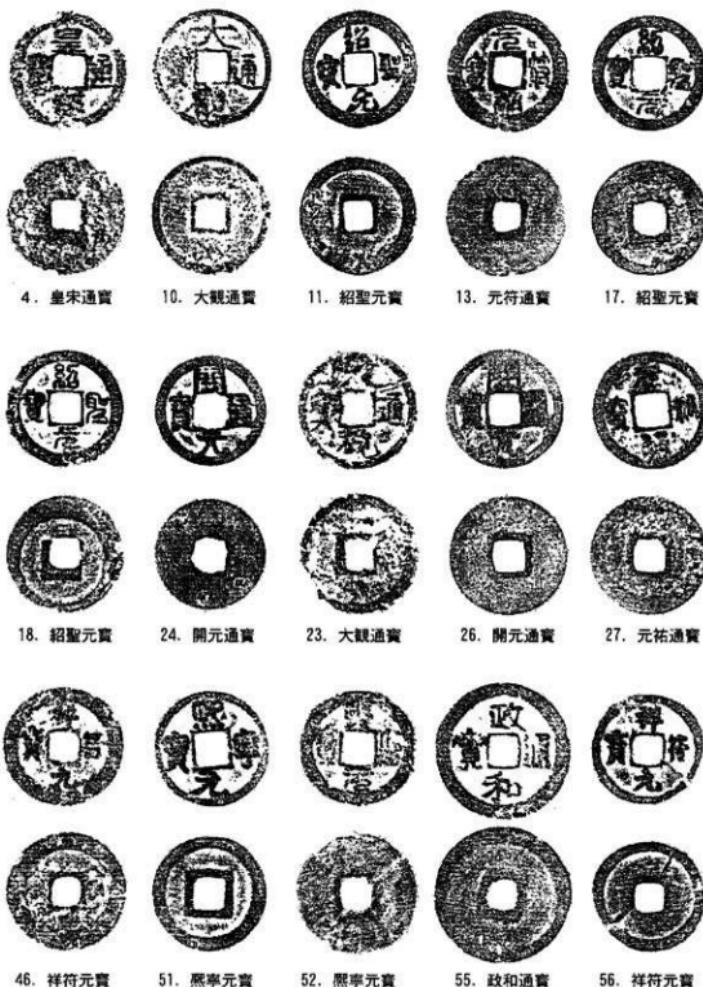


圖1 第102次調查出土錢貨拓本1 (1/1) (樑木石)

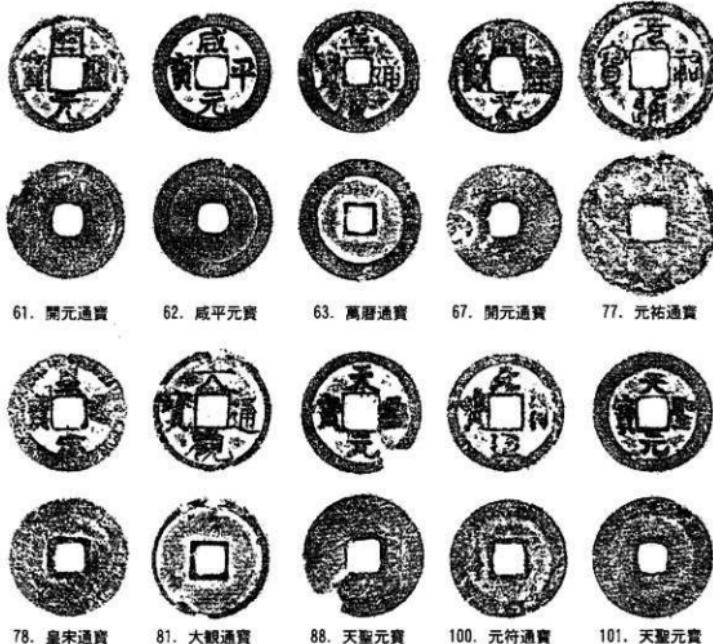


圖2 第102次調查出土錢貨拓本2 (1/1) (樣本拓)

福岡市博多遺跡群第102次調査出土銭貨の 誘導結合プラズマ発光分光分析法による分析

岩手県立博物館 咲山 まどか
赤沼 英男

福岡市博多遺跡群第102次調査から出土した銭貨について誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES 法) により分析を行った。以下にその結果を報告する。

1 分析資料

分析した資料は開元通寶他5点である。鑄で覆われてはいるものの、状態の良い完形品である。資料の形状、外観（拓本、写真）を図1に示す。

2 分析試料の調整ならびに分析方法

資料表面に付着している錆層をダイヤモンドカッタ・を装着したハンドドリルを用いて除去し金属面を露出させた。次にダイヤモンドペーストを使って上述の金属面を平滑にし、アルコールで超音波洗浄後、十分に乾燥した。このようにして得られた平滑な金属面から微量のメタル片を削り取り秤量後、硝酸で溶解し、塩酸を加え1モル溶液となるように希釈して試料溶液を作成した¹⁾。得られた溶液はICP-AES法により、銅(Cu)、鉛(Pb)、錫(Sn)、鉄(Fe)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、亜鉛(Zn)、金(Au)、銀(Ag)、コバルト(Co)、ニッケル(Ni)の定量分析を行った。

ICP-AES法の測定条件は以下のとおりである。

ICP-AES法（定量分析）

出力：1.1kW

アルゴンガス流量

プラズマガス：15l/min

補助ガス：1.01/min

ネプライザー：0.4l/min

3 分析結果ならびに考察

表1はICP-AES法による定量分析結果である。No.9、No.11、No.13、No.24、はCu分、Pb分、Sn分がそれぞれ61%～67%、8.6%～19%、6.7%～9.7%含有されており、また0.5%以下のFe分、As分、Sb分が検出された。No.7、No.21は上述の資料と比較するとCu分とSn分が55%～56%、1.8%～4.4%と少ない。Pb分についてはNo.7が27%と多く含まれており、No.21では2.4%である。さらにNo.7にはFeが3%、No.21にはZnが14%含有されていた。

この値を基に、主成分であるCu、Sn、Pbの3成分について含有量を100%に規格化し、ダイヤグラムにプロットした（図2）。図2に佐々木らによる輸入明鏡と国内模範鏡の化学成分組成範囲の概念図²⁾を重ねると、博多遺跡群の銭貨No.9、No.11、No.13、No.24は公鑄鏡領域に属することが明らかとなった。No.21は、Cu-Zn系合金であり、Cu、Sn、Znについてダイヤグラムにプロットす

ると図3のようになる。これについては今後、国内におけるCu-Zn系合金で鋳造されている錢貨のデータを参考にし、検討する必要があろう。

註)

- 1) 内田哲男、平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」『保存科学、29』1990, 43~49
- 2) 佐々木稔「出土錢貨の自然科学的解析法」『出土錢貨、7』1997, 93~105

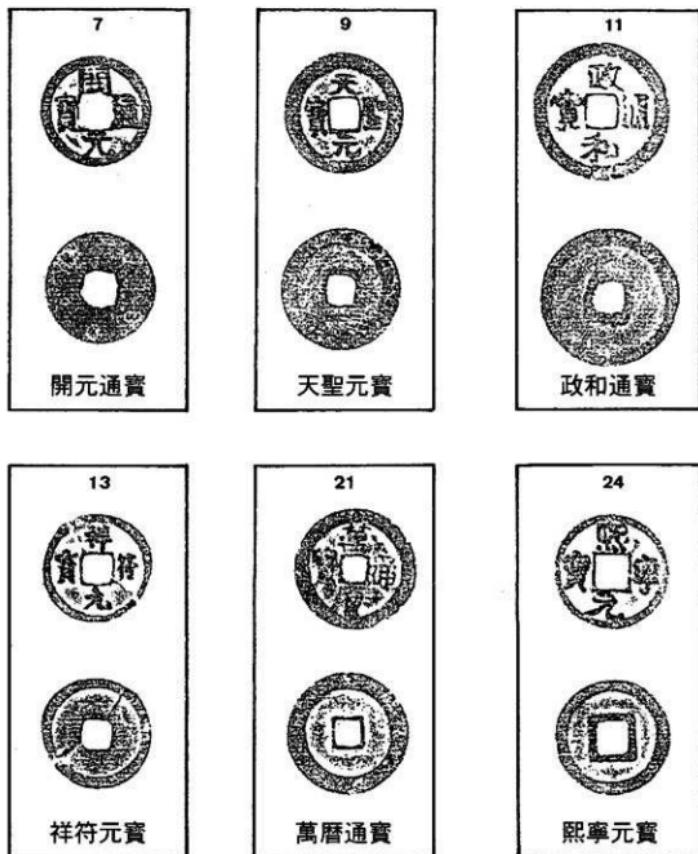


図1 資料の拓本 (1/1)

表1 ICP-AES法による古銭の定量分析結果

No.	資料名	化 学 成 分 (%)										合計	
		Cu	Pb	Sn	Fe	As	Sb	Co	Ni	Ag	Au		
7	開元通寶	56.0	27.0	4.4	3	0.05	0.14	0.0051	0.029	0.19	0.0013	0.5	91.3
9	天皇元寶	67.0	15.0	9	0.059	0.043	0.025	0.0062	0.052	0.012	<0.003	0.59	91.8
11	政和通寶	61.0	16.0	6.7	0.096	0.24	0.42	0.0048	0.02	0.052	<0.003	0.52	85.1
13	祥符元寶	67	8.6	8	0.046	0.024	0.024	0.0013	0.026	0.012	0	0.59	84.3
21	萬曆通寶	55	2.4	1.8	0.83	0.29	0.2	0.0051	0.084	0.011	<0.003	14	74.6
24	熙寧元寶	61	19	9.7	0.12	0.1	0.05	0.006	0.0079	0.027	<0.003	0.81	90.8

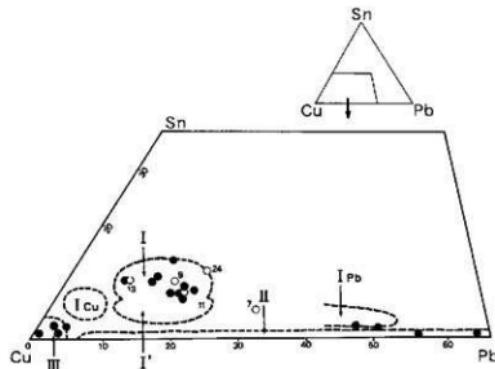


図2 分析した試料の三角ダイヤグラム (Cu-Sn-Pb)

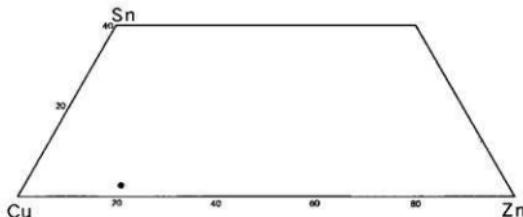


図3 分析した試料の三角ダイヤグラム (Cu-Sn-Zn)

福岡市

博多80

福岡市埋蔵文化財報告書第706集

2002年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 城島印房有限会社

福岡市中央区白金2丁目9-6



福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集

2002

福岡市教育委員会